

---

# SOUL DEEPERS

壬生京次

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S O U L   D E E P E R S

### 【Nコード】

N O 3 0 8 X

### 【作者名】

壬生京次

### 【あらすじ】

ソウリイーターの世界で、S・D・KYOのキャラを中心に様々な作品のキャラが大暴れをします。

## 緊張感ゼロの始まりってどうよ？（前書き）

作者の妄想垂れ流しだし、小説初投稿なのですが、それでもいいよって方は、暖かい眼で見てください。

緊張感ゼロの始まりってどうよ？

健全なる魂は

健全なる精神と

健全なる肉体に宿る

壬生再臨計画から数世紀後・・・陰陽堂廃墟から先代紅の王の心臓が発見された・・・

紅の十字を刻んだ心臓は、死神のいる街「デスシティー」の地下に封印された・・・

そして、今も尚、音を立てて、眠っている・・・

「まあ～ぶっちゃけ～今行方不明の鬼眼の狂ちゃんに頼まれて～封印しちゃただけど～

なあんで私に頼んだんだろ～あの子わけわかんないよね～マジ意味不明～」

この人は・・・というか、この黒い方が死神

通称「死神様」

死神武器職人専門学校略して「死武専」の校長先生である

「あつ説明そんくらいでいいよ～どうせプロローグとかあるんだしさ～」

あつそうですか。じゃあ、後はよろしくお願いします。

死神様以外全員「ズコーー！」

「君軽いね、真面目な正確かと思ってたんだけど、まあいつかこの作品自体作者の妄想垂れ流しだから。」

ポン！！

ポン！！

「じゃあ、次回から、張り切って、いってみようか！！！」

死神様以外全員「次回からかよ！！！！！」

**緊張感ゼロの始まりってどうよ？（後書き）**

期待していた方も、そうでもない方も、本当にすみませんでした。  
明日からキッチンと第一話から入って行きたいと思います。

大まかな流れもできているので、大丈夫です。

だから、期待してた方もどってきてください。

お願いします。

## 第1話 課外補習 水の亡霊を打ち破れ その1 (前書き)

先代紅の王「長らくお待ちしました。第一話スタートします。時代背景などは、後書きで説明させていただきます。」

## 第1話 課外補習 水の亡霊を打ち破れ その1

ここは、「デスシティー」死神様の管理の元、多くの人達が住んでいる。

武器 職人 人間 侍 超能力者等多くの者が存在する。  
そんな中、死神様の武器、「デスサイズ」を作ろうとしている少年と、少女がいた。

ジリリリリリリリリリ！！！！

ガンッ！！

「んあゝ、魂超うめゝ」

この超熟睡中で、銀髪の少年は  
ソウルIIーター

武器であり魔鎌である。間違っても「オカマ」と言わないように

「ソウル君、早く起きないと遅刻しちゃうよ？  
それとも、このままブレアといい事しちゃう？」

このソウルのお腹のうえに乗っているエロい猫魔女？は

ブレア



魔力がこもった「猫」である。けっして魔女ではない

「ブッブレアやめろ！！こんなのマカに見られたら・・・」  
そして・・・

ガチャ！！

「ソウル♪早くご飯食って学校行こ・・・うよ・・・」  
彼女が、ソウルの職人。

「マカⅡアルバーン」  
である。死武専一の優等生なのだが・・・

バキッ

ガッシャアアアアアアアアン！！！！！！

「ソウルのばかああああああああ！！！」

コンビ仲は、あまりいい方ではない。

「こんなの・・・COOLじゃねえ・・・」

と、ソウルは呟いた。

K I L L ー コ ー シ カ ー シ コ ー シ

K I L L ー コ ー シ カ ー シ コ ー シ

「おい、マカ」

「うるさい、今本を読んでいるの。邪魔しないで！」

「何怒ってんだよ？ガリ勉野郎」

「うるさい、オカマ野郎！」

「それをパートナーに言うか？普通！！」

と、いつも通りにケンカしていると、

「おゝ、また夫婦喧嘩か？」

「夫婦愛熱烈だな」

ソウル&マカ「誰が！！」

と、彼らのクラスメートの、「遠野志貴」と「上条当麻」が冷やかにしながら来た。

メガネをかけた少年は

遠野志貴。月姫の主人公で、遠野家という大きな家の長男である。ここでは、かなりエリートな生徒である。

そして、もう一人のウニ頭の少年は

上条当麻。とある魔術の禁書目録の主人公である。

ここでは、ソウル同様あまり成績は良くないようだ。

「そういえば、聞いたか？ソウル、マカ。」

と、志貴は二人に聞く。

「え？何が？」

「最近、死武専で噂になってる、ほら、濃硫酸のプールで死んだ先輩の話。」

「どんな死に方だよ・・・」

「俺も、最初聞いた時に、本気でそう思ったぜ。」

ソウルと当麻は冷静に突っ込んだ。

「ああ。アレね、辰怜先輩の。自爆事件ね。それがどうかしたの？ 遠野君？」

「実は、それに関して、マカとソウルに超大事な話があるからって死神様が来いっていったんだ。授業は、今日はいって。」

「え？ 何だろ？ まあ良いや。とりあえずいつてくる。」

また後でね、上条君、遠野君。」

「ああ。後でな。」

こうして、ソウルとマカは、デスルームに行った。

そして、デスルーム

「失礼しまーす。・・・何だろうね？、大事な話って。」

「知るかよ、そんなこと。」

そうこう話をしていると

「ふっ、背後に隙を見せるとは、油断大敵だぜ！！マカよ！！その

首もらうぜ!!」

ブラック☆スターが、命を狙っていた。だが・

「あ、ブラック☆スターいたんだ。あんたも呼ばれたの？」

「お前、そこでなにしてんだ？」

あっさりソウルとマカに気づかれた。

「ほらー、そうやって大声出すからチャンスなくすんだよ。」

この和風美女の女の子は「中務椿」

暗殺魔武器で、ブラック☆スターのパートナーである。武器としての型が多く統一していない。

「くっ、暗殺に対する期待感と、目立ちたい意欲が混ざってチャンスを手放したか!!」

そして、この目立ちたがりの少年が、「ブラック☆スター」椿の職人である。

実力は誰もが認めるが、実績は、魂ゼロである。

「どうやら、呼ばれたのは俺たちだけのようだな。」

と、ソウルは確信した。

「うん、そうみたい。じゃあ、死神様呼ぶね。」

そして、マカは鏡に番号をなぞった。

プルルル プルルル

ガチャ

「チーす!! 皆さん元気く??」

死神様が出た。

「おはようございます。死神様。何ですか?お話って?」

「うん。それなんだけどさくまず、君たちの義務って何?」

「死神様の為に、99個の魂と、1個の魔女の魂を集め、デスサイズを作り出すことです。」

「ウンウン。よく分かってるね♪

でも、君達の今現在の魂の数って・・・ゼロじゃん?」

「・・・あはははは・・・」

ブラック☆スター以外全員乾いた笑しかでなかった。

「というわけで君達には、補習を受けてもらいます?!!」

「えくくくくく!!!!補習くくくく!!!!?」

ブラック☆スター全員驚きを隠せなかった。そもそも死武専では、補習を受けること自体醜態なのだから。

「はい、補習です♪ 補習内容は、君達も聞いているよね？辰怜君のこと。」

と死神様は言う。

「辰怜先輩の自爆事件ですか？」

「そう、マカちゃん。それなんだけど、実は、何者かの手によって復活しちゃったわけなのよ。それで、後輩にも同じ目に合わせてやるって、墓地で大暴れして困るのよ。」

「分かったぜ死神の旦那！！ようは、その辰怜ってやつとそいつを蘇らしたやつをぶつとばせば良いんだろ？」

「はい、そゆこと。流石ブラック☆スター話が早いね。あ、ちなみに、このミッション失敗したら、君達退学だからね♪」

「エエーーーー！！？退学ーーーー？？？！！！」

「じゃあガンバツてねー♪♪」

なんと死神様直々のある意味死刑宣告。マカ達に挽回できるか？次回に続く





## 第1話 課外補習 水の亡霊を打ち破れ その1 (後書き)

先代紅の王「はい、第一話をお読みくださってありがとうございます。しました。」

それでは、時代背景説明をしましょう。

時代背景は、以下の通りです。」

ソウルイーター……ソウルが魂ゼロのあたりからスタート。

S・D・KYO……壬生再臨計画から後のオリジナル設定で狂の力で壬生一族のものを復活させ、人間の仲間が死んだ後、行方不明になった。もちろん、死んだだけで出番がないわけではない。その他……基本的になんでもあり

先代紅の王「質問や、キャラのリクエストなどがあれば感想欄の一言にお書きください。では、第2話までごきげんよう。」

## 第2話 課外補習 水の亡霊を打ち破れ その2 (前書き)

先代「さて、いよいよ、初のバトルシーンです。

マカたちは、果たして退学を逃れるか？

そして、オリジナルの技も出ます。

では、SOUL DEEPERS 第2話をどうぞ。」

## 第2話 課外補習 水の亡霊を打ち破れ その2

そして噂の墓地

「オラッさっさと出てこい!!」

熱血で水オタクの辰怜大先輩よー!!!」

ソウルは、完全に壊れていた。

「なあ、椿。あいつ動き回ってんだろ?なんでこんなところに来て  
いるんだ?」

「辰怜先輩は、元は規律を守る熱血風紀委員長だから、案外落ちこ  
ぼれの私達を、正面から待っているんじゃないかなーと思って。」

.....ゴポッ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴ

「退学になってたまるかよ!! 出てこいや!! テメエーの指導まともにも聞いたことがねえーんだわぎやははははは!!」

(ソウル君・・・壊れている?)

壊れてしまったソウルに、若干引いてしまった椿だった。

「私、お母さんみたいに、立派な鎌職人目指していたのに、お、お、お、落ちこぼれ・・・」

マカも、精神がほぼ崩壊していた。

「あいつ、何しよげんでんだ?」

「ブラック☆スターは、少しは気にしよ?・・・ね?」  
椿も、だんだんと虚しくなってきた。

・・・ゴゴゴゴゴゴゴ

「なあソウル、辰伶の墓にションベンでもひっかけてやろうぜ♪ひゃっははははは!!」

「オウオウ!! やってやれ!! ついでにクソもひねり出せ!! CO



「わああ!!!!」

マカは、いきなり出た辰怜に足を掴まえられた。

「怖いか?・・・怖いだろ?!」

そう言いながら、辰怜は、舞曲の太刀をだしマカに斬りかけた。

「えっ!？」

「オオオオ!!!!」

ソウルは、変身しながら辰怜に向かった。

「っ!!!!チィィ!!!!」

「ありがとう、ソウル。助かった。」

「おう!!!!」

「奇襲は、失敗か。まあ良い。次こそ殺す。」

辰怜は、そう言いながら、両手に舞曲の太刀を揃えた。

（・・・あれが辰怜先輩??? 皮膚が焼きただれて昔の面影があんまりない。）

そう。辰伶の顔や腕の皮膚は、濃硫酸によって、少し火傷のあとがあった。

「マカとソウルとブラック☆スターに椿か。おはよう!! こんにちは!! こんばんわ!! あいさつは、キチンとやる。それが国によって定められた規律だ!!」

一方デスルーム

(うるせえあいさつだ!! 椿!! 俺たちもいくぜ!!)  
(はい!!)

「・・・始まったね・・・」

デスルームで4人の戦いを見ていた。

そして・・・

「なんであんなことをしているの?? 先輩!？」

マカは、そう聞いた。しかし

「ピーーーーー!! ゾンビはいいぞ! いろんなことを無視できる。俺の指導を始めるぞ。お前らの規律をもう一度立て直してやる!!」

辰怜は、はぐらかす様にそういった。

「いいぜ。久しぶりに見せてやる。お前の小さな規律に収まりつかないぐらいの、俺様の生活態度をな!!」

「こっちは退学がかかってんだ!! 受けてやるよ!! テメエーの暑苦しい、うぜえ指導をな!!」

「無駄な努力はやめるんだな。どうせいつかは死ぬんだ。ゾンビになればその恐怖からぬけられるんだ。お前もそうゆうのは、一度は欲しかったはずだ!!」

「そんなの間違ってる!! 規律を守ってた先輩は、そんな事いう人じゃなかった!!」

次の瞬間

「聞くより覚え!!」

(?! なんで?! 全然関係ないところに?!)

マカは、驚いた。それもそのはず。辰怜は、マカの身体の隣に刃を振り下ろした。

しかし、首とちょうど同じ場所にきた瞬間。

シュン!!      カクン!!



(えっ! ?)

「とりあえず、死ね!」

刃の角度が変わり、マカの首に向かった!!

「マカ!!」

ガキィ!!!!

「!! ブラック☆スター!!」

ブラック☆スターが攻撃を防いだ。

「俺は、結構せっかちだから!! さっさと終わらせるぜ!!」

ガキィ!!!! ガキィ!!!!

「おわあ!!!!」

「わああ!!」

ズザザザ!!

「ゴメン。ブラック☆スター・・・」

「お前 小物 俺 大物 気にすんな!!」

「さっさと諦めろ。所詮お前ら「下級生」では俺には勝てない。」

「ゾンビだろうが魂食われちまえば終わりだろうが!!」

ソウルがそういうと。

「・・・やっぱり辰伶先輩は強い・・・私達下級生と違って、先輩は「元五曜星」だった…」

マカは、改めて辰伶の強さを認めた。

「流石は、大先輩だな。だけど先輩がこんな虐待じみたことをしてもいいのか?」

「これは虐待じゃない、後輩のための指導だ!」

そう誤魔化した。

「ピーー!!」 さて、2つめの指導をはじめよう。この指導が終わる頃には、お前らも死ぬぞ。」

マカたちは、死刑宣告された。

そして、もう一方

マカ・ソウル宅 浴室（入浴中）

「パンパンキン♪パンパンキン♪ ブラシさん？」

「ヘイ！」

「次は足を洗って？・・・暇ね〜ブレアも学校行こうかな〜」

（マカとソウル君楽しそうだな〜）

そして墓地

ガキィ!!! ドコ!!! ズギャン!!!

「どうした!!! 二人掛かりなのに息が全くあってないぞ!!! しかも、「魂の波長」がバラバラだ!!!」

「魂狙っている相手にアドバイスですか!!!?」

「俺は、お前らの先輩であり、熱血風紀委員長!!! 学校のレベル向上のためならば手段は、選ばない!!!」

そう言いながら、ブラック☆スターに猛スピードで近付いた。

「な!!!」

「俺のとおきをおきを入れてやる!!! くらえ!!!」

舞曲の太刀 「激水龍の舞」

ズババババババババ!!!

「ガァァ!!!」

「ブラック☆スター!!!」

（ただでさえ避けにくい舞曲の太刀をフルパワー、フルスイングでこうげきするなんて・・・ここまで戦えるものなの?）

・・・これが五曜星・・・

「ピーー！！・・・指導も終わり・・・お前もそろそろ死ぬか？」

「・・・・・・・・」

「どうだ？死は怖いだろ？ゾンビになれば死から逃れられるぞ！」

むくり・・・

「ブラック☆スター！！！」

（プチッ）

「あー！！！！アツタマ来たぜ・・・ごちやごちやうるせえ熱血  
野郎！！！」

お前の指導なんて最初から始まってねえんだよ！！オレ・オン・ス  
テージだろが！！！」

ドズルルルルルルル！！

「！！！？鎖鎌か！！！」

「下級生も五曜星もかんけえーねえー！！！！」

ブラック☆スターは、鎖鎌で逃げ道をふさいだ。

タンッ      タンッ      タンッ

「俺はー！！！！ブラック☆スターだ！！！！！！」

ドゴォー！！

「ガァー！！」（人体の中心線上の急所の一つ水月（鳩尾）をてきかくにうちこんできやがった！）

「流石ブラック☆スター。暗殺術に長けてるわ」  
マカは、改めてブラック☆スターのセンスに驚いた。

「休ませねえ！！椿！！モード「手裏剣」！！」

「はい！！」

ボン！！

「ヒyahア〜☆」

ブン！！

「甘いな！！こんな攻撃、ぬるいわ！！」

バッ！！

マカたちの所に飛びついた。

「マカ！！ 来るぞ！！」

「うん！！」

「死ぬがいい！！」

舞曲の太刀 「激水龍の舞」

ズバババババババババ

ガキィ！！！！

「な・・・何いい！！」

マカは、鎌の端と端で、舞曲の太刀の隙間にいれ、攻撃を防いだ。

「恐怖心があるから、人は誰もが強くなろうと思うんだ!!」

タン!!

ゲシ!!

「ぐっ!!」

デスルームのなか、死神様は言った。

「恐怖」を感じないというのは普通は無謀な事だけど・・・マカち  
ゃんには・・・「恐怖」と戦う

「勇気」がある!!

ドン!!

「ぐあああ!!」

そして

「マカ!! アレをやるぞ!! 「魂の波長」を合わせろ!!」

「でも、アレはまだ一度も成功してないよ?」



「できる!!俺たちならやれる!!」

ガシャ!

「うん!!」

共鳴」!!

「魂の

「!!?」

「バカな・・・あれは!!」

(これは!!)

鎌職人 伝統の大技 「魔女狩り」!!!!

しかし・・・

カクンッ

「いっ・・・やゝん」

ポーーーーン

ズギヤア!!

「いやあああああん!!!!」

(・・・・)

ズババババババババ!!

(・・・)

先に沈黙をぶったのはブラック☆スターだった。

「何しやんだ!! 殺す気か!!」

「もう!! ソウルのせいだからね!! バーカ!」

「はぁ!? ざけんな!! いかれてんじゃねえの!? 死ね!!」

「死・・・死ね!? ヒドイ!! お前が死ね!!」

「うるせえ!! 焼け死ね!!」

「気が付いてはいたさ!! お前らが俺様のBIGな魂を狙っていたのな!! ひゃっはっはっは☆」

(だれか・・・)

椿は飽きれて声も出なかった。

しかし辰怜はマカたちの話を聞かず・・・

(魔女狩り・・・なんて威力だ・・・)

魔女狩り威力に感心していた。

そして

「私は、大技なんかせず、シンプルにいきたかったのに」

「COOLな男はバクチ人生だろうが!!」

気を改めて辰伶に攻撃をしかけた。

「魔女狩りで俺を倒そうとしたのは褒めよう。だから俺も水龍を使ってお前らを倒す!!いくぞ!俺の「水舞台」を楽しめ!!!!」

無明歳刑流

水破封龍陣

ゴオオオオオ!!

水龍がマカたちを襲う

「こんな遅い龍で私達は倒せないわよ!!」

ズバァ!!

マカたちは、水龍を斬った。しかし・・・

「バカめ。こっからが本番だ」

「何!？」

グシャグシャ!バシヤアア!!

水龍は、溶けて墓地一面を覆うくらいの水たまりが出来た。

「水たまり？なんでこんなものを？」

「知るか！！それより辰怜がないぞ！！」

気がつくとも辰怜がない。

「しっかりしてくれよ。マイマスター？」

ソウルは冷やかすように言った。

「・・・うるさいなくわかってるよ・・・」

「・・・」

ゴポツ

バシヤアアア！！

「えっ！？」

ズバツ！！

「がああ！！！」

「マカ！！」

バシヤアアア！！

「クソ！！また水たまりに消えやがった！！！」

なす術なしのマカ。しかしブラック☆スターは

「……」

「ブラック☆スター……」

「ああ、わかってる。

辰怜がやってるのは「暗殺道其の一」!!」

「闇にまぎれ、息を殺し……目標の隙をうかがうべし。」

「椿!! 奴の一步先にいくぞ!!」

「はい!」

ふっ ふっ ふっ ふっ ふっ

(……!! 何……!! ブラック☆スターの呼吸法が変わった? ……  
・このリズム、辰怜先輩の!!)

「何が「水舞台」だ水ゾンビが。最初から最後までずっと「俺舞台」  
だろうが。主役は、二人もイラネェんだよ。  
俺が目立たねえ。」

罌☆星

「暗殺道其の二  
目標と同調し目標の思考・行動を推測せよ。」

コオオオオオオオオオオオ・・・

(集中しろ・・・聞こえるぞ奴の「魂の波長」が)

ふっ ふっ ふっ ふっ ふっ

(・・・「椿」を通して伝わってくる)

「・・・・・・・・・・」

(・・・呼吸が止まった・・・)

(来る・・・)

ゴポッ      ピシャアアア!!

罨☆星      発動!!!

「食後に防腐剤でも飲んでおけ 海水の匂いがプンプン臭う。」

捕獲！！！

「ぐううう！！バカな！！！」

辰伶は掴まえられた。しかし・・・

「いっ・・・」

「ひゃっはっはっ☆」

「コラー！！私も捕まえるなー！！」

「邪魔者はお前らも同じだ。」

そして、デスルーム

（早くはなせ！！殺してやる！！）



(ひゃっはっは)

「ふむふむ。とりあえず、一段落かしら♪」

「ふうん。あとは、辰怜さんを蘇らせた黒幕でしょ？」

「そそ♪」

「誰なんだい父上」

ウリウリ パタパタ

「コラ・・ジツとしてな」

「う？」

この三人組のうちの少年は、

死神様の息子 「デス・ザ・キッド」

通称「キッド」

次期死神候補である。

そして、残り二人の姉妹は、キッドのパートナー  
トンプソン姉妹のリズ（姉）とパティ（妹）

どちらも武器としては、「二丁拳銃」である。

「辰怜さんを蘇らせたんだ。只者じゃないんだろ？」

「・・・・・・・・」

そして、墓地

「言え！！コラ！！誰が蘇らせんだよ！！！」

「早く行った方がいいですよ・・・」マカチョウプ「は痛いですよ」

そう言いながら、マカは、本を準備した。

「どうした？ずいぶんとやる気だな？」

「お前がおいしいトコ全部持ってたからだよ！！！」

あれも、ある意味おいしい役と思った方は、すくなくないはず。

「俺は絶対口を割らん！！侍として、恩の忠義は必ず返さんといかんからな！！！」

ピクッ ピクッ

「何熱く武士道たぎらせちゃってんだよ。死んでるくせによ……」

「……（イライライライライラ）」

ソウルとマカもだいぶイライラしてきた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

（COOLな男としてこのままじゃ終われねー。こいつの口は俺が絶対割らす。）

「………ほれ」

チラッ

「あっ／＼／＼／」

椿の服がめくれ下着が丸見えになった。

「ぬぁ／＼／＼！！……ぐう……遊庵様だ／＼／＼！！」

「よし！」

（秒殺かよ……／＼／＼／）

「そいつどこよ？」

「いまのは、不意打ちだったが、今度こそ絶対にわらん！！」

（クソ！！今度こそ負けられねえ……）

そして、マカにもおなじことをした。

「さぁ・・・場所どこだ？速くこいつに言ってやれ。」

「・・・は？」

「何か言えよ！！」

大失敗に終わった。だが・・・

「気にするな、誰もあんたを攻めねえよ。」

「武士をなめてるかと思ってきれるところだった・・・」

「今の行為は間違いなくCOOLじゃない・・・マカ・・・殺してくれ。」

タン！！ タン！！ タン！！

「ああ！安心しろ全員殺してやる！カドで！

三秒後

「遊庵様は、町外れの「落人村」にいます。ごめんなさい。（早口）

」

「ごめんなさい。」

「ごめんなさい。」

町外れの落人村・・・ごめんなさい・・・なさい・・・さい・・・  
女王様・・・

プツン

「やや！犯人わかったね♪」

「何か変なフェードアウトで終わったけど・・・遊庵様・・・  
聞いた事ある・・・何者？」

「手強いよぉ彼は・・・」

落人村

「おっしゃー！！遊庵の兄貴いっちょ行っただれー！」

「おっしゃー！！遊庵、百枚瓦割いっきまーす！！」

「ヒュー！兄貴カッコいい！！」

デスルーム

「ねえ？キッド、壬生一族のグループで神と呼ばれた「大四老」って聞いた事ない？」

「うん。壬生一族の中でも神がかりに強い人たちが集まった・・・ってまさか！！」

「そう。遊庵は、大四老の中でもトップクラスの实力者で最後に大四老に入ってきた人だよ。」

落人村

ザッ！！

「遊庵の居場所はここね！！」

第2話  
〜完〜





## 第2話 課外補習 水の亡霊を打ち破れ その2（後書き）

先代「SOUL DEEPERS 第2話をご覧くださいありがとうございます。」

さて、それではオリジナル技の解説をしたいと思います。

辰伶のオリジナルの技

舞曲の太刀 激水龍の舞

不規則の太刀の動きを利用し、相手を惑わし、動けなくさせる。  
そして、全部の振りを全力でそして自身の持つ最速の振りであいて  
を斬り刻む。

モデルの技

るろうに剣心の剣心の九頭龍閃と蒼紫の流水の動きを参考にしました。

解説はいじょうです。

前回同様質問や、リクエストがあれば、感想の一言にお書きください。

それでは、第3話をお楽しみに。」

### 第3話 神への挑戦 ぶっ放せ魔女狩り その1 (前書き)

先代紅の王「ついに黒幕が分かったマカ達、遊庵とは一体何者なのか？そして、彼の魂を回収できるのか？第3話始まります。」

### 第3話 神への挑戦 ぶっ放せ魔女狩り その1

「遊庵・・・強いよ・・・マジで！」

と、死神様は言った。

「神と呼ばれた大四老の中でもトップクラスの体術使い・・・」

「そいつの魂をとって来いって言うんだろ？」

「でも、お姉ちゃんなら楽勝だね？」

「な!?! 私はしがいない武器だよ? パティーはお姉ちゃん買い被りすぎだぞ? 無難に即死だよ!」

リズはパティーの無茶ぶりに困惑した。

「父上・・・補習にしては、その課題・・・きつくはない？」

「・・・」

キッドの問いに、死神様は沈黙を守った。

「間違いなく、死ぬよ・・・」

## 落人村

「遊庵の兄貴、何か面白いことをしてくれよ!!」

「おっし、じゃあ俺の大好きなサンマの笑い声のモノマネを・・・  
おっと、来たか。」

「ん? どうした? 兄貴?」

「悪い、客だ。あとはお前らでやっといてくれ!」

そう言い、遊庵は、宴会を後にした。

そして、マカたち

「ここに遊庵は、居るんだな」

「さっさと魂回収してかえろうぜ。」

「遊庵ってどんな人だろ」

マカがそう思うと

「どうせ落人村にいるぐらいだ。ろくな人間じゃねえ。」

ソウルは、そう皮肉った。すると

「ほう？　いってくれるじゃねえか！」

「誰だ？　（気配が全く感じられなかった！！）」

遊庵が現れた。

「お前が遊庵だな？　お前の魂食いに来た。」

「お前等、死武専のガキどもだろ？」

（この人なんで目にバンダナをつけているの？）

「あなたでしょ？　死武専の生徒を襲ってるのは？　なんであんなことをしたの？」

「あんなこと？　・・ああ！　辰怜のことか。別に？　理由なんてないぜ？　俺は遊べればそれで良いんだよ！　もちろん、魂も死体もな？」

ビクッ

「ねえ？　ソウル、なんか変な感じしない？」

「ん？　そうか？」

「ケケケ♪お前等の魂ずいぶん安定してないな♪真面目で頑張り屋

とひねくれやで皮肉屋の魂。共鳴してるようでしていない。」

「何！？生きてる人間の魂が見えるのか？」

「しかも、性質まで見抜けるなんて超一流よ！」

「ケケケ♪俺は目が見えんが、心眼を極めて、人を心で見えるだけじゃなくて、魂までみえるようになったからな。」

（そのためのバンダナが。）

「マカ！！お前もバッチリ見えてるんだろ？な！！」

「・・・も・・・もちろんよ・・・；」

「お！？ずいぶん魂が動揺したな。かゝわいっ？」

「うるさーい！！見るなゝ！！／＼／＼」

マカが動揺していると

「うるせえーうるせえー！！凡人どもの会話は終わりだ！！これからは俺様が中心の話だ！！」

「いつのまに・・・；」

ブラック☆スターがゴミのてっぺんで叫んだ。

「魂が見えるか見えないかしらねえけどよ、俺は俺の魂が見えてりやそれでよし！！」

「ほう？お前の魂すごいな〜ものすごく自己主張の激しい魂だ。」

そう言っていると、ブラック☆スターが奇襲をしかけた。

「ひゃっはっ☆」

「おめえのような魂に合うパートナーなんてそんなにいねえんじゃないか？」

そう言い、ガードした後、ブラック☆スターに強烈なカウンターをした。

「ぐっ、うぐあ！！！！」

「ブラック☆スター！！！」

チラッ

「ああ！なるほど、姉ちゃんがあいつのパートナーだな？」

「！？」

「人を受け入れる器が大きい。姉ちゃんがあいつの魂の波長に合わせてるんだな？」

「てめえ本当に何者だ！？」

「さ〜てこいつ等のことは大体わかった。俺の魂が欲しいんだろ？  
・死合をするか？」

ここはキャバクラ「チュパ？キャバクラ」

「だゝはっはっは、お酒きれちゃったよ♪」

「パパさん早いな♪ちよっと待ってね、パンパンピンク♪パンピンク♪ヒョイ♪」

「デスサイズ殿、少し飲みすぎでござらんか？というか、なんで拙者を読んだのでござるか？」

「お前しか暇がなかったからな。大丈夫薫ちゃんには内緒にしとくからな♪」

ここにデスサイズとブレアと剣心がいた。

緋村剣心は「るろうに剣心」の主人公である。

ここでは、死武專の体育教師であり、マカとデスサイズのよき相談相手である。

「そういえば、今日は学校に行ったでござろう。マカ殿とはうまくいったか？」

「・・・ウルウル（涙）」



「おろ？」

「無視された・・たまたますれ違って挨拶したけど無視されたよ。あの子パパが何をやってもプンスカ怒るんだ。」

「クスマカったらかっわい？」

「しかし、先月に離婚が正式にきまったでござろう。気持ちを切り替えるでござるよ。」

「切り替えるって言っても、親権も完全に元かみさんのものだし、何もいらないうんだぜ・・俺はマカの何なんだよ・・・」

「そんなことはないわよ、お金を出すのが親の仕事じゃないんだしさ♪」

「じゃあ、ここは離婚の原因になった女癖をなおして新しい妻を見つけるでござるよ。頑張るでござるよ！」

「そんな・・再婚なんて考えられないよ、ぐすん。・・こんな日々、シュタインと組んで、遊庵と共に任務をやった時以来だ・・・。」

「っ！？遊庵殿と一体なにがあったでござるか？」

「パパさん話してみてよ。」

「うおおおおおおお!!!!」

「鎌職人のマカ・・・」

ドン!!

「いた!!」

「ぐあ!!」

「なーんだったかな? 鎌職人マカ・・・どこかで聞いたような・・・  
あっ!!!!」

「!!!」

「おめえ、スピリットの娘か!」

「スピリット?」

「パパがデスサイズになる前の名前よ、でも何で知ってるの?」

「思い出すなくあいつの寝顔♪」

「シュタインはともかく、あいつとの日々は地獄だったよ・・・あいつ、俺が寝てる間に・・・」

「一体・・・何が・・・」

「あいつ!! 寝てる間に、身体中（顔も背中も含む）刺青と落書きだらけにしてたんだ!! しかも5年間!!」

「5、5年間!!? よく気づかなかったでござるな!!?」

「すご〜い♪パパさんったら、鈍感さん? クス?」

「変だと思ったんだ!!! 顔や正面の刺青洗い落としても、着替えの時とかみんな俺の背中みて笑うから・・・。  
シュタインと元かみさんが気づかなかったらいまだに続いたかもしれない!! ああ悪魔の遊戯が!!!!!!」

「・・・でも、5年間も一緒に任務をやってきたんでしょ? 「息」や「魂の波長」は合ってたんだね♪」

「・・・いや、ブレア殿、それは少し違うでござるよ。」

「にゃ?」

「そう、あいつは相手の実力に少しでも興味を持ったらある程度「あいてのリズム」が分かる!

・・・もし職人だったら、シュタインよりもうえだっかもしれない!! 遊庵は本当に神レベルだった!!!!!!」

「へ〜そうか、おめえがスピリットの愛娘か・・・俺のおもちゃを奪った女の娘・・・」

ギロリ!!

「（ゾクッ!!）」

「ケケケ♪てめえの魂、味わいたくなっただぜ♪」

そう言いながら、遊庵は舌を出した。  
そして、その舌には「魂」と書かれてた。

「（魂を味わう!?!もしかして魂を本当に食べる・・・）」

驚いてると、遊庵はパンチをしてした。

「ただのパンチだ!防げ!!」

「うん!!」

ガキィ!!

普通に防いだ次の瞬間

バチィィ!!

「ぐあ!!（なにが・・・起こった?!）」

電撃みたいなのが流れた

彼は一体なにをした!!？

次回に続く

### 第3話 神への挑戦 ぶっ放せ魔女狩り その1（後書き）

死神様「やっぱ遊庵強いね。ていうか、スピリットくんの扱いひどくね？」

スピリット「なんで俺の周りにはあんなのしかないんだーーーー！マカーーーーーー助けてーーーー！！」

第4話 課外補習最終回 神への挑戦 ぶっ放せ魔女狩り (前書き)

京次「今回で補習編は終了です。最後まで飽きずに見た方、ありがとうございます!!」

そして、途中でやめた方、お願いだから戻って来てください・・・」

先代紅の王「そんな事言わないほうがいいよ? 逆にファンが減る。あっ! 元々ほとんどファンはいないか」

京次「いやあああああ!!!! 言わないでええええ!!!!」

先代紅の王「それでは、補習編最終回です♪」

#### 第4話 課外補習最終回 神への挑戦 ぶっ放せ魔女狩り

バチィィ!!

「ぐああ!!・・・何が・・・起こったの・・・?」

「あいつ・・・なにしゃがった・・・」

今起きたことに、キッド達は驚いた。

「信じられん・・・魂というものは、魂の持ち主の体を完全に壊してから始めて触れることができるものだ。それなのにあの男・・・一瞬だが、あの手の刺青みたいなのを二人に見せた瞬間魂を直接触れたぞ!!」

そして、死神様はいった。

「うん! あの変な刺青はただの飾りじゃないよ。

「幻視蒼」といって、あいての精神を破壊したり魂の中に侵入して、魂を喰らう恐ろしい技だ。でも、さっきのはチョコっといじった程度だね」



「何てことだ．．．あの男の本気の姿が想像できん．．．」

「さてと．．．次は一気に喰っちゃおうかな．．．ケケケ♪」

．．．カタカタ．．．

「どうした！？マカ！！しっかりしろ！！呼吸も波長も乱れてるぞ！！」

ソウルは叫んだ。しかし．．．

「．．．あああああああ！！！！！！」

マカは耳をかさなかった。

「待て！！マカッ！！！！」

．．．スツ．．．

ズパン!!!!!!!!

二人共々返り討ちにあつた。

「・・・ゴプツ!!・・・バカやろう・・・」

ギュー!!

「!!?」

「ケケ♪良い肌もってるじゃねえか・・・」

遊庵はマカの髪の毛の片方を握った。

「んん・・・」

「・・・マカ・・・」

バサッ

マカはコートを脱がされた

「スピリットみたいに刺青いれてあげるぜ。それとも、呪いの呪文でもいれるか?」

すると、背後から・・・

「・・・!？」

「バンダナ燃やすぞ! テメー!! 俺様の存在忘れんなよ!!」

タツクルの態勢をとってるブラック☆スターが居た。

「・・・無駄だ・・・やめとけ・・・」

「魂に直接攻撃できるのは、お前だけじゃねえ!!」

「何!!!？」

「オオオオオオオオ!! 必殺!!!!」

黒☆星

ビッグウェーブ!!!!

大きな星型の魂の波長が遊庵に撃ち込まれた。

この場にいた全員がブラック☆スターに  
目を奪われた。

「すげえ!!」

そして、死神様も感心した

（流石だね♪ブラック☆スターの魂の波長は桁外れに大きい・・・  
それに魂の波長を打ち込むことに関しては天才的だ・・・  
だが・・・）

「・・・ケケケ♪上出来だな・・・だが惜しかったな」

「!! ということだ!? 通じてねえー!!」

遊庵には、傷一つついてなかった。

「死合を始める前におめえ等の魂じっくりみたからな。」

「まさか、相殺された・・・!?」

「そういう事だ・・・性質がわかれば逆に俺自身で波長を合わす事ができる。そうなれば何の攻撃力もなくなるからな。」

つまり、技を出した瞬間、お前と俺は「職人」と「武器」の関係になったワケだ。」

「・・・」

「そんな事できるのか!？」

「観察、対応、そして、柔軟性と高い魂……。遊庵の一番の強みはそこだ・・・」

そして・・・

ダッ!!

「なっ!!!？」

ブラック☆スターと遊庵の間合いが一気になくなった。

「驚かせたお礼だ、俺も必殺技を出す・・・」

ドドドドドドドドド!!

色空法蓮華！！！！！

「があああああああ！！！！」

遊庵の足が刃のように鋭くなり、ブラック☆スターの身体を斬り刻んだ。

「ブラック☆スター」

「やめろオオオオオ！！！！」

・・・ドサ！！

「・・・」

「ブラック☆スター！！！！！！！！！！」

そして、その映像、を見てたキッド達は・・・

「クソ！耐えられん！！・・・リズ、パティー、俺たちも行くぞ！！」

「お・・・おう・・・」 「ほ～～い」

助太刀に行こうとした。しかし・・・

「コラ・・・待ちなさいキッド、これはあの子たちの補習だよ。それに君は死神だ、「死武専」の生徒じゃない！！」

死神様がそれを制した

「・・・なら、今から俺らも「死武専」の生徒になるよ。父上・・・生徒名簿に記入お願いします。・・・リズ、パティー！」

「・・・おう・・・」 「はいはい」

「ちとちと！君たち・・・」

息子の行動に死神様は困惑した

「・・・。」

そして、マカたちは・・・

「ブラック☆スター!!!!」

「・・・」

パートナーを心配する椿に辰伶は言った。

「椿・・・俺は逃げも隠れもしない!!俺は真の侍も目指す男だから!!行ってやりな・・・」

「ケケケ♪ごちそうさまでした♪」

「遊庵!!! テメエー!!! 許さねえぞ!!! マカ!!! 気合いれるぞ!!!」

しかしマカは・・・

「・・・うそ・・・」

「?」



「どうした!？」

見えてしまったのだ・

「見え・・・ちゃった・・・」

・・・ゴオオオ・・・

遊庵をつつむ巨大な魂が

「ケケケ♪見えちまったようだな♪」

「そんな・・・レベルが違いすぎる・・・」

マカは完全に圧倒された

「おい!どうした!?マカ!」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・ダメ・・・勝てない・・・」

一方キッド組は・・・

「クソ・・・鬱だ・・・死のう・・・」

「・・・あゝあ、またかよ・・・」 「きゃはは♪」

「何という事だ・・・もしかしてトイレトペーパーの端を三角におり忘れたかもしれん・・・」

こっちもある意味絶望していた・・・

そう、キッドとても神経質で、全てを完璧にしなきゃ気が済まない性格なのである。どうなに状況がやばくても・・・

「もう!いつもちゃんと出来てるじゃねえかよ!だいたい神経質すぎるんだよ!お前は!!」

早くいかないとあいつらやられちゃうよ!! トイレットペーパーなんてどうでもいいだろ!!」

この調子でいつもリズは、キッドをフォローしていた。

「どうでも良い事ないだろ!! トイレットペーパーの端をまともに折れないマヌケな死神が助けに行ったところで、救いの神とはとても言えん!!」

あいつらだってぜひお引き取り願いたい気持ちでいっぱいになるだろう・・・」

「そんな事ないって!! 笑顔で迎えにいれてくれるって!!・・・じゃあ、ダッシュで戻って、猛ダッシュで助けに行こう!!」

「・・・いやだ・・・」

「はあ!?!、何で!?!?」

「もしちゃんと折れてなかったらどうする・・・!?! トイレットペーパーに俺という存在を全て否定されるのだぞ! それじゃ生きてゆけん!?!」

「じゃあ死ね!! (怒)」 「きゃはは♪」

そして、マカ達・

「おい！！しっかりしろ！！何やってんだよバカヤローツ！！」

「うるさいっ！！ソウルは魂が見えないからそんな事言えんのよ！！」

「ケケ♪」

グッ

「…………それが何だってんだよ…………」

お前が見たのはただの魂だろ！！未来が見えたワケじゃねえ！！  
戦う前から諦めるな！魂集めて俺を最強のデスサイズにするんだろ！！

女たらしのアホ親父をぎゃふんと言わせるんだろ！！

顔をあげろ！！今俺がしゃべってんだ！！

「…………」

「あいつをよく見てみろよ……お前がグズグズしてんのに待ってくれただ！結構良いやつじゃねえかよ！」

「・・・クス♪

ごめんソウル！！手間かけさせた！」

「おし！！COOLに行こうぜ！！！」

「ケケケ♪面白くなってきたぜ♪」

「行くぞマカ！！！」

「「魂の共鳴！！！！！」」

ピシ！！キイイイイイイ！！！！

遊庵の表情が変わってきた

（魂の共鳴・・・職人が武器に魂の波長を送り、それを武器が増幅させ、また職人に送り返す・・・

それを繰り返す事によって強大な魂の波長を生み出す・・・）

「オオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

「限界まで共鳴させるぞ！！！！」

「うん！！！！」

（また驚かされたぜ・・・その歳で「魔女狩り」が打てるのかよ・・・  
・）

「一撃にかける気だな・・・」

「鎌職人伝統の大技！！」

「来い！！！！お前らの魂を見せてみろや！！！！」

「魔女狩り！！！！！！！！！！」

ガガガガガガガガガガ！！！！！！！！！！

「はああああああ！！！！！！！！！！」

（「魔女狩り」をここまでコントロール出来るとはな・・・！！！！）

バン！！！！

「ああっ！！！！」

（しかし・・・まだ荒い・・・）

ドサ・・・

カランカラン・・・

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

一撃にかけたマカは、もう満身創痍だった。

「かろうじて意識はあるようだな・・・」

スッ・

バツ!!

「俺の・・・」

俺の職人に手出しはさせねえー!!!!」

ソウルは身体を張ってマカを守った。

「・・・ほう、ならお前から・・・」

ガッ・・・

「合格点をあげるぜ!! 補習授業おしま〜い♪」

「へっ?」

「身をしていして職人を守るなんざ、なかなか根性あるじゃねえか、結構好きだぜ、そうゆうの♪」

「あの〜もう一度聞くんけど・・・へっ?」

ソウルは、完全にワケがわからなくなった。



「いやゝ頼まれたんだよ死神のおっちゃんに、お前らの補習をみると。」

「でも、ブラック☆スター殺したじゃん・・・」

「ひやははは☆おもしれえゝ事いうなお前ゝ」

ブラック☆スターは椿に膝枕されていた。

「生きてる・・・じゃあ辰伶先輩は・・・？」

「悪かったなお前ら・・・人を騙すような真似はしなくなかったんだか、後輩のためだ・・・仕方ない・・・」

辰伶も、ゾンビアートがなくなり、生前の綺麗な身体になっていた。ちなみに、辰伶の傷跡やアザはぜんぶプロに頼んで塗ってもらっていたのである。

「結構金かかったんだぞ、お前らのために。」

「ふざけんな！！なんだこのクソ話は！！全部ドッキリかよ！！」

ソウルは魂で叫んだ。

「ガーンそんな・・・嘘・・・」

それを見ていた死神様は

「ほほほ♪でも成長したじゃない♪」

「しかし、生きの良いガキの魂は本当にうまそうだったぜ!! ケケケ♪」

舌を出しながら遊庵は呟いた。

（魂をガチで食うのは本物か!!!）

「さあ! みんな! 今日は疲れただろ? 遠慮せずに落人村で泊まっていきな?」

そう遊庵が叫ぶとあちこちからヒソヒソと聞こえた

（あの綺麗なねーちゃんは俺がいただくぜ）

（あの幼児体型の女の子も悪くないな）

（お、俺はあのムキムキの男の子を・・・）

（白髪の少年は結構楽しめそうだぜ）

そして四人は叫んだ

「」「」「絶対にイヤ!!!!!!」」「」

翌日

死武専

「あゝ昨日はマジで疲れた・・・」

「私、遊庵さんに魂をパクパク食べられる夢を見たわ・・・うう・・・」

「しまった！！遅刻して目立つつもりだったのに！！」

「ダメよそんな事・・・」

四人とも昨日の事で疲れていた。（約一名除く）

タッタッタッ！！

「オッス四人とも。昨日の補習お疲れ様」

「お疲れゝソウル、散々だったらしいな？」

志貴と当麻が来た。

「ああ、本当に散々だったぜ。

そういえば当麻、新任の先生決まったのか？もしかして、マカの親父だったりして」

「それは勘弁してよ・・・！！」

「それが、噂では体育系の熱血教師らしいぜ？」

当麻がそういつてると・・・

タッタッタッダッ！！

「アチヨ~~~~！！！」

ドカーーーン！！！（ドアが吹っ飛んだ）

「よし♪綺麗に挨拶が決まったところで授業始めんぞ♪」

遊庵が新任の先生だった。

「ウソ・・・だろ・・・」

「私初めてかも・・・」「パパに会いたい」って思ったの・・・」

「チッ・・・あいつ目立ちやがって・・・」

「・・・はあ・・・」

四人ともあっけ取られてしまった

「早速今日は少林寺拳法について教えるぞ♪」

SOUL

DEEPS

補習編

完

**第4話 課外補習最終回 神への挑戦 ぶっ放せ魔女狩り (後書き)**

今回は、KYOとSOUL EATERのキャラが中心だったので、次回からは別作品のキャラの出番を増やしたいと思います。

## 第5話 魔剣（前編）（前書き）

京次「キャラのリクエストを募集しております！もし、あれば感想の一言にてお書きください！それでは、第5話をどうぞ！！」



## 第5話 魔剣（前編）

とある教会

ディン・・・ン・・・ディン・・・ドン・・・

月下に一人の魔女が、箒に乗っていた。

『あなた達こそ、究極の武器と職人の形よ  
たくさん魂を食べなさい・・・』

彼女は「メデューサ」

今のところ、詳細は不明である。

そして、教会の中

「オウ・・・何だデメエーは・・・」

中には沢山の不良がいた。

そんな中

「そんな・・・僕なんて・・・まだまだですよ・・・」「紅の王」はこんなものじゃない」

剣を持った職人がいた。

彼？の名は、「クロナ」魔剣士である。

そしてその武器は、魔剣「ラグナロク」

「ネーク スネーク コブラコブラ・・・」

野外でメデューサは、呪文を唱えた  
すると、口からコブラのような物が出て来た

『大丈夫よ、自信を持ちなさい。クロナは「  
紅の王」になる存在よ・・・』

そして、コブラがクロナの頭の中に入った。

すると・・・



「ねえーみなさん？何か楽しい事あった？

この教会の扉は内側に開くんだね？

アハハ・・・昨日のあれ面白かったなー・・・

アレって何だっけ？

それに・・・」

それに・・・僕の血は黒いんだ・・・

ピエイエエエエエエエエエエ！ギユウイイイエエエアアイイイピ  
ギイイエエ！！！！！

外の静寂の中、魔女の見下ろす教会の中で  
悲鳴とともに血飛沫が踊った・・・

そして、その数分前のその教会のある町

「・・・クソッ!! 武器職人か・・・」

「殺人鬼、ソンソン」

「・・・お前の魂いただく!!」

「汚ねえぞ!! なんでお前らばっか人を殺したい放題なんだよ!!」

タッ・・・

「？」

ズパ!!

「別にやりたい放題やってるワケじゃないよ・・・これで課外授業ノルマ達成ね」

「オウ！3つ目の魂！！」

COOLにいただきます！！」

バクン！！ モキュ モキュ

「ねえーソウル？魂って美味しいの？」

「ああ！うまいぜ！！味は特にないけど、喉越しがたまんねえ♪・・・ゴクツ」

「へえ・・・」

「おや、マカ殿。今終わったでござるか？」

喋っていると、剣心が現れた。

「あっ！剣心だ！」

「オッス！緋村さん！どうしたんだ？こんなところで？」

「いやあ、ここで剣道を教えることになってな、ついでにマカ殿が課外授業をやっていると聞いて・・・」

「ああ・・・それでちよつと見に来たと・・・」

そう話していると・・・

ピクッ

「さてと、帰りますか？今、バイクまわしてくる。緋村さんは？」

「拙者は、船で帰るでござるよ。でわ・・・」

「・・・待って、ソウル、緋村さん・・・」

「おろ？」

「ん？どうかしたか？」

「・・・あの教会・・・」

「オイオイ・・・観光なら別の日にしてくれよ・・・」

「違うって・・・！」

（何だろ・・・沢山のたかぶった魂が・・・ノイズがひどいな・・・集中しろ・・・）

「・・・教会から武器と職人の反応が一つ

それを取り囲むように人間の反応が50から60・・・」

「マカ殿・・・」

「おまえ・・・そんなこともわかるのか？」

「・・・こんなの初めて・・・多分大勢の人間はあの教会によくいる不良集団よ。」

確かに評判は悪いけど、死神様のリストに乗るほどの悪人じゃないわ。」

「でも、職人だからって戦っている保証はないのでは？ほっといたほうがいいと思うが・・・」

「そうそう、今夜はサタデーナイトだぜ。  
みんな仲良くフィーバーしてんじゃねえーの？」

「でも！「死武専生」として見逃せないわ！  
ことが起きてからじゃ遅いでしょ！？」

「はいはい・・・じゃあ行きますか。  
緋村さんは？」

「拙者もついて行く。拙者もイヤな予感がして来た。マカ殿は先にいくでござる・・・」

そして、マカ達は先に教会に行った。

ブルルルルルル・・・

「けどさーブラック☆スターが人を集めて  
「俺様のショーの始まりだぁ☆」的なオチだったら泣くぜ？俺。」



「それだったかいんだけど・・・」

そして・・・

「着いたぜ サンタ・マリオ・ノヴェラ教会  
魂揺さぶるCOOLなたてものだ♪」

「着いた・・・どうだ？教会のほうは？変化はあったでござるか？」

「おっ緋村さん！今着いたのか。」

ピクッ

「そんな！あり得ない！！」

「おい！どうした！？」

「どういうこと？一瞬で・・・」

「マカ殿！何があったでござるか？」

「大量の魂が一気に消えたの・・・武器と職人を残して・・・」

（この扉は開けてはならない気がした・・・）

「でも、見ておかなきゃ・・・死武専生として・・・だれがやったか・・・」

ここからは、職人と武器が入ってはならないエリア・・・人知を超える「紅の王」の領域

キイイイ・・・

(・・・)

「でしょ・・・？その扉、内側に開くんだよ・・・」

「こいつが？」

「二人しかいない・・・パートナーは、どうしたでござる？」

「こんなことって・・・魂反応はしっかり2つ目の前にある・・・つまり・・・あいつの体の中に「武器」がいる!!」

「何!？」

「馬鹿な・・・」

「メデューサ様く何か三人来ましたけど?・・・うるさいなくラグナロクは黙ってて!」

## 死武専

・・・の保健室

「うかつだった・・・マカが課外授業中だったとは・・・」

スピリットが一人嘆いていた。

「マカに会うためにはどうしても死武専に来なくてはならない!だが、大きすぎる障害がある。」

遊庵！！娘に会うだけだのになんてでかすぎる壁なんだ！！  
だが！！負けないぞ！！いつかまたマカとの愛を取り戻してみせる！  
でもその前に、女医さんに傷ついた心を癒してもらわなくては！！」

ガチャ

（来た！！）

「待っていたよマイエンジェル？君のメディカルラブで僕の心を癒  
しておくれ！！」

だき？

（・・・・・・・・）

「おお！スピリット！！探したぜ♪」

「どしええええええええ！遊庵んんん！！！」

「何の用か知らないけどな！お前につけられた刺青は完全に消えた！！」

もう怖くなんかねえぞ！バーカ！！」

毛布に丸まっているから説得力が皆無だった

「ふーん・・・じゃあ舌につけた魂って文字も消えたんだ？」

「はあ！！！！？」

バカか！？お前はなんてことをしやがる！！」

ベロ！

ドキドキドキ

「うっそでした♪」

「~~~~~」

「イヤーでも、結婚して数年立つか」。

スピリットが結婚するって聞いた時正直不安だったぜ「絶対うまく行きっこない」マジで思った！

だけど幸せそうに寄り添う二人を見て確信した・・・

大丈夫！二人の愛を永遠だ！！ってな」

「・・・・・・・・；」

テクテクテク

「・・・ん？」

「えーと・・・その・・・お前は知らないかもしれんが・・・実は俺たち先月離婚したんだ・・・」  
プッ♪「知ってる」

「・・・・・・・・（プチ）・・・」

「俺の心眼はごまかせないぜ？」

「クソッ！！テメエーはブッ殺してやる！」

「やめてください！！教師同士の喧嘩は生徒の教育に悪いから・・・」

辰伶は二人を制した。すると遊庵が

「ケケケ♪・・・あーそうそう、スピリット」

「？」

急に呼ばれたスピリットは困惑した。

「・・・魔剣があらわれた・・・」

教会

「どういふことだよマカ……あいつの中に武器があるって？」

「ん  
ん  
ん  
ん  
・  
・  
・  
」

「気をつけて……出てくる……」

「まあああああああああ！！！！！！」

!!

「ピエィエィエィエィエィエィエィエィエィエィ！」

クロナの背中から武器が出て来た。

「まあああ・・・」

「グビビビ・・・グビビビ」

⌈  
•  
•  
•  
•  
•  
⌋

コオオオオ・・・

「ちよえ」

すこゝん

「あう！」

武器がクロナの頭を小突いた。そして

グリグリ・・・

「痛い！痛い・・・グリグリやめて・・・

あう・・・こづかないで・・・痛いよもうやめて鼻つままないで・・・  
やめろよ テメエー！！いい加減にしろ！！」

「うゝうゝハイなクロナはおつかないね」

「・・・しゃ・・・しゃべるんだ・・・」

マカはラグナロクに驚いた。

「死神様のリスト以外の魂を取ること、魂の乱獲は禁じられてるでござる！！」

お主等は死武専の生徒なのか！？」

剣心は聞いた

「死武専？何それ？あの人が食べていいっていうんだ・・・何が



けないのさ？」

「それより、あいつ等の魂うまそうだぜ！」

ラグナロクはクロナをいじりながら言った

「死神様に言いつけてやる！」

「やるぜ！クロナ！」

「うん・・・」

パシャン！

「黒い液体になった！」

そして、液体が剣に変わった

パシッ！　ダッ！！

「下から突き上げてくるぞ！！！」

ガン！

「あっ」

「遅いでござる！！！」

剣心は即座にガードした

「このお!!」

ガッ!

そして、マカは裏拳をかました

「君もこづくの・・・」

「はぁぁぁぁ!!!!」

ブン!!

剣心が居合をかますが

サッ・

かわされた、だがマカが即座に

ガッ!

「!!」

ゴッ!

大鎌を利用したかかと落としをした

「いけるぞマカ!!」

「やぁぁぁ!!!!」

「飛天御剣流　龍鎚閃」

二人同時に攻撃をした、しかし・・・

「・・・」

『フフフ・・・』

野外にいる魔女は笑っていた

ガガン!!

「エ!!?」

『そんな斬撃じゃあ・・・』

「僕を両断できないよ?」

ポタポタ・・・

「黒い血!!」

チャッ・・・

「そう・・・僕の血は黒いんだ・・・／／／」

赤面をしながらクロナは言い剣を構えた

「!！」

ダッ!!

そして、距離をとった

「あいつの体・・・どうなってんだ？」

「多分、あいつの血液自体武器だと思う。

だから皮膚は裂いたけど、血が固まって刃を止められた・・・」

「それじゃあ、斬撃では分が悪すぎでござるな・・・どうにかならんか？」

「私もブラック☆スターみたいに魂の波長を打てれば直接体内にダメージを与えられるのに・・・」

『クロナ、何を悠長にやっているの？』

「だって僕、女の子とどう接したらいいのかわからないのです・・・  
／／／

『バカねー・・・殺せばいいのよ・・・』

「何だあいつ・・・誰としやべんでんだ？」

すると、またコロナの雰囲気が変わった

「そっか、殺せばいいのか・・・気づかなかったよ・・・」

髪に指を絡ませて遊ぶのを見たくない？

そこの扉・内側に開くんだよね・

ラグナロク・」

悲鳴共鳴  
・  
・  
・  
・

グ  
ビ  
・  
・

[illegible]

「くう!!?うるさ。」

ザッ  
ギャ  
アアアアア  
！！

剣の衝撃波がマカを襲う

「くっ・・・！」

ダッ！！

「わあああああ！！！」

「くっ！！マカ殿！！」

剣心がマカの前に躍り出た

ギャ！！！！ドゴォ！！

そして、弾き飛ばされた

「ぐああ！！」

「剣心さん！！！」

チャッ・・・

そしてクロナは突きの構えをとった

「マカ！！ガードしろ！！」

ピエィエィエィエィエィエィ！！

ガン！

「んん・・・」

ガリガリガリ！！！！

「ぐああ！！！」

ズパ！！

内部でソウルは傷を負った

「ソウル！！・・・このっ！！！」

ドッ　　ザザ・・・

「大丈夫！！！？ソウル！？」

「そんな事気にすんな！！職人のために死ぬ覚悟ぐらいで来てら！！  
それにしてもやばいぜあの刀身！

悲鳴で振動を起こしてもものすげえー電ノコ状態だ！！！」

ダッ！！

そして再びクロナが迫った

（どうする・・・ガードもできないダメージも与えられない・・・八方  
ふさがりだ・・・

ここはいったん逃げるしかない！！！）

ピエィエエエエエエエエ！！！！！！

「マカ殿!!」

「っ!!!? 剣心さん!!」

「拙者がこいつを抑えておく!! 早く逃げるでござる!!」

「でも、剣心さんは・・・」

「拙者もあとから行く!! だから早く!!」

「剣心さんの言う通りだ!! 早く行くぞ!」

ジリ・・・ドン・・・

「!! (しめた!! 出口!!)」

ドギヤ!!

「ぐあああ!!」

剣心は飛ばされた

バコオ!!

「邪魔だよ・・・」

「剣心さん!! 早く逃げなきゃ・・・」

グッ・・・



しかし扉は開かなかった・・

「ダメじゃないか・・ちゃんと辺りを把握しておかなきゃ・・」

チャツ・・

「・・!!しまった・・」

そう・・

そこの扉は内側に開くんだよ・・

「マカ!!ガードだ!!」

「でも!それじゃソウルが!!」

シャ・・

スバアアアアアアアア!

悲鳴の響く教会の中・また血飛沫が踊った

「ソウルウルウルウルウル!!!!!!」

〽後編へ続く〽





## 第6話 魔剣（後編）（前書き）

京次「魔剣士クロナの圧倒的な力に、深手を負ったソウル  
絶体絶命の危機のマカと剣心!!  
一体どうなる？」

第6話 魔剣（後編）をどうぞ!!」

## 第6話 魔剣（後編）

コオオオオ・・・

ドサ・・・

「ソウルウウウウウ！！！！！」

『さあ、クロナ・・・とどめよ。殺して魂を食べなさい』

「合点了解です。」

「やだ・・・ソウル・・・」

「バカヤロ・・・早く逃げろ・・・」

（拙者がいながら、情けない・・・すまない、マカ殿・・・）

チャッ・・・

「では・・・」

バツ!!!

「ソウル・・・ごめんね・・・私のせいで」

ドッ!!

しかし

「エ?何事!?僕の身体が・・・」

2つの刃が、クロナの身体を貫いた

メキ・・・ドカ!!

「ガッ!!」

そして、蹴り飛ばされた

ザッ・・・

「シュタイン博士・・・遠野君・・・それじゃあこの刃は!!」

ザッ・・・

「パパ参上!!」

(どうだマカ!!このパパの勇姿を!!  
しっかり焼き付けておくれ!!)

しかし本人は・・・

「シュタイン博士！ソウルが！」

「応急処置は施した、けどもうちよい見る必要があるな・・・」

「（ガーン・・・）見てないのね・・・」

「くっ・・・すまない、スピリット殿・・・  
拙者がいながら・・・」

「ああ、あとでじっくり聞くよ・・・

しかし、「紅の王」の候補と言ってもまだ卵・・・案外あっさり終わったな」

・・・むくり

「傷口の血を固めて止血したぜ！！オイ！！お礼は！！！」

「うん・・・ア・・・アリガト・・・」

「「ごさいました」は！？ボコるぞデメエー！！！」

傷口からラグナロクがでてきた

「・・・ヘエ・・・；」

さすがのデスサイズでも、驚いた



「シュタイン博士・・・何なんですか？あいつらは？」

「俺も、あんなの見たことがない・・・」

志貴とマカは聞いた

「・・・「紅の王」・・・死武專ができた理由だよ・・・」

「「死武專ができた理由？」」

数分前・・・デスルームにて

「頼んだよ、シュタイン君。スピリット君と一緒に魔剣が「紅の王」に目覚める前に止めてちょーだい」

「はい、そのために僕を死武專に戻したのですから、おまかせください。」

「・・・ついでに遠野君も連れて行きましょう。魔剣と相性もいいかもしれないから・・・」

「・・・もう二度と「紅の王」を生むわけにはいかない・・・「彼」と約束したからね・・・」

そして・・・

「さて・・・さて・・・俺は三人の手当てをしないといけないから・・・遠野君、あとは頼みましたよ？」

「ああ・・・分かっている・・・」

「え！？アレって本当に遠野君！？何か雰囲気が違う・・・」

「・・・ハア・・・なってしまったか・・・」

デスサイズは呆れ気味に言った

「オラ!! クロナ!! なくにダラダラやってんだよ!! サッサとしねーと、また一時間おきに起こすぞ!!」

「ヤダ!! また目の下のクマが濃くなるじゃないか!! 僕・クマとどう接したらいいかわからないよ・」

『あらゆる物を殺せる眼「直視の魔眼」か・・クロナがどこまでやれるかい実験になるわね・やりなさいクロナ・・!!』

「あ・・はははっ!・・ハハハハハハハハハッ!!!!!!!!」

「何がおかしい!! 眼鏡野郎!!!!  
って眼鏡かけていねー!!!!」

ラグナロクは叫んだ

「あっ本当だ!! 遠野君眼鏡かけていないわ!!」

「・・くくっ俺を殺したいんだな  
魔剣よ・・いいだろう・・」

さあ 殺し合おう  
魔剣士 クロナ ラグナロク

ダッ!!

先にうごいたのは魔剣だった

「僕、殺し合いを誘う人なんか始めてだよ  
・・・どう接したらいいかわからないよ」

「食え!! かたっぱしから食え!!」

「わからないよお!!」

そう言いながら、斬りかかった

「・・・遅い!!」

ズパー!!

「グピーイ!! いてえ!!」

剣自体が両断された。そして・

「斬る・・・」

ズパズパズパァ!!!

「がはっ・・・」

クロナの身体に次々と傷口が斬り刻まれた

「嘘・・・私と剣心さんでも両断できたなかったあいつの身体が・・・  
どうやって!?!」

「・・・直視の魔眼ですよ・・・」

シュタイン博士はボソツと言った

「何でござるか? その魔眼って言うのは」

剣心は聞いた、すると今度はデスサイズが説明した

「あらゆる物には発生した瞬間から決まっている崩壊の時期、つまり「死期」が内包されてるんだ・・・彼にはその「死」という情報が「線」として視えているんだ」

「なるほど、どんな要因があっても、

その「線」をなぞれば問答無用で殺せるってわけか・・恐ろしい能力でござる・・」

「凄い・・それならあいつにどんどんダメージを与えられる!!」

そして、志貴がとどめにさしかかった

「さて・・終わりだ!!」

バツ!!

だが・・

・・ドス!!

血があるところからトゲがでてきた

「グウ・・!!あの時流した血が・・!!」

・・・モコモコ・・・モコモコ

「・・!!」

空中から沢山の血の種がでてきた

ブラッディニードル!!!

ドドドドドドドド!!!

「遠野君・・・!!!」

「血の一滴一滴が武器になるのか!? 何なんだあの性能は!？」

そして、シュタイン博士は言った

「魂の乱獲によって造られた魔剣・・・ここで止めないと確実に「紅の王」になるぞ!!!」

それとあの職人と魔剣の魂・・・

内向的な職人の性格をいじめっ子体質な武器が押し込めている感じだ。

今はまだクロナがラグナロクに反発してるからまだいいが、完全に飲み込まれた時が危険だな・・・

あと、あのまとりついてる蛇はなんだ？」

「オイ!!! コラ!!! またさっきの斬撃食らったら、靴に画鋲いれんぞオラ!!!」

「そんなあく画鋲の入った靴との接し方がわからなきゃお外に出られないじゃないか」

ダッ!!!

そして、志貴が攻撃をしかけた

「わああああ!!!」

クロナは別の血で再生させた剣で反撃をした

「隙だらけだ!!」

ズパ!!!!

そくざにまた剣を斬り落とされた

「これが遠野君の戦闘スタイル・邪魔者を全て斬り落とした後、即座に斬撃!!」

「寝てな!!」

ズパズパズパ!!!!

ガガガン!!

そして、斬り飛ばした

「・・・凄い・・・」

モコモコ・・・

ドドドドドドドド!!!!!!

また、針が襲いかかった

志貴はなんとかよけたが

フヨ・・・



「なっ!!!?しまっ!!!」

(クソ!!!時間差か・・・!!!)

「ぐっぴゃああ♪ 死ね!!!殺人鬼が!!!」

「くっ・・・」

ドス!!

「遠野君!!!」

ザザ・・・

「ハハッ!!! 裁く・・・」

「グピ・・・グピ・・・グピ」

辺りにはまた、沢山の血の種があった

「ぴぎゃああああ!!!!!これで終わりだァ!!!殺人鬼!!!ブラッ  
ディニードル!!!!!」

ゴオオオオオ!!!

「遠野君!!!!!危ない!!!!!」

「・・・斬刑に処す・・・!!」

閃鞆・八点衝!!!!!!

ズバババババババ!!!!!!

恐ろしいスピードで次々と針が斬り落とされた

「ぐゃぴー!!!!これでも捉えきれないか!!」

気が付けば目の前から遠野が消えた

「おう!?! いねえーぞ!!!! ナイフ野郎どこいきやがった!!!! ど畜生がああ!!!!」

すると、志貴はしたから現れた

「蹴り穿つ……!!」

閃走・六兎!!!!!!

下から上段蹴りを放ち、クロナの顎をとらえた

ピヨピヨ☆

「クソ！！脳を揺らされた！！早く目えさせ！！次の斬撃くらったらやべえぞ！！」

しかし、クロナはまださまさなかった

「うつわ☆☆星が見えるよ☆星との接し方わかんねえ」

「星との接し方なんかとりあえず自然を大切にしておけ！！だから目を覚ませ！！」

「弔毘八仙、無常に服す・・・！」

閃鞆・迷獄沙門！！！！！！！

ズパッ！！ズパアアアア！！！！！！

「理解したか？

これが・・・物を殺すということだ・・・」

「・・・速すぎて・・・分からなかった・・・」

マカは志貴の強さにあつけ取られた

ポタ・・・ポタ・・・

「ハッ！！またハリが来る！！」

シーン

「・・・終わったよ、さあ・・・とどめだ」

志貴がとどめをしようとした

『まあ・・・こんなものか・・・もっと実験をつまないと・・・』

ピクッ！！

「！！！」

「まああああああああ！！！！！」

「びぎいええええええええええ！！！！！！！」

クロナの身体中から針がでてきた

「何事でござるか！？」

「・・・拒絶反応が起こっている・・・」

「さっきまで一体化していた魂の波長がバラバラだ・・・」

『限界ね・・・「ソウルプロテクト」・・・解除』

ビク！！

「いつの間に・・・！！？急に魂反応が現れた！！」

シュタイン博士も気付いた

「この反応！！魔女か！！」

コオオオオ・・・

空には、巨大な魂があった

「しかもあの魂・・・ハンパじゃないあの子の身体に武器をいれたのもあの魔女か・・・」

シュタイン博士は確信した

マカは疑問に思った

「・・・あれが魔女の魂・・・！？でも、さっきまであんな強力な魂感じられなかった・・・」

そして、シュタイン博士が説明した

「「ソウルプロテクト」一部の魔女が使える上級魔法だよ」

「ソウルプロテクト？」

「自分の魂の周りを魔法で包み、波長を消したり、普通の人間の魂の様にカモフラージュしたりする魔法だ」

「あれが本物の魔女・・・あんなのを倒してママはパパをデスサイズにしたの・・・？」

『まったくクロナはだらしがない！帰ったらお仕置きだわ・・・』

そう言いながら、メデューサはクネクネと手を動かして・・・

『ネークスネークコブラコブラ・・・その前にあなたたちも・・・』

魔法を詠唱しながら言った

おしおきよ・・・

「ベクトルアロー!!!!!!!!!!!!!!」

メデューサの背中からたくさんの矢印の形をしたトゲがマカたちを襲う

「先輩!!」 「おう! シュタインいくぞ!」

「「魂の共鳴!! 魔女狩り!!!!!!!!!!」」

ギャン!!!!!!!!!!

ツギハギの形をした斬撃がベクトルアローを斬った

チリチリ・・・

『ふふ・・・さすがね』



シュバ・・・

メデューサの腕の刺青の蛇が実態化して、クロナをつかんだ

『今日はこの辺にしておくわ・・・』

そう言い残し、メデューサは退散した

「待ちやがれ!!」

「いや・・・先輩・・・もういい。深追いはやめよう、ソウルが心配だ・・・」

(・・・ソウル・・・)

ポン

「・・・パパ・・・」

「さあ・・・帰ろうか・・・」

デスサイズは娘を慰める様に言った

そして、死武専

女子シャワールーム

KILLーコーンガンコーン♪

「課外授業どうだった？」

「結構いい感じだったよ」

「マジであたし明日絶対補習だよ」

女子がワイワイ話していた

「補習ならマシじゃんソウルⅡイーターって子が今日大怪我で運ばれたってさア」

「ウツソ！！それやばくない！？」

「エッ・・・ソウル君が・・・！？」

そして、そこには椿もいた・・

そして保健室

ガチャ・・

「シュタイン博士!!」

「あら? ずっとそこで待ってたの? シャワーでも浴びてくればよかったのに」

「どうなんですか? ソウルは・・」

「ヘラヘラ・・手術は成功です、後は安静にしていれば大丈夫でしょう・・」

「よかった♪ありがとうございます!!」

マカは大喜びした

「あの〜ソウルの顔見てもいいですか？」

「ああ・・・いいですよ」

「はい♪」

パタン・・・

「・・・ん？」

「変な作り笑いしてんじゃねえよ・・・」

後ろには、デスサイズ、遊庵、剣心がいた

「でっ、本当のところソウルの容体はどうなんだよ？担任として、一応聞きたいな」

「拙者も、今回の件で責任があるのでござるからな・・・」

「・・・傷が大丈夫なのは確かだよ。ただ一つ気にになってね・・・」

「気になること・・・？」

「呪いと言えぱいいのかな・・・」

「呪い？どういふことでござるか？本当に大丈夫でござるか？」

「魔剣ラグナロクの黒血がソウルの血に混ざってしまった。  
今のところどうなるか不明だよ」

ダッ！！

「マカ殿！！」

剣心は急いでドアを開けた

「おい！緋村！！」

デスサイズの声も届かなかった

「なあ？何で緋村のやつあんなに責任感じているんだ？普通、近くにいただけであんなに必死にならんだろ？」

遊庵はデスサイズに聞いた

「・・・マカが此処に入学してから、俺の代わりに、ずっと世話してんだよ・・・マカは知っての通りに俺のこと大っ嫌いだから・・・だから緋村を俺の代わり、薫ちゃんをママの代わりになってるんだ。」

「なるほど、だからあれだけ親しいんですね  
マカちゃんと緋村は・・・」

シュタイン博士は納得した

「逆に言えば、緋村はマカのことを、まるで自分の娘の様に思ってるんだ。だからあれだけ心配するんだ・・・」

「マカ殿・・・」

「・・・ソウル・・・」

剣心が見たのは、とても悲しい顔をするマカだった

（俺の職人に手出しはさせねえ！！）

「ごめんね・・・」

（俺は職人のために死ぬ覚悟ぐらいできてんだよ！！）

「私のために・・・」

ポタ・・・

「ずっと・・・待っててね、私もソウルみたいに強くなるから・・・！！」

涙の決意を、マカは誓った

（俺は・・・また失うところだった・・・大切な人を・・・）

剣心は、かつて失った妻と、マカを重ねた

（今度こそ、守りきるんだ！！たとえ相手が魔物であろうと、紅の王であろうと、俺の目の前にいる全ての人を、死なせはしない！！）

「そのためにも、もつと強くならなければならない！」

「えっ!!? 剣心さん? 何時の間にいたの?」

「おろ? 気付いたでござるか?」

剣心は、つい心の声が漏れてしまった。  
それに気がついてマカは我に帰った

「けっ 剣心さん? もしかして聞こえてた?」

「えゝゝゝ」「ソウルゝゝゝ」と、つぶやいた辺りからいたでござる  
よゝゝゝ」

「全部聞こえてたんだゝゝゝ」

「ゝゝゝゝゝゝゝゝ」

互いに黙り込んでしまった

そしてゝゝ

「「あゝゝゝゝゝあはははゝゝゝゝゝ」」

乾いた笑いしかでなかった

すると・・・

どっ!!

びくっ

「「!!!!!!?」」

「大丈夫か!!! ソウル!!!!!!」

ブラック☆スターが来た

「しっかりしろ!!! 俺様が来てやったぞ!!! 目を開けろ!!! 俺の笑顔はハッスルの源だぜ!!!」

ブンブンとソウルの顔を揺らしながらブラック☆スターは言った

「ブッブラック☆スター!!!」

グシャ!!

マカチョップが炸裂した

「ごめんなさいマカちゃん・・・」

ベッドにもう一人患者が増えた



(ごしごし・・)

「・・・へへ♪」

マカは涙を吹いて椿に笑顔を見せた

カッ・・・

「あらあら、ドア壊しちゃって・・・」

「!!」

「ずいぶん賑やかじゃないの♪」

「おや? ずいぶんお客さんが多いですね?」

によろっと2人の保険医の先生が現れた

「「メデューサ先生、藤田先生、こんばんわ!!」」

「オウ!! ソウルを見に来たのか?」

3人とも挨拶をした。だが、剣心は

(あの女医、新任か? しかもどっかで見たことある様な・・・  
そして、藤田というやつはもしや・・・)

「あのマカちゃん?」

「はい! なんですか?」

「足にへばりついてるお父さんはがしてくれるかしら？」

「さっきから私のががそうとしても、なかなか離れないんですよ・・・」

藤田先生がはがそうとしているさきには

「白衣を着たマイ・エンジェル？」

今日こそ君のメディカル・ラブでぼくを癒しておくれ？」

デスサイズが足にへばりついてた

グシャー！！

またもやマカチヨップが炸裂した

「・・・ハァースピリット殿・・・」

剣心は呆れてしまった

「それにしても、ソウル君大変だった様ね」

「はい、すみません。私のせいなんです・・・」

すると、メデューサ先生はポンッとマカの肩を掴んだ

「元気だして！！マカちゃんもつと強くなるわ！！」

そして、マカは笑顔に戻した

「・・・はい！！」

しかし、マカの笑顔とは裏腹に、メデューサ先生は邪悪な微笑みをしていた

そして、先ほどからずっとニコニコとしていた藤田先生の目から少し眼光がさした。



## 第6話 魔剣（後編）（後書き）

先代紅の王「次回はソウルイーターで有名なあのキャラが登場します！

第7話お楽しみに」

## 第7話 聖剣伝説 その1 それぞれの野望（前書き）

京次「それぞれのキャラのイメージが崩れるかもしれませんので、見る際には、ご注意ください！ それでは、S O U L D E E P E R S 第7話 どうぞ！」

## 第7話 聖剣伝説 その1 それぞれの野望

(・・・どこだ・・・ここは・・・)

暗い・・・自分の身体すら見えない・・・・・・苦しい・・・)

暗黒の空間の中、ソウルはさまよっていた

(どこが上で、どこが下だ・・・どこに行けばいいんだ・・・助け  
てくれ・・・)

カァ・・・

(光・・・？出口か！？)

「いや・・・やめて・・・！」

(声！？マカ！！マカの声！！待ってろ！！今いくぞ！！)

「ソウル！！！！！」

メキメキミキ！！

「マカ！！！」

「いやあああああああ！！！！！」

そこには、マカのお腹からでて来たソウルがいた・・・

「っ！！！！」

「うわあああああ！！！！！」

保健室で、ソウルの叫びが響いた

「ソウル！！！」

「ああああ！！！」

「どうしたの！？！」

「何かあったんですか！？！」

「メデューサ先生！！藤田先生！！  
ソウルが・・・」



マカの握るソウルの手は震えていた、しかし

ギユ・・・クイクイ・・・

「ソウル・・・」

「はぁ・・・はぁ・・・大丈夫だよ・・・  
大丈夫！やな夢を見ただけだ・・・」

「ほっ・・・良かった・・・」

マカはとても安心した

「よかったわ、でも、何かあったらすぐに呼んでね♪」

「念のために、熱を測つときましょう・・・終わったら呼んでくださいね・・・」

そういい、藤田先生はソウルに体温計を渡した

（ラグナロクの黒血が混ざったソウルIIーター・・・この子も研究対象になりそうね・・・）

メデューサは獲物を見る様な眼でそう思った

カー・・・カー・・・

「さてと・・・今日は帰るね。あ、喉乾いてない？帰るまえに何か買ってこようか？」

「ああ、いいよ・・・飲むとシヨンベン出るだろ？頻繁に出ると、どうも落ち着かねえから・・・」

「そっか・・・替えの下着以外に何か持って来て欲しいものある？」

「ん・・・別にないなあ・・・」

「そっか・・・」

「・・・あのさ・・・俺がこうなったのは自分でやったことなんだから、お前が変な気負いすることないからな！」

ソウルはマカに気遣い、なるべく明るい表情で言った

「・・・ごめん・・・」

しかし、ソウルの考えと裏腹に、マカはシヨンボリと保健室をでた

「・・・やっべ・・・しくった・・・逆にへこませちまったか・・・」

ギィ・・・ボタン・・・

「・・・バカじゃないの・・・私・・・ソウルに心配かけさせてどうすんだよ・・・」

マカは自虐的に言った

カッ

「!?!?・・・パパ・・・!?!?」

スピリットが現れた

「屋上いかない?夕日が綺麗だよ♪♪」

ニコニコと、そう言った

そして、図書館で・・・

「でっ・・・俺様にどうしろってんだ？」

「掃除だ！掃除！図書室の整理をしろ！」

ブラック☆スターと辰怜が居た

「はあ！？やだよ！！めんどくせえ」

「お前なく・・・今回の課外授業で魂一個もとってないだろうが！！」

「それで補習なんだろ？っんなのとはいつもやってっからわかってんだよ・・・

こんな地味な補習やだよ！掃除！？目立たねえじゃん・・・お前やれよ！

何か他にないの？遊庵と戦ったときみたいなの？」

「ブラック☆スター・・・お前の実力はクラスでもかなり上のレベルだ、なのに「万年の0個補習マニア」・・・頑張っている椿が可哀そうだろうが！」

「お前に必要なのは罰だ！嫌なことやって悔い改めろ！！後で見にくるからな、ちゃんとやっとけよ！！！」

「・・・良かったら手伝ってもいいんだぜ！！！」

「誰がするか！！誰が！！」

「いいか、ちゃんとやっとかなかったら、もっと嫌な補習させるからな！！！」

「ハイハイ・・・わかったからさっさと行け熱血野郎・・・」

ボタン・・・

「チツ・・・どくすんだよコレ・・・」

そう言いながら、螺旋状に続く沢山の本だなを見上げた

10分後・・・

「ひやははははは☆カリスマ・ジャステイスさいこ〜♪  
こいつは俺の次にBIGなやつだ!!」

偶然見つけたマンガを読んでいた

「図書室にマンガがあるんだな!!明日遊庵のつまんねえ授業抜けて、また来ちゃお☆」

すると・・・

「おい君!図書室では静かにしたまえ!!」

「そうですよ!!あと、本で山をつくって座ってはいけません!!」

「あ!!悪い・・・ん?キッド!?それとシエル!??」

キッドとシエルが来た

キッドは知っての通り、最近転校した死神様の息子である

シエルは、「月姫」のキャラでありエクソシストである

ここでは、志貴とマカたちの先輩であり、辰怜の後輩である

「何だ、お前たちもお仕置きくらったんか？」

「違いますよ・・・本を借りに来たんです！」

昨日興味深い本を見つけたのですから・・・」

「そうそう、俺もそれを読みたくてな・・・君の尻のしたにある本が取りたいんだが良いかな？」

「ああ、これか？」

そう言い、キッドにその本を渡した

「あゝこれですね♪間違いありません！」

「うむ♪そうですね♪」

「何なんだ？それ・・・？」

「エク・・・エックス・・・ダメだ・・・読めねえ・・・」

すると、キッドは言った

「エクスカリバー」

「それ何？」

「聖剣と呼ばれている伝説の剣だそうだ・・・」

それに続く様にシエルが説明した

「その剣を地面から抜き、解き放ったものは勇者と称され永遠に讃えられる・・過去にエクスカリバーを手にしたものは王にまで登りつめたと聞いています。」

言い終わると、3人の表情がパアッと明るくなった

「さぞかし美しいシンメトリーの剣なのだろう♪スバラシイ!!」

「勇者、王!! 俺様にピッタリじゃん!!」

「これさえあれば!! あのアーパー吸血鬼から、遠野君を引き離せれる!! これで、カレーデートが現実のものに!!」

3人が聖剣の話で盛り上がっていると

「コラー!! ブラック☆スター!!」

「お!! ビリビリだ!!」

「ビリビリ言うな!!」

ビリビリと呼ばれた彼女の名は「御坂美琴」

とある魔術の禁書目録のキャラである

ここでは、マカたちの同級生であり、風紀委員である

「御坂さん? どうしたんですか?」

「シエル先輩! こいつ補習の掃除やってないのですよ!! 辰伶さん



に言いつけてやる!」

「そうだったんですか!?! てっきり本を読みに来てるかと思った・・・通りで珍しいなと思いました・・・」

「もう・・こいつがまともに本を読むわけないでしょうが!?! ちゃんと注意してくださいよ!?!」

「すみません・・3人で聖剣の話で盛り上がったものだから・・・」

すると・・

「聖剣!?! 何ですかそれ?」

(しめた!?! ビリビリが話に突っかかって来た! うまく乗せれば説教受けずに済む!)

「ああ! 今から3人で聖剣を手に入れようとしてな、お前も一緒にくるか? 死武専で一番になるのは確実だぞ?」

そう言い、御坂を誘った

「死武専で一番ですって・・・」

(やべっ・・ミスったか?)

「その話本当!?! 本当なら一緒に連れて行って! いいですよね!?! シエル先輩!?!」

「え!?! あゝいいんじゃないですか? ですよ? 2人とも・・・」

「「あ・・・ああ・・・いいんじゃない?」」

「・・・みたいですよ・・・」

「やったー!! ランクアップ間違いなし!! これで辰伶の暑苦しい話聞かなくていいんだわ」

「・・・あいつも辰伶のこと嫌いだったんだ・・・」

ブラック☆スター呟いた

「まあ、結果的には行く人数が4人になってしまったな。これ以上人数を増やしたくないな・・・早速行こう・・・」

キッドはそう言い、4人は行こうとした瞬間

「ああ・・・エクスカリバーね・・・」

ずいっとシュタイン博士が現れた

「何だ? 博士もお仕置きくらったんか?」

「?何を言ってるの君は・・・?」

「博士! 聖剣について何か知っているんですか?」

御坂がそう聞くと

「聖剣エクスカリバー・・・俺にも無理だったよ・・・」

「何！？チャレンジしたのか？」

「博士にも抜けなかったのですか・・・」

シエルとブラック☆スターは驚いた

「・・・」

シュタイン博士は何か複雑そうな表情をした

「聖剣エクスカリバー・・・」

「「「くりっ」「」」

「興味津々だぜ！」

カー・・・カー・・・

「ほらほら、見てみ、マカ！あの眠気を必死におさてる夕日の間抜けヅラを！」

「うん・・・」

マカはまだどんよりとしていた

ニコニコ♪

「・・・・・・・・」

（やばいぞ俺！！ヤヴァイ！！せっかくマカとしつとり話すチャンスが来たってのに何を話したらいいのかわからない・・・）

すると、マカはおもむろに本を取り出した

ペラペラ・・・

（あゝあ・・・マカが飽きて本を読み出しちゃったよ・・・何か言わな

きや・・・なんか気の利いたこと・・・早く・・・）

「コラ、本は明るいところで読みなさい」

ボソッとそう言った

じいー

（うそ〜ん・・・いきなり説教かよ・・・）

スピリットは自分に呆れた

パタン・・・

「ねえ・・・パパ・・・」

「んん!？」

「ママのこと、どう思っているの？」

マカは唐突に聞いた

（ココは間をあけちゃいけない!!!!）

「もちろん愛してるよ!!」

「じゃあなんで浮気ばっかするの？」

スピリットの言葉を遮る様にスパツと言った

「・・・・・・・・・・;」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

（しまった！！間があき過ぎた！！これじゃあ次に何を言っても説得力がなくなる・・・）

頑張れ俺！！全国の父親が俺の見方だ！！逃げるな娘に立ち向かえ！！逃げるな！！！！）

「何か冷えてきたね、そろそろ戻ろっか？」

「何で？今きたばかりじゃん」

（逃げられませんでした！！）

スピリットは全国の父親を裏切った

（プレッシャーの与え方がママに似てきたなあ・・・）

マカちゃん、パパはね、マカとママを一番愛しているんだよ・・・ほんとだよ・・・

本当だってばああ・・・！！！！

ブリテン島北部

「ここか・・・」

キッドは滝を見上げながら言った

「地図だとそうみたいですよ!」

「この上に聖剣があるのか?」

ブラック☆スター聞いた

「ええ・・・正確にはここを登ると、洞窟があるみたいです。剣はその奥ですね・・・」

「だけど、この壁をどうやって登るっていうのよ・・・」

そう言っていると、キッドは手からスケボーを出した

「お？スケボー？」

カッ

そして

ゴゴゴゴゴゴ・・・

「ジェット噴射！！？」

「うお！！きたねえー！！」

「くっ！！負けられませんね！！はあ！！！！」

バッ！！

シエルは大ジャンプした

「クソ！俺様も負けられねえ！！」

ブラック☆スターは崖を登ろうとすると

「ちよっと待ってよ！私も上に行きたいの！！お願い！担いで！」

「あー！！めんどくせー！！さっさと乗れ！！一生で一回だからな



「!!」

「べっ別にあんたが好きだから行ったわけじゃ・・・／＼／」

御坂がデレてると

「うっしや!! いくぞ!!」

「え!?! ちよつま・・・」

「うううおおおおおおお!!!!」

ガッガッガダガッ!!!

「きゃあああああああ!!!!」

「だあ!!!!!!」

ズチャッ!!

「よし!! ついた!!」

「ほ・・・本当に一生に一回でいいわ・・・」

妖精の楽園 「悠久の洞窟」

「キッドたち、どこいった!?!」

「この洞窟の奥じゃない？ってシエル先輩！！先行ったんじゃないですか！？」

シエルは入り口の前に立っていた

「いやゝ実はキッド君が・・・」

「ブラック☆スター・・・下が泥で降りられん・・・靴が汚れてしま  
う・・・」

「何やってんの？お前・・・」

キッドが出っ張った岩にナマケモノの様にぶら下がっていた

「頼む、おぶってくれ・・・」

「バーカ、一生やってろ！」

「キッド君・・・こんな所で悪いくせが出るなんて・・・」

「ちよっ！！助けてあげましょうよ・・・」

先にすすもうとする2人をシエルは止めようとした

「こんな難関が待っていたとは・・・聖剣への道・・・なんて過酷なんだ！！」

そして・・・

グチャッ！　グチャッ！

ポタポタ・・・

「お前マジ使えねえゝ・・・」

ブラック☆スターはキッドをおぶっていた  
ちなみに、女子2人は普通に歩いています  
キッドは傘をさしています

「上からの水滴は俺に任せろ！！したの泥は頼んだぞ！！上下からの  
仕打ち・・・これは難関だ！！」

「ホントお前使えねえゝ」

「まあまあ、人それぞれの価値観ですから・・・」

シエルはそう言った

「ん？前から何かくるわよ・・・」

御坂がそう言い、来たのは・・・

パタパタ・・

「あら？」

「きゃーっ妖精だ！！可愛いー！！／＼／＼」

御坂は大はしゃぎした

「おお！！マジだ！！ちっちええ」

そして、キッドは聞いた

「エクスカリバーはこの先にあるのか？」

それにく様様にシエルも聞いた

「どんな場所にあるのですか！？やっぱり番人や鍵とか必要ですか！？」

すると、妖精は・・

「・・・・・・うん・・・」

苦虫を噛み潰したような顔で一言いい去っていった

「何だよ感じわりいな・・・」

「私の質問に答えを返さなかった・・・私のこと嫌いなのかな・・・？それとも、単に言いづらかったのかな・・・？それとも・・・」

シエルは少し落ち込んでいた

「あんま深く考えない方がいいんじゃないですか？ シエル先輩……」

御坂は慰める様に行った

そして

「ここが行き止まりのようだ」

「おい……あれが？」

「うむ……間違いない」

「「「聖剣エクスカリバー！」」」

オオオオオオオ・・・

「す・・・すごいわ・・・」

御坂は驚いていた

「空気が振動しています・・・この本に書いてある聖剣を手にしたものは勇者と称され永遠の栄光を与えられるというのは本当のようですね・・・」

シエルは言った

「それに見てみる・・・精密に描かれた装飾・・・刀身には傷一つ見当たらない・・・美しい!!」

まさに聖剣の名にふさわしい!!

選ばれた勇者しか引き抜くことができない・・・」

・・・ごくり

「「ほ・・・欲しい」」

三人が口を揃えて言っていると

「ワイイ!! 俺勇者!!!!」

ブラック☆スターが先に剣を抜いていた

「「えーーーーー!!!!!!!!?」」

「何であのバカが抜けるのよ!!! やり直しよ!!! やり直し!!!」

「そんな・・・遠野君とのデートが・・・み・・・認めません!!! そんなの!!!」

「そんなばかな・・・何かの間違いだ!!! 君はお世辞にも勇者の柄じゃない!!! やり直さないか?」

「エエ? 何だよノーカンかよ・・・ちえっ!!!」

いいぜ☆何度やっても同じだぜ!!」

「今度は俺にやらせてくれ・・・」

そしてキッドが剣を抜こうとした

「ムリだよムリ! 聖剣はBIGな俺様を選んだんだ!!」

「いいから黙って見ときなさい!!」

「しっ!! キッド君が抜きますよ!!」

・・・ドキドキドキ

しかし

「今まで誰が触って来たかわからんからな」

キュキュ・・・

「「早くやれよ!!」」

そして



「抜けたぞ」

当たり前のように抜かれた

「はあ!?! 何だよこれ!! 次ビリビリやってみろ!!」

「え!?! 私? わかったわ・・・」

そして

「あれ? あっさり抜けた・・・シエル先輩もやってみたら?」

「あ、はい・・・どういことですか・・・あの聖剣が・・・?」

そして

「やっぱり抜けますね・・・」

「どういことだよ!! 穴がガバガバになってんじゃねえの!?!」

すると突然・・・

ポウ・・・

「」「」「?」「」

【よく来たな・・・若者たちよ!!】

「「「聖剣が・・・」」」

剣の光が徐々に増してきた

【挨拶が遅れたな・・・私がエクスカリバーである!!!!】

カツ!!!!!!

「・・・・す・・・・すげえ・・・」

「「しょぼっ♪」」

「「・・・・;」」

ブラック☆スターと御坂は笑い、キッドとシエルはボーゼンとしていた

なにせ、目の前に現れたのは自分たちの身長の半分くらいの謎の白い生物が聖剣の正体だったから

そして、死武専

「テケテケテケ〜♪ジャンプ!!」

サッ・

「……………」

指でマカと遊ぼうとしたら、逆に引かれた

「……………ずん……」

「ねえ……パパ……シユタイン博士が言ってた死武専ができた理

由って何？

紅の王の候補って言うてるラグナロクって何なの？  
教えて！！パパ！！ソウルをやっつけた相手のこと！！」

「……………」

ゆがみのない目で自分の父デスサイズを見ていた

そして、父は口を開けた

「なあマカ？

ここにいる遊庵や辰伶は「真の壬生一族」  
じゃなくて、「造られた命」っていうのは知っているよね？」

「うん。それに、「先代紅の王」も、「壬生京四郎」も真の紅き眼  
をしていたけど、本当は、造られたもの……結局、「鬼眼の狂」  
だけが、本物だった……」

「うん……けど、その真実が知られる、はるか昔……  
つまり、江戸時代が始まる前に、いやそれより遙大昔……  
日本の歴史は裏では全て「壬生一族」が操っていた。壬生一族は神  
の一族とし崇められ、その最高責任者「先代紅の王」は「宇宙の理」  
と呼ばれるほどだった。

はじめの頃の紅の王は、とても優しく民主的で人間そして、同じ一  
族からも愛される存在だった……だからある日を堺に紅の王は人間  
の前で姿を現さなくなった。人間界を侵略し、同じ一族を支配した。  
そして、多くの人間の魂を奪い、日本の暗黒の歴史の始まりとなっ  
た……。

「死神武器職人専門学校」は職人と武器。そして超能力者や侍が若  
いうちから管理し教育する場所さ……二度と「紅の王」のような邪

神を産まないようね」

「じゃあ、あのラグナロクも？」

「うん．．あのままほつといたら間違いなく「紅の王」になるだろう．．．」

（魔剣だけじゃない．．「紅の王」になる可能性を持ったものはまだいる．．  
それにソウルも．．．）

そして、図書室

「御坂のやつ遅いな・・・ブラック☆スターはちゃんとやってるのか？」

中はスツキリしていた

「おお！！やればできるものだ！！地球がひっくりかえっても雑にやると思ったのに・・・」

「あっ♪辰伶先輩！この本しまえばおわりです♪」

「オッスお疲れ様」

「椿！！？上条！！？」

そう、ブラック☆スターは椿と当麻にそうじを押し付けたのだ

「あのたわけ！！2人に押し付けてどこに行った！！」

「そんな、いいですよ、私 お掃除好きですから♪」

「しかし、あいつ上条さんに押し付けるなよ・・・はぁー不幸だ・・・」

当麻が愚痴っているとシュタイン博士が口を開いた

「ブラック☆スターならキッドとその他2名で聖剣をとりにいきましたよ。何かまずかった？」

「シュタイン博士・・・聖剣ってあの聖剣ですか？」

辰伶は聞いた

「そう、エクスカリバー・・・」

「空を裂き、地をもちあげる・・・伝説の剣」

「・・・・・・・・」

先にシュタイン博士が口を開いた

「考えるのはよそう」

「そうですね、やめておきましょう。  
さてと、他を回らなきゃな」

「「？」」

椿と当麻は顔を見合った

そして、ブラック☆スターたちは

「おまえが聖剣？そのなりで？超しよべえー」

ブラック☆スターこれでもかっと思つた

「……ププ……」

キッドは今にも笑いそうだった

「プハハハハハ！！！！！！聖剣！！？あの白身魚みたいなやつが！！？  
今年一番の大笑いなんですけど！！！！ハハハハハハ！！！！」

「ダメですよ……！笑っちゃ、仮にも聖剣なのですから……ププ・  
・！」

御坂もシエルも笑ってしまった



「では聞くが、君はそのなりで何者なのだ!？」

エクスカリバーはブラック☆スターに向けた

「俺か？俺はブラック☆ス「私の伝説は12世紀から始まった!」」

いきなり、遮る様にエクスカリバーは

口を挟んだ

「君たちはみたところ、職人や超能力者のようだな？どこから来た？」

今度は御坂に杖を向けた

「いちいち杖を向けないでよ・・・うつとうしい・・・」

そして、今度はキッドが言おうとした

「俺たちは死武専「そうだ、いいものを見せてやろう・・・」

「聞いというて聞かないのね・・・」

御坂は完全に呆れていた

「なんだあいつ・・・服着るんならズボンも履けよ」

「何を見せる気なんでしょうね・・・お宝とか？」

しかしシエルの予想は当たらなかった

「私の武勇伝が聞きたいか？」

今度はシエルに向けた

「杖を向けないでください！行儀が悪いですよ！」

「武勇伝が聞きたいか？」

「杖をどけてください！！聞こえないのですか！？」

「君たちはどこから来た？」

「だから死武専ってさっきから言おうとしてるじゃないですか！！」

「1から12で好きな数字はなんだね？」

またブラック☆スターに杖を向けた

「あん？1から12？」

もちろん1だ！俺は1番時やなきゃきがすまねえ！！」

「8だ8！シンメトリーだからな・・・」

「私は7ですね！ラッキーセブンの7、！縁起がいいですから。」

「ていうか、なんであんたにそんなの教えなきゃならないのよなんか意味あるの？」

御坂は疑問に思った

「ヴァカめ!! 君たちに選択する権利はない!! 私<sup>の</sup>伝説は「12」世紀から始まったのだ!!」

「好きなもの選べって言ったじゃないの!! なんなのよ本当に!!」

しかし、エクスカリバーはソッポ向いた

「だいたい何が伝説の聖剣だよ!! なんなんだの本は!! 誰が書いたんだ!!」

「そうよ!! その本が全部悪いのよ! 詐欺よ詐欺!!」

「著者を教えろ!! 死神の権限で死刑に処す!!」

「ちょっと見せてください! 著者 「エクスカリバー」・・・」

「「「お前か!!!!」」」

「サインはやらんぞ」

ポーズを決めてエクスカリバーは言った

そして図書館

「シュタイン博士・聖剣ってどんな武器なんですか？」

椿は聞いた

「あれね」

手にしたものは光の翼をまとい瞬間移動も可能にする。

そして剣の一振りは空間をも切り裂く！！

この世に存在する武器で間違いなく最強だろうね」

すると、当麻が口を挟んだ

「でも、そういうのって選ばれた人しか「魂の波長」が合わないん

でしょ？

上条さんみたいな不幸体質は一生あわないでしょうね」

しかし、答えは意外な返答だった

「ん〜と、そうでもないんですよ・・・

以外と誰とでもあっちゃったりするんだよね・・・」

そして、ブラック☆スターたちは

「「「・・・・・・」」」

4人共たくさんのレポートを手を持っていた

「私の職人になるに当たり・・・・守ってもらいたい1000の項目がある！」

レポート用紙にまとめておいた  
しつかり目を通しておくように！」

「裏までびっしり書いてあるぞ・・・・」

「以外と几帳面なんですね・・・」

「こういうのが几帳面っていうんですか？」

「452番目の私の5時間に及ぶ「朗読会」にはぜひ参加願いたい  
」

【でわ！！】

エクスカリバーが剣の姿にもどった

オオオオオオオ・・・・！！

【君たちは選ばれたのだ、そして！！手に入れる！！勝利と栄光を！！】

「勝利！！！！」 「栄光！！！！」

カァアアア・・・！！！！

【さあゆこう！！ ともに！！！！】

「」「サクっと」「」

4人同時に、剣を地面にさした

「バーカ！！！！誰がお前なんかを！！」

「虫酸が走るわ！！」

「あなたと組むぐらいなら、吸血鬼と組みます！！」

「二度のあたしの前に現れないで!!」

そして、シュタイン博士はいった

「いくら『魂の波長』が合っても、エクスカリバーと『人としての波長』が会うやつがないんだよ」

【待て!! 待ってくれ!! よし!! わかった!! 1000の項目を800まで減らしてやる。

でも朗読会には参加してもらいたい】

しかし、誰も聞かなかった

「あいつと付き合えるやつはある意味勇者だな・・・」

「虫酸ダッシュ!!」

「期待した私がバカでした・・・」

「はぁ・・・家帰って寝よ・・・」

そして、入って来たように帰った

すると、また妖精がやって来た



「あら、エクスカリバーには会えたの？」

すると、4人共苦虫を噛み潰したような顔になった

「・・・会えたみたいね・・・」

次の日

（おはよう！）      （うーす！）

昨日の4人が廊下であった

「」「」「・・・」「」

ギユ・・・ギユ・・・

「みんな・・・お互い　いいパートナー持ったな!!」

「うむ!!」

「パートナーは大切ですね!　これからよろしくね、セブン!」

「べっ別にあんたが、いいパートナーだなんて思っていないからね!  
当麻!!／／／」

「?」

互いのパートナー全員不思議に思った

タツ・・・

「うっす!!　皆さんお揃いで!!　散々な目にあっただってな!　ブラック☆スター!  
キッド!　ビリビリにシエル先輩!」

全員「ソウル!!」

ソウルとブラック☆スターは拳をコンッとぶつけ合った

「もう大丈夫なのか?　お前がいないとやっぱ盛り上がらねえよ!」

「オウ!!　サンキューな!!」

(クスクスクス)

喋っていると、周りから笑い声が聞こえた

「おい、ブラック☆スター・・・さっきから笑われてる気がするんだが・・・」

「エ？」

(クスクス・・・あの4人やっちゃったの?)

(御坂さんも?意外だ)

(シエル先輩まで?イメージ変わったぜ)

「ちょっと4人共!!早く教室に来て!!」

マカが4人を呼んだ

「「「?/?/?/?」」」」

そこには、それぞれの名前が書かれたエクスカリバーの写真付きの花輪が飾られて

そして、一番上に「いつでも待ってるよ」と書かれていた

「「「マジかよ・・・」」」」

4人共呆気とられていた

「うわぁ何コレ・・・」

「ああ・・・きついな・・・」

ソウルもマカも引いていた

「ホントうぜえー・・・」

「虫酸ダッシュ」

「我慢なりません・・・！」

「死ねばいいのに・・・」

と、また苦虫を噛み潰したような顔で言った

く聖剣伝説 その1 完く



## 第7話 聖剣伝説 その1 それぞれの野望（後書き）

京次「シエル先輩とビリビリのあの顔は各自ご想像ください！  
ちなみに、服装は、シエルは死武専では、いつも通りの制服。外に  
でたときはあのシスターっぽい戦闘服です。  
御坂もいつも通りの制服です。」

先代「それでは、次回までこきげんよう  
次回は物語が大きく変わります！」

## 第8話 妖刀編 その1（前書き）

京次「今回の話は自分なりに力を入れて書きました。

皆さんが楽しく読めてもらえば嬉しいです・・・それでは妖刀編その1をどうぞ!!」

## 第8話 妖刀編 その1

デスルームにて．．．

「．．．覚悟はできてるんだね？辛い闘いになるよ？」

死神様は、椿に聞いた

「．．．はい！！妖刀マサムネは妹の私がこの手で止めます！！」

椿は、迷いなく答えた

「ブラック☆スターは何て？」

「「私に魂を預ける」と言ってくれました．．．」

「うん、いいパートナーを持ったね♪」

「はい♪」

椿は、どひっきりの笑顔で答えた。

しかし椿は、後に味わうことになる

生きた修羅地獄を．．．



Ⅰ 妖刀編 そのⅠ

数時間後、再びデスルームにて．．．

「それで行かせたのですか？ブラック☆スターと椿を．．．相手は妖刀．．．「紅の王の候補」ですよ？遊庵と戦った補習とはワケが違います．

．．．妖刀は僕が叩くべき相手です！」

シュタイン博士はそう出張した

「そうだね。でもね、マサムネは死武専の敵である前に、椿ちゃんの兄だ・・・これは椿ちゃんのケジメでもあるんだ！あの子は衝動的に物事を決める子じゃない・・・」

死神様はそう言い、シュタイン博士を制した

「そうですか・・・まあ、念のために上条当麻を連れて行かせました。彼の能力の「幻想ごろし」は何があっても、使えますからね・・・」

「そうかい・・・でもね、ぶっちゃけると、私も不安なのだよ・・・」

少し、死神様の表情が曇った

「そりゃ、相手が妖刀ですから・・・」

「違うよ、心配なのは、そこじゃない・・・」

「???　と言いますと?」

「椿ちゃん達が行くところはね、「あの樹海」の中にある村に行くんだよ」

「っ!?!　まさか!あの「魔王」が居たところに!?!」

シュタイン博士は何かを確信した

「・・・今回は、とても簡単に終わりそうにないね・・・」

死神様はそう呟いた

（・・・でも、椿ちゃんは死ぬ覚悟だってできている!! きっと無事にもどってくる!!）

そして、東アジアの「針の村」

「ひゃっはあああ☆!!!! こんなど田舎に俺様のようなスターが来てやったぞ!! ありがたく思え!!」

ブラック☆スターは村の銅像に立って、叫んだ

「ちょっとブラック☆スター・・・壊さないでよ・・・」

「ハア・・・久々の任務かと思ったら妖刀退治の手伝いかよ・・・」

・俺、生きて帰ってこれるかな・・・」

そして、椿と当麻がいた

「それにしても、こんな村がなんで妖刀のターゲットになったんだ？」

ブラック☆スターは椿に聞いた

「ここの村人は魂の質がいいのよ」

そう言い、話していると

「コラ！村の守護神に乗るな！！罰当たりめが！！」

村の老人が現れた

「む？なんだジジイ！！さては貴様が妖刀か！！」

ブラック☆スターは老人の胸ぐらを掴み脅した

「ちょっと、ブラック☆スター！私の兄がこんなにお年寄りなワケないでしょ！」

「妖刀もビックリだな・・・」

椿は否定し、当麻は冷やかした

ザッ・・・

「どうしたの、じいちゃん？客か？」

この村の少年の「リヨク」が現れた

「お前が妖刀か！！」

ブラック☆スターは、さっきと同じようにいった

「私の兄って言ったでしょ！どう見ても年下じゃない……」

ザワザワ……

村の人たちが集まって来た

「もしや、お前らの内の……モゴモゴ……」

「もういいって……」

椿と当麻はブラック☆スターの口を抑えた

そうこうしていると、リヨク少年はブラック☆スターの肩にある星の刺青を見た

「……！！」

すると……

「「星族」がこの村に何のようだ……！！また俺たちを殺しに来たのか！！」

3人「「!?!」」

「その肩の刺青!!お前は「星族」の生き残りか!!」

今度は老人が言った

「星族・・・?」

椿はボソツと言った

ヒュっ・・・

急に何かが投げられた

パシ!

ブラック☆スターはソレをキャッチした

見てみると・・・

「金・・・」

すると、またリョク少年は言った

「お前ら「星族」は金のためなら何でもやるんだろ!?そいつをやるからとつと出てけ!!」

「・・・チッこの村もかよ・・・」

そう言っていると

ヒュン!! ヒュン!!

村人「出て行け!! 二度とくるな!! 死ね!! 星族!!」

石を投げながら、村人達は、ブラック☆スター達を追い出した

バキ!!

流れ弾が当麻にあたった

「不幸だあああああ!!!!」

数分後

ザーーーーー・・・

「クソ．．．雨が降って来やがった．．．」

ブラック☆スターは木の枝に立って村を見下ろした

「どうだ？何か見つけたか！？」

木の下で当麻は聞いた

「いや、何も。俺はマカみたいに魂反応で感知できないからな．．．  
こうなったら、五感に頼るしかない。でも、こん雨だとねえ鈍っ  
ちまうぜ．．．」

「そうか．．．村にも近づけねえからな．．．お手上げ状態  
か。」

呆れ気味に当麻はそう言った

．．．．．シュタ！

喋っていると、椿がもどってきた

「．．．．．」

「なんだよ？．．．．．さっきの村のこと気になってんのか？」

ブラック☆スターは椿に聞いた

「え？べつ別にそんなんじゃ．．．．．」

「めんどくせえ昔話すんの、好きじゃねえんだよ．．．．．」



「・・・はい。もう聞きたそうな顔しません・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ブラック☆スターと椿は、互いに黙り込んでしまった。その場にした当麻は

（きつ気まずい！！俺、この場にいていいのか？）

と、少し不安に思った

そして

「・・・・・・・・あゝもう！！わかったよ！！いえばいいんだろ！！前にもあったろ？肩の刺青見て知らんおっさんが急に掴みかかってきたことが」

「・・・・・・・・はい」

ブラック☆スターは続けた

「俺の一族は「星族」って言って、金のためならなんでもやる殺し屋だったらしい・・・」

俺はその一族の唯一の生き残りだ。  
いろんな人間に手をかけたらしい・・・あの村もその一つだろ。だから星族はそこらじゅうで恨まれてるワケだな・・・」

「・・・じゃあ、いまその一族は？」

椿は聞いた

「俺が生まれる前に半分の奴らが「鬼眼の狂」に殺されて、そして今から13年前……死武専のやつらに全員ぶっ殺されたよ」

「……………!!」

「その時は俺は、まだ赤子だったからな、そのまま死武専に引き取られたのさ……はい！おしまい!!」

「もしかして、死武専をうらんでいるの？」

再び椿は聞いた

「別に。まだ少ししかスター性がなかった時の話だぜ!？  
オヤジもお袋もとんだ悪党だった……で、殺された。それだけだ……」

けろっとブラック☆スターは答えた

「けどそのせいで、関係ないブラック☆スターが恨まれるのは、なんか嫌だわ、私……」

椿は悲しい表情でいった

「ぶっバカかお前♪そのおかげで、目立ってたじゃねえかよ☆ひやはははははは☆」

ブラック☆スターは笑い飛ばした

「・・・・・・・・クス♪」

椿もつられて笑った

けれど当麻は

（・・・・・・・・嘘ばっかだな・・・・・・・・ブラック☆スターは憎まれることで目立ちたい性格じゃない・・・・・・・・）

と、険しい顔でそう思った

ザアアアアアア・・・・・・・・

「お、雨が強くなってきやがった・・・・・・・・」

当麻はそう呟き、空を見上げた

そして、再び針の村

ザッ……

天笠をかぶった青年が現れた。その青年こそ、妖刀「マサムネ」である

「我思ふ 寝る？ 遊ぶ？ 否。喰う！！」

俳句口調でいった

「うむ！！上出来……」

ザアアアアアア……

「否。雨でぐしゃぐしゃだ……」

と、濡れた紙をみながら呟いた

村の小屋にて．．．

カタカタ．．．

そこには、鎌を持って震えるリヨクがいた

「さっきは勢いでタンカきっちゃったけど、こんな鎌でどうにかなる相手じゃないよな．．．あの星族なにしに来たんだよ．．．また村を襲いに来たのか．．．？」

ザッ．．．

先程の青年が現れた

「っ！？　オイ！！　なんだお前は！？」

「我思ふ 貴様に恐怖が あるようだ」

「．．．．． なんだよ別そんなのねえよ．．．」

しかし、そういいながら、ブラック☆スターが脳裏に映った  
それを見抜いたマサムネは

「どうかな？強いものは強い！弱いものは弱い！この世は力こそが  
全て！！！！力さえあればお前のその「恐怖」ぬぐえるぞ？」

「．．．．．！！！」

「貴様に選択する権利をやろう．．．．」

欲しいか．．．？

「ぎゃあああああああ……!!!!!!」

ピクッ!!

「出た!!」

ブラック☆スターはその声を聞き逃さなかった

「「エ?」

「椿! 当麻! いくぞ!!」

「はい!」 「オウ!」

ダッ!!

三人は再び針の村に向かった

（兄さん．．．．）

＼その2に続く＼



## 第8話 妖刀編 その1（後書き）

京次「次回は妖刀マサムネVSブラック☆スター&当麻です！

妖刀マサムネのは、なぜあのようなになったか？そして、椿の思いは届くのか？

次回をお楽しみに♪」

## 第9話 妖刀編 その2 妖刀の正体（前書き）

京次 「ついに始まったV S 妖刀!!! 当麻にとっては初めてのバトル  
!!! 一体どの様な結末があるのか!?! 第9話どうぞ!!!」

## 第9話 妖刀編 その2 妖刀の正体

ザアアアアアアア．．．．．

再び針の村にて．．．

「リヨ．．．リヨクうー、どうしたんだ!？」

そこには、村の老人が襲われていた。老人の目線の先には．．．

「リヨク．．．? 否! 俺は妖刀．．．ゆえに魂を喰らう!」

黒い刀身をした刀を握るリヨクがいた。

パシャ．．．

「!」

「ひゃっ．．．はああ!」

ガン!!

「うおおおおお!!」

サッ……

ブン!!

「くそっ!!」

そして、ブラック☆スターと、当麻が奇襲をした。

「ブラック☆スター!! あいつが妖刀か? 雰囲気はおかしいけど、村にいた少年だよな?」

「椿……どうなってる……」

「妖刀の能力「魂憑依」」

「「魂憑依?」」

「ふだん職人と武器はおたがい「魂の波長」を合わせて一体化するでしょ?」

でも妖刀の場合、一方的に相手の魂に取り憑いてその人間を操る。そして最後にはその人間の魂を喰いつくすの」

そして……

（あれが妖刀……美しかった刀身があんなくすんだ色に……）

妖刀をみながら、椿は心でそう感じた

「ほうくお前は・・・」

シュパッ!!

妖刀は素晴らしいながら、駆け出してきた

「椿! どうすればいい?」

「解決策はあるのか?」

ブラック☆スターと、当麻は聞いた

「ええ! いくら妖刀でも、二つの魂の波長は操れないはず!!  
ブラック☆スターの波長をあの少年の波長に流し込んで、波長を反  
発させてはがせれば、あとは私かなんとかするわ!!」

ジャラ!

バツ・・・

二人は妖刀から距離をとった

「うし!! 「魂の波長」を打ち込めばいいんだな!!」

「分かった!! 俺も援護するぜ!!」

ブラック☆スターと当麻はそう言った

「ありがとう．．．。私は妖刀を追うために死武専に入ってきた．．  
．こんな兄弟げんかに二人をまきこんでしまつて．．．私．．  
二人を利用してるかもしれない．．．」

椿は急に自虐的にそう言った

「何言つてんだよ！職人と武器はもちつもたれつだろ？お前は俺を、  
もつともつと頼りにしていいんだぜ！！」

「そうそう！人間誰だつて一人じゃどうしようも無い時だつてある  
んだ！むしろ、俺みたいな不幸な人間を頼ってくれて俺は嬉しいぜ  
！！」

二人は椿にそう言った

「二人とも．．．．．ありがとう！！」

椿が二人にそういつてると

「食事の邪魔は許さん．．．この世は弱肉強食！！力があるものに  
暴飲暴食が許される！！」

チャ．．．

妖刀はそう言い、ブラック☆スターに斬りかかった

「せい！！」

ガン！！

ブラック☆スターはなんとかガードしたが

「ぬん!!」

ガギャ!!

「なっ!!?ぐああ!!」

ブラック☆スターはそのまま飛ばされてしまった

（ブラック☆スターが力負けした!?!いくら憑依した人間を操れる  
といっても、職人の中でもトップレベルのパワーを持つブラック☆  
スターを圧倒する力を持つ武器なんてほぼいないのに。まして、そ  
れ程の力を引き出す能力は妖刀にはないはず・・・  
もしかして、妖刀以外に何かいるの?）

椿はそう疑問に思った

「ブラック☆スター!! くそ、妖刀!! てめえのその幻想をぶち  
殺す!!」

当麻はそういいながら、妖刀に殴りかかった

しかし・・・

ドッ・・・

「!!なっ!!?」

「傀儡影!!」

ポタポタ・・・

少年の影の中から現れた人型の形をした影の手が、当麻の肩をかすった

ザザッ・・・

「クッ・・・」

「当麻！！大丈夫か？」

「ああ・・・クソ、憑依された人間の影まで操れるのかよ・・・」

『シャドウ・・・』

「行け！！傀儡！！」

再び妖刀が襲いかかった

「2対2か！！当麻！お前は影のほうを頼む！  
何とかしてくれ！！」

「OK！！野郎は異端の存在！！この右手で消してやる！！」

そう言い、当麻は影のところへと走って行った

「さっきは力負けしたからな、普通の接近戦じゃ不利だ！椿！！スピードでかき回すぞ！！モード「忍者刀」！！」



「はい!!」

チャ・・・・

「速☆星!!」

スパシツ・

「ほう、速いな・・・」

妖刀は格段と増した速度に感心した

「見たか!俺のスピード!!ひやはははは☆見えねえだろ!!」

ずるっ!!

「お!？」

ズルルルルルル!!

「あわわわわわ!!」

キーーーーン・・・・!

「あふん!」

ブラック☆スターの金的が建物の角に当たった

「速☆星は足場の悪くなる雨の日は向いてないわ、ちなみに明日のお天気も雨!!!気をつけて」

「時代が俺に追いつけねえとはな．．．俺が生まれるのが早すぎたってことか．．速☆星．．．ディープだぜ．．．」

プルプルと震えながらブラック☆スターはそう言った

一方、当麻は

ユラユラ．．．

『シャドウ．．．』

「クソ、細身の上にユラユラ揺れるから当てにくいぜ．．．だが、何とか一発当てないとな．．」

『シャードウー!!』

影の手が迫ってきた

「こうなったら、行くぞ!! うらああああ」

ダッ!!

ドコ!!

カウンターで幻想殺しの右手がが影に当たった

プシュウウウ．．．

「ハアハア．．．ようやく当たったぜ。流石に攻撃中はよけきれ

ないからな．．．」

しかし

シュオン！！

影が本体へともどって行った

「クソ！！まだ終わってねえか！！」

そう言いながら、ブラック☆スターのところへ向かった

そして

「ちっ、波長を打ち込む暇がないな．．．何とかしねえと．．．」

ブラック☆スターがそう言っていると

「ブラック☆スター！！気をつけろ！！そいつ、また影を使ってくるぞ！！」

当麻が戻ってきた

「何！？」

しかし、妖刀はすでに影を呼び出し構えをとっていた

「あの構え、気をつけて！！突きによる一閃が来る！！」

椿が叫んだ

「当麻!! 下がってろ!!」

ブラック☆スターは当麻に叫んだ

「死ね!!」「傀儡突き」!!」

ドッ!!

影のオーラを覆った突きが炸裂した

(見切る!!)

ガギャギャギャ!!

紙一重でブラック☆スターはかわした

「行けッ!! 当麻!! もしかしたらお前の能力で妖刀の憑依を消すことができるかもしれん!!」

「わかった! ブラック☆スター!!」

そして、当麻が行こうとしたら

「甘い!」「枝分かれ」!!」

ドシュ!!

「!!」

影のオーラから無数の棘が出てきて二人の体に刺さった

「くっ……」

「ハアハア……大丈夫か！？ブラック☆スター！！」

チラッ……

（当麻……！！）

（！！ブラック☆スター！！）

……コク！！

二人は目で会話した

『シャードゥー！！』

再び影が襲いかかった

「くっ……」

（まだだ……）

「椿……モード「鎖鎌」」

「はい……」

ザッ！！

そして、妖刀も攻撃してきた

「まだか！？ブラック☆スター！？」

刀を防ぎながら当麻は聞いた

「もうちょいだ！！」

それにブラック☆スターは答えた

（こんなの・・・俺の時代じゃねえ！！）

来い！！俺の時代！！

「しぶとい奴らめ、とどめ！！」

影と妖刀が同時にきた

シュタ シュタ！！

ブラック☆スターは銅像の頭に、当麻はその下で構えた

（（来い！！））

「死ね！！」

『ドゥー!』

妖刀は空中から、影は下から攻めてきた

( (来た!!) )

「魂の共鳴!!」

「はい!!」

ブウン!!

「楯☆星!!!!!!!!」

ガン!!

「!!」

鎖でできた星型の結界が妖刀の攻撃を防いだ

「肉を切らせて骨を絶つ!! なかなかしとめきれない攻撃の焦りからまんまと飛び込んできた・・・ブラック☆スターの領域へ!!」

「傀儡!!」

『シャドゥー!』

影が襲いかかってきたが

「邪魔だ!! さっさと消えろ!!」

来るのを狙っていた当麻が攻撃をした

ドコ!!

プシュー……

そして、傀儡は消えた

「お前の時代は終わったあ!! 空中戦こそ俺の時代!! その名も!!」

俺時代!!!!!!

バチバチバチバチバチバチ!!!

妖刀にブラック☆スターの十八番「黒☆星ビックウェーブ」が打ち込まれた

「ぐう……だが、これしきの波長で俺の憑依が解けるものか……」



「今だ!! 当麻!!」

「何!?!」

ダッ!!

そして、当麻も空中に飛んだ

「歯をくいしばれよ妖刀!! 俺の最弱はちつとばつか響くぞ!!」

ドコ!!

当麻の幻想殺しが当たった

バババババババババババ!!

バチン!!

そして、リョクとの憑依が解かれた

「「今だ椿!!」」

「はい!!」

そして椿は妖刀を取った

「ほう、おもしろい... 俺の中に入って来る気だな...」

チャッ...

「ありがとうございます。ブラック☆スター、当麻くん。いつてきます」

椿は二人に笑顔を向け、言った

（ここからは私の戦い．．．妖刀は私がしとめる！！）

ドクン！！

「あああああああ！！！！！！」

ゴゴゴゴゴゴゴ．．．

「椿！！」

ザアアアアア．．．

雨の降る村の中、椿は刀を握ったまま気絶した

「絶対帰ってこいよ．．．」

ブラック☆スターはそう言い残した

妖刀の中

「ここが．．妖刀の中？」

その世界に椿はいた

ザッ！！

「椿．．．．」

「兄さん！！」

そこには、妖刀の正体マサムネがいた

「．．．兄さん．．．何で鬼神に．．．」

そう言いながら兄に近づいたら

ドクン！！

「っ！！来るな！！椿！！」

「兄さん！？」

ゴゴゴゴゴゴゴ！！

「逃げろ．．．椿．．．があああああ

あ！！！！！」

「兄さん！！！！」

オオオオオオオオ．．．

ドクン！！

（この感じ、まさか！！）

「ククク．．．この世に戻るのは久しいな．．．」

そこには、もう椿の兄はいなかった．．．

「さて、久々に狂い踊るぞ．．．」

そこにいたのは、椿の兄の姿をし、左眼に火傷のあとがある．．

「第六天魔王．．．」

織田信長！！！！

「第六天魔王は、不滅だ！！！！」

く  
妖刀編  
その2  
完  
く

## 第9話 妖刀編 その2 妖刀の正体（後書き）

死神様「なんと、妖刀の真の正体は織田信長！？椿ちゃん大ピンチ！！しかし、なぜ椿ちゃんの兄に乗り移ったんだろうね？

次回に全ての答えが！！

次回！！ 妖刀編最終回！！

絶対見てね☆

**第10話 妖刀編 最終回 椿の花 香りの無き花（前書き）**

京次「妖刀編 最終回！！椿は第六天魔王を倒すことができるのか！？そして、兄をこせるのか！？最終回をどうぞ！」

## 第10話 妖刀編 最終回 椿の花 香りの無き花

「そんな．．兄さんが！ 信長に．．．！！」

「フン、この男の妹か．．．こんな小娘一人が俺の魂を奪いにきたのか。俺も甘く見られたものだわ．．．．」

信長は吐き捨てるように言った

「信長！！兄さんの体を返してください！！あなたの時代は終わったのです！！」

椿は叫んだ

「そういわれてまんまと従う馬鹿がどこの世界にいる？どうしても返して欲しくば力ずくでこい！！」

カチャ．．．

信長は妖刀を呼び出した

カチャ．．．

それに続くように椿は鎖鎌を出した



「「覚悟!」」

一方 針の村は

ザアアアアアアア．．．．．

「．．．．妖刀の中に入ったか．．．椿．．．」

ブラック☆スターは気を失った椿を見つめそう呟いた

「．．．．椿は絶対もどって来る。俺は信じる!」

当麻は強く願った

．．．．ゾロゾロ．．．．

「リョク!？」

「!？なんだ？村の人たちか？」

当麻は村の人たち全員がこちらに来るのを見た

「なんてこったいゝ．．．星族のせいでリョクがゝ」

「リョクの親分ゝ．．．」

「ひでー！人間じゃない．．．」

村人たちはそう言った

「こいつ等、さっきから言いたい放題．．．」

当麻が言おうとした瞬間

ギュっ．．．

「クソ．．．．．村から出てけ!!」

そう言いながら村の少年が棒でブラック☆スターを殴りかかろうとした

「っ!？やめろ!!」

当麻が止めにかかるが

サッ・・・

「!？」

ブラック☆スターは当麻を止めた

ゴン!!

「!!」

そして、そのままブラック☆スターは殴られた。  
しかし

「椿!!」

ドスン!!

ブラック☆スターは椿の前であぐらをかい

「な〜に無視してんじゃ〜!! 出てけ出てけ!!」

ゴンゴンゴン!!!

村の少年はブラック☆スターをタコ殴りした

数分後

「ハアハア．．．．ハアハア．．．」

村の少年は息切れをしていた

「すっ．．．すげえ．．．」

当麻はブラック☆スターの頑丈さに驚いた

「椿．．．ぜってえ帰ってこいよ☆」

ブラック☆スターは椿をずっと見守っていた

妖刀の世界

シパッ シパッ シパッ

「はあっ!!」

椿は鎖鎌で信長に攻撃をした

ガン!!

「非力だな!!」

しかし、呆気なくガードされ・・・

ガシ!!

「ぐっ!!」

顔を掴まれた

「どうした?こんなところで俺と遊びにきたのか?」

パシャ・・・!!

「!!」

椿は水面に押し込まれた

ゴポゴポ・・・

「椿という名だったな貴様は・・・  
フン、名の通り「椿の花」と  
一緒だな・・・」

バシャバシャ!!

そのままどんどん水面に押し付けた

「「香りのない花」自身を出張せず、地味に咲き、地味に散る!力の無き花よ……陳腐な花だ!」

チャッ

「!」

コオ……

天魔・骸手!!!!!!

ドオオオオオ!!!!!!

「クク……外の世界だったら死んでたぞ……?」

ザパ!

「ゴホッ!!　ゴホッ!!　はあはあ……」

「……相変わらず人を憐れむ様な眼で見ているな貴様は……  
そんなに俺がかawaiiそうに見えるのか？」

信長は椿にそう言い、罵倒した

一方、ブラック☆スターは

ザッ……

ゴゴン!!

二人の村人から殴られた

（椿……!!）

しかし、見守ることを決してやめなかった

そして、デスルームにて

そこには、死神様とキッド組とシエルがいた

「ははは♪ブラック☆スターの「眼中にない」っぷりがすごいねえ」

死神様は感心した

「・・・父上、椿がさっきから動かないけど、何をやっているんだい？」

「もしかして、魂が取られてしまったのですか!？」

キッドとシエルは聞いた

「うん・・・椿ちゃんと妖刀はねえ」

死神様は何かを説明しようとしたが・・・

「・・・？死神様？」

「・・・シュタイン君」

鏡でシュタイン博士を呼び出した



「!?!? はい? なんですか?」

ちなみに弁当中である

そして

「えーとですねー簡単に言うと、椿とマサムネは魂の引っ張り合いをしているわけです。

椿は妖刀の特殊能力「魂憑依」で魂を乗っ取りにきたところをあべこべ吸収してやろうと奮闘してるようですね」

シュタインはそう説明した

するとキッドは

「ミイラ取りがミイラになるか・・・しかし椿に勝算はあるのですか?」

そう質問した

「・・・難しいですね・・・戦いの場は妖刀の世界・・・それに

「魂の引っ張り合い」は妖刀の十八番

・・・勝てる確率は極めて低いですね。この戦いは無謀としか・・・」

シュタイン博士は険しい顔をしながら答えた

「それだけではなくて、妖刀の中に信長がいます!」

シエルは唐突に言った

「何!?!あの信長が!?!」

キッドは驚いた

「はい! ああのブラック☆スターを圧倒するほどの力!そして、針の村は青ヶ原の樹海の近くの村!間違はなく、妖刀マサムネは信長にとり憑かれています!!!」

シエルはそう断言した

「ますます椿にとって状況が悪くなって行く.....しかも、自分の兄が信長に憑依されてるなんて.....」

シュタインも表情を悪くした

「おくんおくん... 兄妹で殺し合いだなんて、しかも、操られるなんて、私はパーティーがパーティーじゃない人生なんて考えられないってのによお.....」

そう言い、リズは共感の涙を流した

「人生なんとかなるもんよ♪おねえちゃん♪」

パーティーはニツコリとそう言った

「あんたみたいに可愛い娘いないからね!! 悪霊なんかにとり憑か

れないように、おねえちゃんがしっかり守ってやるからね!!」

「たはは♪」

そう言ってパティーをギュッと横から抱きしめた

「心の弱さが邪神「紅の王」への道へと進ませる．．．先代は人間の世界への「絶望」から新しい世界を作るためにために破滅の「力」を求めた．．．妖刀マサムネは何故「力」を求め信長なんかに魂を売ったのでしょうか．．．」

シエルは妖刀に対してそう思った

そして妖刀の世界

チャラ・・・

ギョーン！！

椿は鎖鎌を信長に投げた

「この男の記憶からわかっているぞ・・・手裏剣・・・けむり玉・・・  
変わり身・・・忍者刀・・・」

カン！！

そう言いながら鎖鎌を弾いた

「何故鎖鎌しか使わん！？」

ビュッ！！

椿は信長に近づき鎖鎌でこうげきした

ドッ！！！！

「俺への遠慮か！！？」

信長は椿のこうげきを受け流し、椿を斬った

プシュ・・・

「いや・・・兄に対しての憐れみか・・・」

「くっ・・・」

チャツ・・・

「!!」

「貴様・・・勝つ気はあるのか？」

「・・・・・・・・」

「言っておくが、貴様の兄は自ら頼んで俺に魂を売ったのだぞ？力を求め、強さを求める為にな!!」

「!？」

「強さとは己との戦いに克ち抜いてきた者のみがてにするモノ・・・」

それができぬ者を他者が憐れんで、何のイミがあるというのだ？

己の壁は己でしか越えられぬ・・・強さは、己の手でしかつ

かめぬ・・・

だからこそ、この世で一番尊きモノ・・・

強き者は生き弱き者は死ぬただ、それだけだ

それ以上でもそれ以下でもないわー!!」

ドスドス!!!!!!!!!!

「!!」

天魔・霊骸乱魔!!!!!!

信長が呼び出した悪霊たちの刃が椿の体をつらぬいた

「ブラック……☆……スタ……」

再び針の村

4人の村人がブラック☆スターを囲んでいた

「椿……死武専の入学式に俺様がやったステージを覚えて  
いるか？」

ブラック☆スターは椿にいった

ドゴドゴドコッ!!!

それと同時に、村人達から頭をバットなどで殴られた

ダッ!!

「いい加減にしろ!!!」

当麻はブラック☆スターをかばった

しかし、ブラック☆スターはそれを気にせず

「俺は覚えている!!!」

椿との会話を続けた

## 死武専入学式

「ひゃっはああ！！！！てめえくらおぼえておけ！！」

死武専の門のてっぺんでブラック☆スターは叫んだ

「俺があ！！！！ブラック☆スターだあ！！！！」

ザワザワ・・・

「俺は神を超越する！！いや、すでにしかかっている！！凡人どもよ！！！！そうしょげるなよ！！！！俺がヤバすぎるんだ！！！！」

聞いている人達は全員困惑していた

「天上天下唯我独尊！！！！明日の俺には後光が射すだろう！！！！」



ぴゅううううう．．．

すでに誰もいなかった

「フッ今の時代には早すぎたようだな．．．」

パチパチ．．．

「!？」

ただ一人を除いては

「．．．．．；」

それはポツンと残された椿だった

シュタッ!!

ブラック☆スターはそれに気づき門から降りた

テケテケ．．．

そして、椿をジロツと見た

「．．．え．．．え」と．．．よ、よかったです．．．」

椿はオロオロと言った

「ほうゝ．．．お前は俺の才能に気づいた一番目のやつだ!! オメデトウ!! 覚えてやる!! 名前は？」

「はい♪椿．．．．「武器」です！」

「ブラック☆スター「職人」だ☆」

そう言い、互いに紹介しあった

「あの時お前は俺様のステージを最後まで見届けてくれた!!」

ザアアアア．．．．

「今度は俺が見届ける番だ!!」

ブラック☆スターは氣を失ったパートナーを見守り、そう言った

そして

「なんだてめえは！！星族をかばうつもりか！？」

村人の一人が当麻に言った

「ああ！！守るつもりだよ！！大事な友達だからな！！」

「な！？」

村人は当麻の発言に驚いた

「お前等さっきから星族のどうのこうのとか言いながら、タコ殴りしていたよな……たしかに、昔星族がお前等を苦しめたのは事実だろうな……」

当麻は続けた

「でもな！！今ぐらいそつとしいてやれよ！！あいつは今、たった一人しかいない大事なパートナーが帰って来るのをずっと待っているんだぞ！！それを、俺等が邪魔すんじゃないやねえよ！！」

当麻は村人達に叫んだ

スタスタ……

しかし、それを聞かずに村の小さな少年が椿に近づいた

「何だ？この女．．．さっきから全然動かないぞ．．．」

「!? しまった!!」

当麻は今気づいた

「お前もこの村から出てげえ!!」

そう言いながら椿を棒で殴りかかった

「椿!!」

パシ!!

「「!?」」

棒が誰かに掴まれた

メキメキ．．

「おい．．．ガキ．．．今度、椿のステージを邪魔しやがったら．．．」

バキ!!

「殺すぞ．．．」

ギロ!!

ブラック☆スターは鬼の形相で村の人達を睨んだ

「う．．．．．」

村人達は圧倒された

「黙ってそこで見てろ!!」

そして、ブラック☆スターは椿に向き直った

「ブラック☆スター．．．」

当麻はただそれを見ているだけしか出来なかった

そして、妖刀の世界

「・・・・・・・・ここまでだな、椿よ・・・・・・・・」

カチャ・・・・・・・・

信長は刀を椿に近づけた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「貴様の魂をいただく!!!」

ドッ!!!

そして、刀が体をつらぬいた

「・・・・・・・・え?」

「がっ・・・・・・・・・・は・・・・・・・・」

信長が信長の身体を自分で刺して・・・・・・・・

「・・・・・・・・椿・・・・・・・・」

「・・・・・・・・!!! 兄さん!!!」

椿の目の前には信長ではなく、兄マサムネがいた。左目の火傷跡は今は消えていた

「椿．．．．．すまない．．．．．お前に迷惑をかけるなんて本当にダメな兄だな．．．．．」

「どうして、信長に．．．．．」

「そうだ．．．．．信長の言うとおり．．．．．俺は自ら進んで信長に魂を売った．．．．．！」

そして、マサムネは続けた

「俺たち一族は．．．．．特殊な武器一族．．．．．先代の能力は全て受け継がれる．．．．．だから、全て初子の俺に継がれるはずだった．．．．．しかし突然変異で俺に与えられたのは「日本刀」のみ．．．．．そして、「能力」は全てお前に持っていかれた．．．．．」

「そんな．．．．．私の知らない内にそんなことがあったなんて．．．．．」

「だから俺はお前に嫉妬したのだ．．．．．そして、一族の能力を越すほどの力を求めた．．．．．そして俺は信長に魂を売ったのだ．．．．．」

「兄さん．．．．．」

「椿．．．．．俺はもう信長にほとんど魂を喰われたからダメだ．．．．．だから、最後に言わしてくれ．．．．．椿、俺は昔信長と同じ様にお前を香りのない花と言った。だが、気づいた．．．．．椿の花は．．．．．」

ぐう．．．．」

ドクン．．．

「があああああ！！！！！！」

「兄さん！！」

ゴオオオオ．．．

そして、マサムネは消えた

「ハアハア．．． 雑魚の分際で調子に乗りよって．．．」

「．．．．．」

「クク．．． 兄の遺言は聞いたか？」

「．．．．．」

椿は黙り続けた

「．．． 所詮お前は「香りのない花」か．．． 最後まで何も語らぬか．．．」

ドスッ！！！！

信長の刀は椿をつらぬいた

「魂．．． いただいたぞ．．．」



## 再び死武専

「確かに椿は「多変型高性能武器」……だけど相手が悪すぎます……勝てるはずが無い……死神様に止められても僕がいくべきだったんです……」

シュタイン博士はそう言った

「そうです！他にも、もっと相性のあった相手がいたはずですよ……何故わざわざ椿ちゃんを行かせたのですか！？」

シエルは死神様に聞いた

すると、死神様は一息ついて言った

「椿ちゃんの魅力は確かに『多変型』という特殊なものにあるかもしれない・・・だけど彼女の強さはそこじゃない・・・」

「?」

「魂」だよ!!」

（私は椿・・・「香りの無い花」・・・）

意識が遠のく中、椿の頭の中に多くの言葉が走馬灯のように駆け抜けた

（自信を出張せず、地味に咲き、地味に散る！力の無き花よ！陳腐な花だ!!）

ドクン．．．

（強さとは己との戦いに克ち抜いてきた者のみがてにするモノ．．．  
それができぬ者を他者が憐れんで、何のイミがあるというのだ  
？）

ドクン．．．

（俺はお前を嫉妬していたのだ．．．）

ドクン．．．

（武器と職人はもちつもたれつだろ？お前は俺を、もつともつと頼  
りにしていいんだぜ？）

ドクン．．．

（己の壁は己でしか越えられぬ．．．強さは、己の手でしか  
つかめぬ．．．だからこそ、この世で一番尊きモノ．．．  
強き者は生き弱き者は死ぬただ、それだけだ それ以上でもそれ以  
下でもないわー！！）

ドクン．．．

ドクン！！！！

ドクン！！！！！！

「違う!!!!!!!!!!」

ドス!!

「!!!?」

「違う!・・・違う!!!!!!!!!!」

ドスドス!!!!!!!!!!

椿は目覚め、忍者刀を信長の背中に刺した

「もう気を遣いません!!!! あなたは私が止める!!!!

兄さん!!!! 聞こえますか!!!!? 本気の私!!!! 魂で感じてください!!!!」

ググッ・・・

椿は忍者刀を信長の背中に押し付けた

「無駄なことを!!!! マサムネは死んだ!!!! それにいきがったところで所詮お前は陳腐な花だ!!!!」

グシッ!!!!!!

同じように、信長も刀を深く刺した

「違う!!! 陳腐な花だなんて言わせない!!!  
椿だって椿だって!!! 香りがあるんです!!!」

「おおおおおお!!!」

「はあああああ!!!」

信長と椿の魂が衝突しあった

ゴゴゴゴゴゴ・・・

ドパン!!!!!!!!!!

そして、血飛沫が踊った

ザアアアア．．．．．

「！！！！ 椿！！！」

オオオオ．．．．．

「椿が妖刀に入っていつちまう！！？」

カチャン．．．

そして、椿が消えた

「う．．．嘘だろ．．．椿が負けた．．．！？」

ブラック☆スターは、啞然としていた

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

パキッ・・・・・・・・

「・・・・・・・・馬鹿な・・・・・・・・この信長が・・・・・・・・」

パキィ!!!! パアアアア・・・・・・・・

邪悪な左目の火傷跡は光とともに消えていった

そして目の前には椿の兄マサムネがいた

「・・・・・・・・お前の気持ち・・・・・・・・見せてもらった・・・・・・・・椿の花「香りの無い花」か・・・・・・・・」

「マサムネ」は一輪の椿の花をつまみ、花の香りを嗅いだ

「否・・・・・・・・」

スッ・・・・・・・・

そして、掴んでいた椿に刺さっていた刀を離した

「お前の魂に触れて気づいたんだよ・・・・・・・・いい香りだ・・・・・・・・」

そう言い残し、マサムネは消滅した

「兄さん．．．」

魂となった刀を椿は胸に入れ込んだ

「兄い．．．さん．．．」

「．．．．．」

「椿．．．冗談だろ？」

当麻も哑然としていた

「ジジイ！！その棒よこせ！！」

「ひいひい！」

ブラック☆スターは隣にいた老人から棒を奪い取った



そして、横たわる刀にツンツンとつつき始めた

「オイ！！椿！！椿なんだろ！！！！

出てこい！！コラ！！負けてねえよな！！

お前のステージはこんな終わり方じゃねえだろ！！！！」

そして

「アンコール！！ アンコール！！ アンコール！！」

ブラック☆スターはアンコールを求めた

「くっ・・・椿！！上条さんも、まだお前のステージを見てえよ！！

アンコール！！ アンコール！！ アンコール！！」

当麻もアンコールをつられてやった

すると

ボン！！

「うわああ！！！！」

「！！椿・・・？」

爆発した刀から椿が現れた

「ただいま・・・ブラック☆スター、上条君・・・」

椿は微笑み二人にいった

「おう!! おかえり!! 大丈夫か?」

ブラック☆スターは椿に聞いた

「はい・・・」

「本当に平気か? 上条さん心配なんですけど・・・」

こんどは当麻が聞いた

「エエー・・・平気よ♪」

椿はそう言った

すると・・・

ばっ・・・

「ほら、来な!!」

ブラック☆スターがだっこしてやるよ!!」

両手を広げ、ブラック☆スターは言った

「・・・・・・・・!!」

ホロツ・・・

「うつ・・・・・・・・おっ・・・・・・・・へっく・・・・・・・・うつ・・・・・・・・」

椿はホロホロと泣き出した

そして

ギュッ

「おっ．．．ごべんね．．．ブラック☆スター．．．血だらけよ．．．大丈夫？」

椿はブラック☆スターのお腹に抱きつき、泣き続けた

「俺のことはいいから．．．」

ブラック☆スターは慰めるようにそう言った

「ふう．．．一件落着．．．かな．．．？」

当麻は一息ついてそう言った

しかし．．．

ゴンー！！

「「「！」「」」」

村の少年がブラック☆スターの頭を棒で殴った

「うへへへ♪」

ピク．．．ピク．．．

「デメエーはよオオオオ！！！！！」

ゴン！！

「死ね！！！！」

ブラック☆スターは少年を蹴飛ばした

「エエ．．．！？」

椿は驚いた。それもそのはず、先ほどまでの雰囲気はどこへ行ったのやら．．．

「はあ．．．まあ、自業自得だろうな．．．」

当麻は呆れ気味に飛んでいく少年にそう言った

「．．．ん？」

そして、気絶していたリョクが目覚めた

「生きてたか．．．よかったな．．．」

「！！」

目覚めたりョクにブラック☆スターはただそれだけを言った

「あんな可愛い子供を．．．」

「人間じゃない!!」

「出てけ」

「出てけ!!」

また村の人達はそう言い始めた

「あゝあゝ、この村の負け犬どもはしつこくケツでほざきやがって、  
お前らの過去なんか興味ねーんだよお……!!」  
俺は過去なんか気にせず前へ進むぜ!!」

ブラック☆スターは村の人達の言葉に興味なさそうにそう言った

村の人達「ふざけんな出てけ!!二度と来るな!!」

そう言い、三人を追い出した

「こんな田舎誰が来るかよ!! さっさと滅びちまえバーカ!!」

「ごめんなさい……ホントはいい子なんです……」

「最後までシャキツとしねえな」

三人は走り去りながら、そう言った

そして、三人を見送るリョクは

「……あいつは星族じゃなくても、好きになれないな……」

」

と、少し微笑みながらそう言った

そして、死武専

テクテク．．．

「なあ椿．．？妖刀を倒して過去の決着はついたけど、俺の武器を、続けるのか？」

「エ．．？」

ブラック☆スターは唐突に聞いた

「あゝそういえば言ってたな、たしか、妖刀を探すために此処に来たって……」

当麻も気になった

椿は……

（私はブラック☆スターと前へ進んで行きたい……この子が相手だと素直になれる……）

「はい♪ともに頑張っていきたいです♪」

椿は笑顔で答えた

「オウ!!椿!これからもよろしくな☆」

ブラック☆スターも笑顔で答えた

「そうか……二人とも、いいコンビだな……」

そして、当麻も安心した

そして

みんな「おかえりなさい!!!」

デスルームにマカ組と、キッド組と、美琴とシエルと志貴。そして、

死神様、剣心、シュタイン博士、遊庵がいた

「お．．．おう．．．お前らもな．．．」

ブラック☆スターは少々驚いた

「ご心配おかけしました!!」

椿はみんなにペコリと一礼をした

「おゝすっ、お疲れさーん♪」

死神様はいつもの軽いノリで言った

「すごいよ二人とも!!」 「ついに魂一個げつとしたな!」

マカとソウルは二人を激励した

ガヤガヤ．．．

そして、各々で今回のことを語り合った

「しかし、当麻!お前今回はあんま活躍しなかったな」

「うっ．．．うるせえ俺だって頑張ったんだぞ!!」

「椿ちゃん!．．．ぐすっ．．．私ホントに心配だったんですよ．．．」

「シエルさん．．．ありがとうございます♪」



それを見守る教師達は・・・

「死神様・・・僕はあの子達を過小評価していたかもしれませんがね・・・」

「皆さん育ち盛りの若人だからねえ」

「そうでござるよ・・・みんな、これからでござる。もっともつと輝きをもたらすでござろう・・・そのためにも、拙者達が後押ししてあげなねば・・・」

「そういえば、俺が太四老の時も、あんな感じのやんちゃ坊主を育てていたっけな」♪懐かしいな」♪」

そう語り合っていると

「オイ！！お前らに見せるものがある！！」

鏡の上にたち、ブラック☆スターは叫んだ

みんな「いつの間に・・・；！！？」

「なんとお！！椿に新しいモードが追加されたあ！！」

みんな「！！！！？」

タッ・・・

そして、ブラック☆スターは降りて

「行くぞ!! 椿!!」

「はい!!」

「モード「妖刀」!!」

コオオオオオ...

ピシ...ピシ...

「おおおおおおお!!!!」

妖刀を握りオーラを見にまとうブラック☆スターだが

ばた...

みんな「.....;」

ブラック☆スターは倒れた

「ブラック☆スター!!」

「あわわ... 「魂の波長」を一気に持っていかれた...」

「今のブラック☆スターにはまだ扱えないようですね... しかし...  
驚いた... 兄の力まで受け継ぐとは...」

「ホホ♪だけどこれで「紅の王」候補の一人を止められたし、第六  
天魔王を止められたし...」

ホントお疲れさん♪

）第10話 妖刀編 完！！  
（

**第10話 妖刀編 最終回 椿の花 香りの無き花（後書き）**

京次「妖刀編最後までご覧いただきありがとうございます！次回はまた、話が変わります！乞うご期待！！」

## 第11話 強い魂（前書き）

アキラ「どうも、元四聖天のアキラです。今回はメデューサが中心の話見たいですね。さらに、あの結構人気のあるあのキャラもちょっと出てくるみたいです。」

楽しんでいただければ幸いです。

・・・それにしても、今更ですが、この小説のタグ見ました？「肝心の狂がない」ですって！なんたることを！！狂を使うこと自体許されることでわないですが！・・・」

京次「はいそこまでく時間切れく。お待たせしました、それでは第11話をどうぞ！」

アキラ「（ブチッ）夢氷月天！！！」

京次「ぎゃああああ！！！！！」

## 第11話 強い魂

魔女集会．．．通称魔女ミサ．．．

それは、世界中の魔女達が集まって、魔女界の長、魔婆様を中心に現状報告、今後の予定などを話す会である．．．．  
そして今日も、地球のどこかで始まっていた

地球のどこか

魔女達「ジョーマジョーマ、ダバラーサ．．．」

魔婆様「ジョーマジョーマ、ダバラーサ．．．これにて魔女ミサおひらき！」

魔婆様がそう言い、集会は終了した

「ジョーマジョーマ、ダバラーサ．．．」

メデューサもそこにいた

「行くわよ、クロナ、ラグナロク」

「はい、メデューサ様．．．」

メデューサはそう言い、連れのクロナと帰ろうとした時

ビッ！

「ゲコ．．．待ちなさい」

「あら．．．」

カエルの顔をした帽子をかぶった一人の魔女がメデューサの首元に杖を突きつけた

「ええ〜！？とおせんぼだよ〜どう接したらいいかわからないよ〜．．．」

「ガタガタうるせえ〜んだよ、小遣いまきあげんぞ！！」

戸惑うクロナをラグナロクは脅し、黙らした

「で？何か用かしら？エルカルフロッグにミズネ？」

「ゲコ．．．」

「チチチ」

カエルの帽子をかぶった魔女の名は「エルカⅡフロッグ」

そして、彼女の隣にいるネズミの帽子をかぶった魔女の名は「ミズネ」

どちらとも、魔女の中では上級である

そして

「実に気に入らないわ・・・」

エルカは、メデューサを睨みながら言った

「あら、人間界で研究してるのは私だけじゃないわよ？各々尤もらしい理由をつけて遊びに行ったりしているわ。それに、ソウルプロテクトだってあるんだから、別にいいじゃない・・・」

メデューサは気にせずそう言った

「ゲコ・・・魔女ミサも安っぽくなったものね、私が言いたいのとはそんなことじゃない・・・見てたのよ・・・お前が魔婆様の部屋から何かを盗んだのを・・・それにお前、死武専に潜伏してなにやってるの？目障りなのよ！」

エルカは口調を荒げた

しかし、メデューサは気にせず

パチン！



「クロナ、コート・・・」

指を鳴らし、クロナに命令した

「合点了解です・・・」

シュバ・・・！

そして、メデューサは怪しい模様をしたコートを着て・・・

「私は死武専での研究はこのまま継続させる・・・魔女ミサの結論でもそうだったじゃない・・・魔婆様もおっしゃったでしょ？」

そして、そのまま帰ろうとすると

「待ちなさい！！」

エルカはメデューサの背後から杖を向けた

「魔婆様は目を悪くして目の上のたんこぶに気づいていない！！死武専は魔女の魂を狙う組織だぞ！！お前一人のヘマで我々が危険にさらされるかもしれないわ！！」

それに魔女の敵になりかねない「紅の王」の候補をつくろうとしているなんて！！

お前、知っているだろ！！紅の王になるために必要な条件は「仲間を平気で裏切る程の冷酷さ」だということを！！

そんなのをつくったら、人間界どころか、魔女界も崩壊するぞ！！」

エルカは一息ついて

「ふざけないで．．．目ざわりなのよ、気に入らな．．．」

そのまま言おうとしたら

ガポ！ ガポ！

「「！！」」

エルカとミズネの口にメデューサの指が瞬時に入った

「カエルとねずみふぜいが．．．おしおきするわよ．．．」

メデューサは蛇が獲物を狙う様な眼でそう言った

「ゲ．．．ゲコォー．．．；」

エルカは完全に不意をつかれ、怯えていた

ビュッ

そして、メデューサは二人の口から手を抜き

「私．．．急いでの。でわ、ジョーマジョーマ、ダブラーサ．．．保健室の先生が遅刻するわけにはいかないでしょ？」

そう言い、クロナを連れ、その場を後にした

「お、おのれ．．．蛇女め．．．！！」

「チチ．．．」

二人はメデューサの背中を見ながらそういった

数時間後、死武専の保健室にて

「どう？調子の方は？」

保険医に化けたメデューサはソウルに聞いた

「別になんともないけど・・・なんだか最近変な夢を見る様になったな・・・」

「変な夢？」

「うん・・・その夢ではいつも俺は全て真っ黒な部屋にいるんだ・・・」

・  
「

ソウルの夢の中．．．ブラックルーム

音飛びの激しい蓄音機からとこがて聞いたことがありそうな安っぽいジャズ．．．

しばらくすると、部屋の奥から決まって現れる

曲に合わない、変なダンスを踊りながら

フリ♪ フリ♪

ダブルスーツを着た小さな鬼．．．

「スイング♪スイング♪」

ソウル「オイ．．．このジャズはスイングじゃねえぞ．．．」

小鬼「ジャズは夜に聞くもんだぜい」

ソウル「曲は時間・場所を選ばない。お前が勝手に決めたんだろ？」

小鬼「そう、オイラは決めた。お前には「資格」がある」

ソウル「??」

小鬼「胴を斬られた時、強い恐怖を感じなかったか？恐怖を忘れる強い精神を欲しくないか？」

ソウル「な．．．！！恐怖心を忘れるのは無謀なこと．．．それが死武専の教えだ！！」

小鬼「フン！！バカか？お前は天国にでもいるつもりか？お前がいるのは地上だろ？」

最後まで地に足をつけているのに必要なのは「力」だ！！  
恐怖心を忘れさせる圧倒的な「力」だ！！」

ソウル「．．．．；」

小鬼「お前も良く知っているだろ！？「先代紅の王」は絶望という「恐怖」を「力」で押し潰して、何千年も日本という国をその圧倒的な「力」で支配していたんだぜ？」

そんだけの「力」があれば恐怖心なんて微塵も感じさせねえ！！」

ソウル「．．．．．」

小鬼「今のお前では話にならん！！さっさと出てけ！！」

ぐっ・・・

ソウル「ちょ、ちょっと待てよ・・・！！この部屋からは出たく無いんだ！！夢が覚めるまでいさせてくれ・・・！！」

カチャ・・・

小鬼「ならば力を求めろ！！破れる規律を探せ！！・・・強くなれる」

なぜその部屋から出たくないの？

部屋を出ると暗闇が続き、そして光が見える・・・

そこを抜けると・・・マカの腹から出てくるんだ

ぐしやぐしや！！

マカ「いやあああああ！！！！！！」

「あらま、ひどい夢ね．．．」

メデューサはソウルの話聞きながら

（フフ．．． あきらかにラグナロクの黒血が影響してる見たいね）

内心喜んでいた

「で？どうなの？俺の体．．．」

「エエ．．． 多少、不整脈がある様だけど、順調に回復してるわ♪  
血圧計るわね」

「はい」

ポシュポシュ．．．

血圧を計りながらメデューサは

「夢の話だけど、似た様な夢を続けて見るっていうのは、よくある  
ことだからそんなに気にしないでいいわよ  
それとも他何か悩みでもあるの？」

ソウルに聞いた

「別に悩みってほどじゃないけど．．．俺が怪我して以来、マカと何かギクシャクしてるかな．．．」

ソウルはそう言った

場所が変わって、死武専の教室

「「「．．．．．」」」

そこには、マカ、ブラック☆スター、ブレア（子猫の姿）そして、遊庵がいた

マカ、ブラック☆スターの目線の先には

「「壺？」」



怪しい模様のした壺があった

「そう、壺だぜ☆」

遊庵はきっぱりと言った

「何でつぼ？」

ブラック☆スターは遊庵に聞いた

「まあ、壺の方はただの壺だ。でも、壺の中に入ってる水が「吸魂水」つってな、魂の波長を吸い取る水なんだわ。壺はあくまでただの壺だ。

手えつつこんでみ？」

遊庵はブラック☆スターにそう言った

「・・・壺の方が怪しいのにな・・・」

そう言いながら、指をみずにいれた

ちよぽん・・・

「むほっ！！！！！！！」

ブラック☆スターは一気に顔色が悪くなった

「何だこれ！？この壺やべえ」

「だから水だって言ってんだろ！！最初は指一本つけるぐらいにしろとけ！」

「こいつにどっぷり突っ込んで耐えられる様になれば、妖刀を使えることになるのか！？」

「結論からいえばそうなるな」

「おもしれえ、最近筋トレぐらいしかやってなかったからな・・・」

ブラック☆スターがそう言う

「エ〜〜〜〜！！？」

マカは驚いた

「何だよ？」

「ずるい・・・何で筋トレだけでそんなに強くなれるの？」

マカはそう聞くと

「あたりまえだろ！！ブラック☆スターだぜ！！格が違うんだよ！！俺は神を超越するBIGな男だからな！！」

ニツコリと笑い、ブラック☆スターは言った

「ずるい・・・」

マカが羨ましがってると

ポン．．．

「!？ 遊庵先生．．．」

「あいつは全くそんなつもりはねえだろうが、あいつは自分のコトを神だのBIGだのいって自分を追い詰めてるんだよ．．．結果的にな．．．」

「追い詰めてる？」

「そう、「BIGな俺様にできないものはない!!」できるに決まっている!!」ってな♪だからその他めには努力を惜しまない!!何度だってチャレンジする

あいつは本気で神を超える気でいる！  
強くなるはずだぜ．．．」

「．．．はい！」

「だが、それはあいつなりの魂を強くするやり方．．．マカにはマカなりのやり方があるはずだ．．．」

「私なりのやり方．．．」

「それが分かったら、俺かシュタインのところに来な」

遊庵がそう言っていると

「むっほううう!!!」

まだ、吸魂水に手をつ突っ込むブラック☆スターがいた

「だから指一本から初めろって! 壺持って帰ってもいいからもう帰りな! どうせ、押入れの奥から見つけたものだから」

そう言い、遊庵は教室を出た

「ねえマカ、今日のパーティーどうするの?」

マカの頭の上でブレアは聞いた

「あ! そうだったね。うちでブラック☆スターと椿ちゃんの魂一個おめでとう記念と、ソウル退院パーティーやるんだった。キッドくん達や剣心さんも呼ばないと!」

「美味しい魚料理つくってね?」

ブレアはマカに頼んだ

そして、保健室

「それじゃソウル君、一週間後にまたいらっしやい」

「ソウル君、お大事に．．．」

「はい」

メデューサと藤田先生は、ソウルにそう言った  
すると

コンコン

「失礼します」

マカが保健室に入って来た

「あっ」

「おう．．．うっす」

ソウルは普段着に着替えようとしていた

そして、マカはソウルの胸の傷を見ると

「これからパーティーやるから遅れないでね．．．剣心さんも来るから、失礼のない様にしてよ．．．それでは失礼します．．．／＼」

目を逸らしながらそう言い、マカは保健室を出た

その様子を見ていた藤田先生は

「どうやら、ギクシャクとやらの原因はその傷みたいです」

と、ソウルに言った

「うん。この傷を見るとあいつ、つらい顔をするから・・・」

ソウルは指でその傷をなぞり、そう言った

マカとソウルのアパート

「味はともかく、食った☆食った☆」

ブラック☆スターはパンパンになった腹を叩きながら言った

「ムカツク」

マカは不機嫌そうに答えた

「そんなコトないでござるよ、美味しくご馳走をいただいた♪ありがとう、マカ殿」

「美味しかったですよ、マカちゃん」

剣心と椿はマカに笑顔で感謝した

「ああ、本当に感謝するぜ・・・なんせ俺は、停電が起きて冷蔵庫が壊れて中の食材が全滅したからな・・・おかげで数日間、まともな食事が・・・」

と、当麻は涙を流しながら行った

「あっ！ごめ〜ん当麻！そこ付近の電柱、あたしが任務中に壊しちゃった・・・」

御坂はそう言い、当麻に謝った

それを聞いた当麻は

「ビッ・・・ビリビリ・・・お前・・・」

当麻はワナワナと震えていた

「喧嘩はやめとけよ当麻、今はパーティーなんだからな。楽しまな

いと損だろ?」

志貴はそう言って当麻を止めた

その一方で

「いい部屋に住んでいるじゃないか♪綺麗に片付いてるし．．．」

キッドはこの部屋の清潔さに目を向けていた

「散らかすとマカがうるせえーんだよ」

ソウルはそう答えた

「ここに二人で暮らしているのか?」

キッドがそう聞くと

「ヤッホー♪みんな楽しんでる? 誰か一緒にお風呂はいらない?」

バスタオル一枚姿のブレアが現れた

ハハリ．．．

「あん、やん?」

ブーッ!!!

バスタオルが取れて、ソウル達の目の前で裸になった



「．．．いつもこんななのか？／／／」

「ああ．．．誰かあの色猫持ってってくれ．．．」

デスシティーの路地裏

そこにはメデューサが歩いていた

（死武専に潜入したかいたわ。黒血の混じったソウルⅡイー  
ター．．．少し試して見るか？）

チャラ．．．

メデューサは何かの鍵を持っていた

（カギは手に入れた・・・後は実行するだけ・・・）

そして、そのまま帰ろうとしたら

ザッ

「!？」

エルカとミズネがメデューサを挟んだ。当然ソウルプロテクトはかけている

「あら、こんなところで奇遇ね」

「言わなくてもわかると思うが・・・言おうか？」

「エエ・・・ぜひ」

メデューサは笑顔で答えた

「ゲコリ・・・あなたを殺しに来ちゃった」

「なぜ？ひどいわ、仲間じゃないの？」

「私たちは死神の目を盗み、魔法を使って暴れたいだけなの。  
あなたが死武専で何をしたいかなんてどうでもいいわ。危険なのよ  
私たちにとってもね」

「それで殺しに来たのね。一つ忠告しておくわ。その格好は危険よ

「あからさまに魔女！いくらソウルプロテクトを、かけてても、ここには若い死武専生達がいっぱい住んでるの。この意味わかるわね？」

「ご心配なさらなくて、私たちはあなたと違って返信魔法が使えるの・・・いざとなったらこれで逃げるわ」

「なるほど・・・それが私に対しての勝算？」

「普通に戦っても勝てないのは分かっているわ。でもここで貴方はただの保健室のお姉さんでいたい！ソウルプロテクトを、解除し魔法を使うわけにはいかないでしょ？」

そのままエルカは続けた

「ソウルプロテクトをかけているただのお姉さんを私たちは一方的に魔法攻撃ができる。」

貴方が魔法で応戦すれば、私たちは変身魔法で逃げる。結果、死武専生達に魔女だとばれ、貴方は狩られる。解除してもしなくてもどちらにせよ、私たちの勝ちよ。

カエルとネズミが蛇を倒す！！

これこそ「（ゲコ）下克上」よ！！「カエル」だけに！！」

「殺される挙句、ダジャレまで聞かされるのね・・・ひどい仕打ち」

ソウルプロテクト解除！！

「さよなら、メデューサ」

「チチチ」

エルカは両手でオタマジャクシ型の爆弾を持ち、ミズネはヒゲ型のビームを出した

一方マカは

ピクッ！

（この魂反応！！！！）

「魔女！！？」

ガバッ！！

「なっ！？どうした、マカ殿！？」

「二人も・・・なんでテスシティーに・・・？」

そう言うと、マカは外へと駆け出した

「オイ！！マカ！？」

「私！！行ってくる！！！」

そして・・・

「貴方の悲鳴でゆがむ顔、たくさん見たかったわ。でも時間がない、残念ね・・・」

そして、メデューサに攻撃しようとした

しかし

「こんな方法で私に勝つつもりか？おしおきだわ」

エルカ達を睨みそう言った

「貴方達は研究対象にならない」

そう言いながら、白衣を脱いだ

バサー！

「ゲコゲコやる気ね？逃げるわよ・・・」

（さあ、どうした？ソウルプロテクトを解除してみろ・・・）

しかし、メデューサの身体がどこか変だった

「ゲコ！？貴方、肩の蛇の刺青はどうしたの？」

「あら？どこ行っただのかしら？」

メデューサはとぼける様に言った

ボゴボゴ

「チチ！！」

ミズネの身体の中で何かが動いていた

「どうした！？ミズネ？もしかして、ミズネの体の中に！？  
そんな・・・いつの間に・・・」

すると、魔女ミサの後で、メデューサの手が口に入っただのを思い出

した

「ハッ！！あの時・・・？」

メデューサはボゴボゴとなっている右腕をだし

「私は体の中に千匹の蛇を飼っているの・・・数匹ばかりねえ・・・」

「チチィ！！」

ドシャアアア！！！！

ミズネの体から蛇が出て来て、ミズネの体は両断された

「ミズネ・・・」

エルカは某然としていた

「跡形もなく飲み込んでしまいなさい」

メデューサは蛇に命令した

「な・・・何で？何でええええ？その蛇も魔法でしょ？プロテクトを解除しないで何でええええ！？」

エルカは怯えながら聞いた

「この子たちは自動式なの、すごくシンプルな魔法生命体とも言っときましようか？」

フフ．．．傲慢の子よ」

蛇はメデューサ肩の刺青へと変わった

「簡単な合図で反応するわ。鳩は出ないけど素敵でしょ？ミズネにだけ入ってるわけないわよねえ？」

そう言いながら、エルカを脅した

「ゲコォ．．．；」

エルカは怯えていた

すると

「「！！？」」

二人とも何かに反応した

「ゲコ」

エルカはカエルに変身して、テケテケと逃げていった

メデューサは白衣を着た

（やはり来たか．．．早いわね．．．）

メデューサはこっちに来た人物を見ていた

（シュタイン、剣心、藤田五郎、そして、マカ）



「今、この辺に2つの魔女反応が・・・」

シュタインはそう言った

「エエ、私もそれを感じて駆けつけたところです」

メデューサは今来たという感じで答えた

「もしかして、ソウルを怪我させた時の魔女かも・・・」

「そうかもしれないわね・・・」

メデューサはマカの問いにそう答えた

「いや、それはないんじゃないですか？」

藤田先生は唐突に話に入ってきた

「私は少ししかわかりませんが、その魔女は魔剣とやらを連れていた・・・ここに来たのがその魔女だったら、デスシティーの真ん中で意味もなくプロテクトを解除はしないじゃないですか？」

「そうですね、職人と武器に何かしらの興味を持っているのは確かですから・・・」

シュタインは藤田先生の言葉にそう答えた

「だとしたら、身を潜め、観察をしているかもしれないな。もし、ここにいたらの話でござるが・・・」

「まあ、死武專に対してプレッシャーか何か与えに来たんじゃないのかな．．．不良学校が良くやる感じの．．．」

剣心とシュタインはそう結論づけた

「それにしても、メデューサ先生にケガがなくて何よりです♪保健室の先生が倒れたら大変ですからね♪」

「ほほほ．．．ほんとですわ」

藤田先生とメデューサは冗談混じりに笑い合った

「でも、もし．．．またあの魔女と魔剣に合ったら．．．」

マカは魔剣との戦いあったのと氣を思い出した

（ソウル．．．！！このままじゃいけない！！強くなるって決めたのに！！）

そう思っていると

「マカ！大丈夫か！？一人でいくなよ危ないだろ！！」

ソウルが来た

「ソウル．．．」

（私．．．ソウルの傷から目を背けていた．．．）

マカはソウルの傷のある胸に手をポンと添えた

「!？ 何だよいきなり・・・」

ソウルは少し驚いた

（この傷とも向かい合わなきゃ!!二度とソウルをあんな目に合わせない!!恐怖心に絶対負けない!!）

マカは固く決意した

「博士!!私、魂を強くするやり方を見つけました!!」

「・・・そう!」

（この子には恐怖と戦う勇気がある!）

「じゃあ明日、ソウルと二人で俺と遊庵のところに来なさい」

シュタインはマカにそう言った

そして夜、エルカは・・・

「ここまでくればとりあえず安心ね♪あの魔女めえ、今に見てらっしゃい！ゲコー」

むぎゅ！！

「ゲコッ!？」

エルカは、上から何者かに踏まれた

「アラ♪結構いい踏み心地・・くせになりそう?」  
そして、グリグリと踏まれた

「もしやお前は・・・ゲコ」

「貴方に頼みたいコトがあるのよ」

メデューサはそう言う

ポト

「カギ?・・・それよりなんで私の場所が分かったゲコ?」

「貴方の中にいる蛇が信号を送ってくれるの、どこにいても無駄!それよりそのカギで開放してもらいたい男がいるのよ。魔女牢獄の囚人番号「13」って言えばわかるわね?」

それを聞いたエルカは

「も、もしかして「魔眼の男」を!?!?」

驚いた

「あいつは魔婆様の左目を奪った男よ！！そんなコトしたら私は魔女界から追放・・・イヤ、殺される！！」

エルカは拒否したが

「何ならここで死んでもいいのよ？」

ググッ

メデューサは踏む力を強くした

「ゲ・・・ゲココ、わ、わかったわ・・・」

エルカは無理やり承諾させられた

「あの男を使って試したいコトがあるの・・・」「ソウル||イーター」の研究にね」

「そ、そんなコトにあの男を！あなたイかれてる！！狂っているわ！！」

エルカは元の姿に戻りながら言った

「踏み心地悪いわ、カエルに戻りなさい」

不機嫌そうにエルカに命令した

「は．．．はい．．．；」

そして、エルカはまたカエルに戻った

すると

ジリリリリリリ

「メデューサ様く水晶玉から音がなってますけどく？」

「分かったわ、かして頂戴」

そして、水晶玉をとると

「はい、メデューサです。どちらかしら？」

「あ！メデューサさんですか？どうもく宗次郎です」

若い子供っぽい声が出て来た

「あら、宗ちゃん？お久しぶりね♪何の用かしら？」

「はい、実はですね、あの「最強と最狂」のお二人がですね、ようやくこちらに到着したのですよ♪探すの苦労しましたよ」

それを聞いていたエルカは

（ゲコ、最強と最狂って誰のコトよ？それより何？この蛇女誰かと  
つるんでいるの？）

エルカはそう思った

そして、それを聞いたメデューサは

「アラ♪いい報告ありがとね♪こちらも着々と「あの計画」に進んでいるわ。その日になったら、「アレ」をちゃんと用意する様「彼」に言ってね」

「はい了解しました。それでは頑張ってください〜・・・」

リン♪

そして、水晶玉から声は消えた

「内密に頼むわね？」

メデューサはエルカにニツコリと頼んだ

「ゲコ!!!ふざけないでよ!!!間違いなく人間なんかとつるで!..  
」

「な・い・み・つ・ね」

そう言いながら踏む力を強くしていった

「ゲコココ!!!分かったわ分かったわ!!!」

またもやアツサリ承諾した

## 魔女牢獄

「1+2+1+2・・・」

「うるさいな、またあいつか・・・」

警備員の魔女はめんどくさそうに言った

「オデ、今、何回かけた？」

「1+2+1+2+1+2・・・オデ、今、何回かけた？」

目の死んだ老人は警備員に聞いた

「足してるだけでしょ？一回もかけちゃいないよ」

しかし、そう言っても



「1+2+1+2・・・」

足し算をやめることはなかった

すると

「があああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

「いい!!!!!!!!!!?」

警備員ですらビックリする叫びが響いた

「ひいひいひい・・・」

先程の老人も怯えていた

その叫んだ主は

「うるせえ・・・見えねえ・・・何も見えねえ・・・」

手枷、足枷、そして目には魔本陣が書かれた目隠しがされていた  
そう、この男こそ、「魔眼の男」である

「上質なコメディーが見てえ」

そう言い、魔眼の男は眠りに入った

第11話  
完

## 第11話 強い魂（後書き）

京次「ハアハア・・・ブラコンから逃げ切れた・・・あ！すみません、次回予告ですね・・・」

次回！！魔眼の男解禁され、ソウル・マカ、絶体絶命！？そして、思わぬ事態が！！

第12話お楽しみに！・・・」

アキラ「見つけた！！俺のトークを邪魔しやがって、狂と共に俺を本編に出せー！！！」

京次「不幸だああああああ」

第12話 解禁!! 魔眼の男 振れる二人の魂(前書き)

ほたる「どうも、ほたるだよ。．．．この小説、楽しい?．．．．  
あと、何言えばいいの?」

京次「自分がこの小説読んでの感想とか、愚痴るとか色々．．．  
(何でもこいつを前書きに出したのか、自分でも不思議だ．．．)

ほたる「．．．辰伶とユンユンだけ出てずるい．．．俺も出して．．．!」

京次「出す予定がないから無理です!」

ほたる「ムー．．．出さないなら、無理矢理出るし．．．魔皇炎．．．」

京次「熱うううう!!! 乗っ取る気かよ!!! だっ第12話どうぞ!!!」

第12話 解禁!! 魔眼の男 振れる二人の魂

魔女牢獄

カラン．．．．．

「ZZZZZ．．．．」

警備員の魔女は、水を飲むと、深い眠りについた

「ゲココ♪ よく寝てるようね」

そして、眠らせた本人のことエルカは、ピョンピョンと跳ね、囚人番号13番の扉を開けようとした

「!! スンスン 誰だ?そこにいるのは?」

そこにいる魔眼の男は、匂いを嗅ぎ、エルカの存在に気がついた

「ゲコ、わ、私はある人にあなただを脱獄させるよう頼まれたの．．  
・ 今、出してあげるわ」

そう言うと、魔眼の男は

「フン!! 俺を誰だと思っている!! 他人の手助けを受けると  
思えるか!？」

数分後 牢獄外にて

ピョン ピョン ピョン ピョン

「ありがたあゝい!!」

「どういたしまして!!」

手枷、足枷、目隠しをつけながらピョンピョン跳ねながら脱獄する  
魔眼の男とエルカがいた

そして、逃げながら魔眼の男は話した

「魔女の追手を振り切るのはたやすいことだった・・・しかし俺は

牢屋に入った．．．なぜだかわかるか？」

「そんなことより急いで！！追手が来るわ！！」

魔眼の男は続けた

「映画のシーンでよくあるだろ？牢屋の壁にスプーンで毎日コツコツとトンネルを掘り脱走する！！その地味な姿がかっこよかった！！そう！！俺はそれがやって見たかったんだ！！」

だが、あそこの食事は全部ハシ☆  
大失敗だ！！」

「それは不憫ね．．．やろうとするあなたもあなただけど．．．  
」

捕まった理由を聞き、エルカは呆れた

「他の方法も考えようとしたさ、だが気づいたね！俺はアイデアマンじゃねええ！！」

するとエルカは言った

「今となつてはどうでもいいけど、鉄格子に尿をかけて徐々に腐食させるっていう手もあるわよね．．．」

「．．．．．」

魔眼の男は沈黙し始めた、そして．．．

ガッ！！　ゴ！！　ゴ！！

「ガッデム!! シット!! そんな方法があつたかああ!!」

いきなり近場にある木に頭を叩きつけながら叫んだ

「早ああく!! 追手が来ちゃうわ!!」

そんな手枷足枷付けたままじゃ、囲まれたらおしまいよ!!」

しかし

ザッ・・・

「・・・・・・・・・・;」

すでに数名の警備員に囲まれていた

「スンスン、気をつけろ!! 近くに誰かいるぞ!!」

魔眼の男は今気づいた

「わかってるわよ!!」

エルカはキレイながらつつこんだ

「囚人番号13「魔眼の男」!! 抵抗すれば容赦しないぞ!!」

一人の警備員が叫んだ

「お前らは200年俺を監視してたんだろ!! このまますんなり捕



まると思うか？

ああ！！抵抗するさ！！」

魔眼の男は余裕な態度を見せた

ドスドスドス！！！！」

「！！」

それと同時に、警備員たちの槍が魔眼の男の頭を貫いた

「魔眼！！　ちよっ、ちよっとうっ！！　あんたを連れてこないと、私まで殺されるのよ！！」；」

エルカはうろたえながら言った

「ぐむっ・・・・」

バキッ

魔眼の男は喉に刺さった槍を噛み砕きながら言った

「なあ～に、この程度では死なんさ、だって俺は・・・・」

魔眼の男が何か言おうとした瞬間

「くそっ！！」

ガチャ！！

警備員の一人がバズーカを出した

ドゴーーーーン!!!!!!

そして、魔眼の男に発砲された

プシュー……………

しかし、煙の中から

「魔婆は殺さずに俺を閉じ込めたんじゃない!!  
殺せなかったんだよ……………」

ビリッ!!

「不死だから!!」

手枷、片方の足枷、そして目隠しがとれて、左眼には、魔方陣の書かれた眼球、魔眼が輝いていた

（ふ、不死だって!? そんなやつが魔婆様の魔眼を持っている!!  
?）

エルカは驚いた、ただでさえ厄介な存在の不死を持つものに、魔力のこもった魔眼を持たされれば、手強いなどという話ではない

「ウールツフウルフブスウルフウルブス!!」

魔眼の男は足枷についている鉄球に魔法を唱えた

ガシャン

「氷球体!!」

そして、鉄球より大きい丸い氷が鉄球を包んだ

「おらあ!!」

ドゴトゴトゴ!!

魔眼の男は氷球体を足で振り回し、警備員たちのを薙ぎ倒していった

「うわああああ!!」

何とか生き残った警備員たちは逃げ出した

しかし、魔眼の男は逃がさなかった

ダッ!!

魔眼の男はジャンプし、逃げ出した警備員たちの頭上に行き、氷球体にのった

警備員たち「なっ!?!」

「ウールッフウルフブスウルフウルフズ  
氷柱体!!」

氷球体は円錐型のつららに変わった

警備員たち「ぐわああ!!」

ズドン!!

そして、氷柱体が警備員たちの体を貫いた

それを見ていたエルカは

「あ、あんな一瞬で全員倒しちゃった・・・」

呆然としていた

「ほおおおおううう・・・!!!!!!」

魔眼の男は氷柱体の上で咆哮を上げた

(す、凄すぎる・・・;)

エルカは魔眼の男の強さにあぜんとしていた

翌日 死武専

マカとソウルは指導室へと向かって来た

「何で日曜日に学校こなきやなんねえゝんだよ、あゝ眠い．．．」  
ソウルはめんどくさそうに歩いていた

「シュタイン博士と遊庵先生に特別指導をお願いしているの！！  
シャキツとして！！」

そう言い、マカは顔を引き締め

「とても危険なトレーニングらしいよ！！  
見を引き締めないと！！」

と言った。しかしソウルは

「遊庵なんかのいうコトいちいち信用するなよ．．．それに、俺は  
マカみたいにバカじゃねえし、朝っぱらから元気ハツラツじゃない  
んだよなあゝ」

ダラダラとそう言った

するとマカは本を取り出し

タン！！

「あっそう、私のハツラツわけてあげる」

ゴン！！

「つて・・・！」

廊下で鈍い音が響き渡った

「よく来ましたね、適当に座っちゃって」

「うっす！悪りいな、日曜日なんか呼び出して！」

薄暗いキャンドル室の中、シュタイン博士と遊庵の二人がいた

「なんかこの部屋、変な匂いするな・・・」

「アロマキャンドルでしょ」

そう言い、二人は部屋を見渡した

そして遊庵が口を開いた

「そんじゃ、早速トレーニング始めるぜ！！」

最初に言っとく、今回ののは非常に危険だ！！もし失敗したら、最悪の場合・・・二度とお互いの「魂の波長」が合わなくなるかもしれない！！」

「「エエッ!？」」

二人とも当然驚いた、それほど危険なのである

「それでも・・・受けるか？」

遊庵は二人に聞いた

「ちょっと待てよ・・・!!」

ソウルは止めようとしたが

「はい!! 受けます!!」

マカはためらわず答えた

「オ、オイ!!」

「職人が決めたコトよ．．．従って．．．」

マカは断固として受けようとした

「．．．何躍起になってんだよ．．．」

ソウルは納得がいかなかった

（ソウルと魂の波長が合わなくなってしまうかもしれない．．．だ  
けど強くならなきゃ!!

二度とソウルに怪我をさせないためにも!）

マカは硬く決めていた

「決定権を持つてる職人の意見を尊重するので特別授業を始めます。  
」

シュタイン博士はそう切り出した

「よっし、じゃあお前ら、正面に向き合ってたな．．．」

遊庵は二人にそう言い



「……」

（覚悟はできている！）

マカは指示を待っていた

「お前らの欠点を言い合え」

「「へっ!?!?」」

二人とも、トレーニングの内容にあっけ取られた

「……それがトレーニングの内容ですか?」

「そうだが……嫌か?」

すると、ソウルが突然言い出した

「ガンコ、無鉄砲、趣味が読書、したがってネクラ……足首が  
「太い」……」

ゴン!!

「ふござっ!!」

マカチョップがソウルの頭に当たった

「いてえなあ!! 欠点言えってコトなんだろう!？」

「すぐなぐる」これも欠点だな!!」

ゴン!!

またもやチョップが炸裂した

「博士・・・こんなものありかよ?」

「手を上げるコトは、無しね」

（一見、効果はなさそうなトレーニングだが、この部屋にあるキャンドルの香りは人の木を荒立てる。何気ない一言で二人の仲を裂きかねない・・・）

「~~~~~!!」

「~~~~~!!」

二人は、すでに言い争いを始めていた

（しかし、これ乗り越えた時にお互いの魂の波長は強く共鳴する  
!）

「マカ、最近のお前、おかしいぜ? この授業だって勝手に決めて・・・どこ見て進んでいるのか、わかんねえよ・・・」

「私はただ、ソウルが二度と大怪我しないように強くなろうとして  
いるだけよ!!」

「俺は職人のために死ぬ覚悟はできてるって言ってるだろが!!  
魂集めで武器を強くするために戦うのが職人……!! 武器を守る  
ために強くなろうってのは考え方がおかしいだろ!!」

そう言うのと、マカは立ち上がり

「何で!? 私が強くなっちゃいけないの!? ソウルに守られてるのは  
嫌なの!!」

そう叫んだ

「大声出すなよ、うるせえな……」

「ソウルだって最近変!! 強くなるコトになんでそんな後ろ向きに  
なっちゃったの!?!」

「……………」

そう言われると、ソウルは小鬼とのやりとりを思い出した

（恐怖心を忘れさせる圧倒的な力!! それがお前には必要だ!!  
規律を破れ!! 強くなれるぞ!!）

（別にあんな小鬼に、強くなるコトに怯えてるわけじゃねえ……）

「そんなことより座れよ、首が疲れる」

ソウルははぐらかすように言った

「ヤダ!!」

それを見ていた遊庵は小声で

「おいおい、シュタイン・・・やばくねえか・・・?」

「そうだな・・・」

（（二人の魂の波長がずれ始めている））

遊庵とシュタイン博士は、二人に対し不安に思った

「・・・・・・・・」

結局二人とも、納得いかない形で今日のトレーニングは終わった

マカとソウルのアパート

「ご飯で来たよ」

マカは晩御飯を運んで来た

「にゃ♪」

「オウ、腹減ったな．．．アレ？」

しかし、ソウルのところには

ヒラヒラ．．．

「．．．俺のメシ、味付けのり一枚？」

マカはどうでも良さそうにソウルにいった

「気に入らないなら自分で作れば？」

ガラ．．．

そう言われると、ソウルは立ち上がり

「．．．．．緋村さんのウチに行ってくる．．」

そう言い残し、ソウルはアパートを出た

ボタン！！

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・今日の料理当番マカでしょ？大人げにゃい・・・・・・・・」

ブレアはマカに冷やかしながら言ったが

ギイイイイ・・・・・・・・

「？」

マカはご飯を食べ終わらず、立ち上がり

ボタン！！

部屋に閉じこもった

ボフ！

「・・・・・・・・わかってるよ・・・・・・・・」

そう言い、ベットに潜り込んだ

そして、ソウルは剣心の家で

「ちくしょう！！」

ダン!!

マカに対して不満を持っていた

「まあ、ソウル殿落ち着くでござる。マカ殿も何か複雑な思いがあつて……」

剣心は何とか落ち着かせようとしたが

「だとしても、何だよ!! あいつは! クソ!!」

「ソウル殿……」

全く怒りを鎮めるコトができなかった

一方エルカ達は

どうにかメデューサのいるところに着いた

「来たか・・・」

「ゲコー♪連れて来たわ!!  
どう!? 私の働きっぷり」

「ご苦労様」

そして一緒にいたクロナは

「誰か来たようどう接する? ラグナロク」

「黙ってろ!」

二人でやりとりをしていた

エルカはカエルから魔女の姿に戻り

「さあ!! 約束よ、私の体の中にいる蛇を全部出して頂戴!!」

メデューサに頼んだ

「全部? ご冗談を、一パシリ一匹に決まってるでしょ?」

エルカの頼みは虚しくきえた

「エエ!? あと何匹いるの!?」



「あなたに知る権利はないわ！ 何なら全部出して上げましょうか？ その体を引き裂いてね♪」

「ゲコー・・・ あんまりだわ！！ 鬼！！ 悪魔！！ あんたなんか大っ嫌い！！」

エルカは帽子で目を隠し、泣きながら言った

「お前さんが俺を開放してくれた変わり者の魔女か？」

魔眼の男はメデューサに聞いた

「メデューサよ、よろしく「魔眼の男」」

その名前を聞いた瞬間

「「魔眼の男」・・・ そうか、俺はあの牢獄に入れられ「名前」も何も取られてしまったんだったな・・・」

そして、魔眼の男の顔がぱあと明るくなって

「今日から晴れて自由のみだ、  
そうだな・・・ 「フリー」とでも呼んでくれ」

「わかったわフリー」

メデューサはそう答えながら

（フフ、自由「フリー」ね、果たしてそうなるかしら♪）

そう思っていた

すふとフリーは

「どうだろ？何か礼がしたいのだが？」

「そんないいのよ、気になさらないで」

「それでは、俺の気が済まない」

フリーはメデューサに礼を返そうとした

（この男の性格はわかっているわ）

「じゃあ一つ、頼んでいいかしら？」

ある武器と職人を潰してほしいの、簡単でしょ？」

メデューサは眼を蛇のように変えて言った

「武士と職人？死武専か？」

フリーは何かに反応した

「エエ、明日その二人は課外授業でロンドンに行くの、その時狙う  
といいわ」

すると、フリーはニツと笑い

「死神の作る規準、目障りだな・・・ああわかった消してやるさ・・・」

ロンドンへと向かった

ロンドン

「来たぜ!!! ブラック☆スターイン・ロンドン!!!! ひゃっはあ  
あああ!!!!」

ブラック☆スターは橋の真ん中で叫んだ

「雪よ、寒くないの?」

椿は普段着と変わらないブラック☆スターに聞いた

「雪？なんだそりゃ！！この程度の寒さで脱ぐコトはあっても、着るコトはねえー！！」

「たくましいでござるなあ；」

剣心もそこにいた

「全くよおー、お前らが魔剣に教わってから課外授業が二組で行動するコトになっちまった、俺様の足ひっぱんじゃねえぞ！」

しかしソウルとマカは

「「.....」」

ぷいっ

互いにそっぽ向いた

「二人とも、見てくださいあの夜景♪綺麗ですよ！！；」

「そ、そうでござるな、ソウル殿、あの屋敷クールとやらでござらんか？；」

椿と剣心は何とか場を盛り上げようとした

「あいつらなにやってんだ？」

それを見ていたブラック☆スターはそう言った

そして

「なあマカ、俺は魂反応を感知できねえから頼んだぞ」

「うん、まかせて」

そして、マカは意識を集中させた

「エーと、この辺に『死神様リスト』にのってる悪人は……」

ドクン……

「エ？」

「うっす」

「すぐそばにいる!!」

悪人の対象はフリーであり橋の真ん中で立っていた

それを見たブラック☆スターは

「あのおっさん何やってんだ？こんな橋の上で」

「何なのあいつの魂は、普通のじゃない……何かいろいろ混ざっているわ……人間、？魔女？他にも何か感じる……」

彼の魂は彼の特長的な髪型と魔眼の魔方陣が描かれていた

そして、ブラック☆スターは聞いた

「マカ・・・あいつが死神様リストにのってるんだな？今回の課外授業はさい先がいいぜ」

「気をつけて！あいつ多分魔法を使うよ！」

「椿！！モード「妖刀」だ！！一気にかたをつけるぞ！！」

「エ？でもまだ扱えないわ」

「30秒もてば十分だ！！いくぞ！！」

「は、はい！」

「ゴク・・・あの小僧強い！」

フリーはブラック☆スターを見て、そう思った

「「魂の共鳴！！」」

「なんと！共鳴率も安定している！！あれがブラック☆スターの魂！！」

剣心はブラック☆スターの成長に驚いた

ダッ！！

「テメェ何、橋のセンター陣取ってんだよ！！」

ブラック☆スターはフリーに向かって走った

「ウールツフウルフブスウルフウルブズ」

パシャ

「氷錐体!!」

「!!」

地面から氷の棘がてて来てブラック☆スターに向かった

「椿!!」

「はい!!」

シャツ

ガシッ

椿はブラック☆スターの影の実体になって氷錐体を止めた

「何!?!」

これにはフリーも驚いた

「くらえ!! 俺様奥義!!」

「!!?!」

ブラック☆スターはフリーとの距離を縮めた

「影☆星!」

星．．．ほし．．ほし．．ほ

「へぼし．．．」

ズボ．．

ブラック☆スターは大技を決めきれず、そのまま雪に向かって倒れた

ボン

「ああ．．だからまだ無理だって．．」

「10秒もたねえじゃん．．」

「強いかもしれないけど、あいつはアホだ」

マカとソウルは呆れていた

「さあて次だ」

ドス! メキッ．．．

「ん?」

フリーが向き直った頃には、ソウルの刃が胸を貫き、剣心の逆刃刀



が肩にめり込んでいた

「おっさん、油断しすぎ．．．ここは戦場だぜ？」

「奇襲はあまり好かんが、前回のコトもあるのでな、悪いが、早々にかたをつかせてもらおう！」

「やった!？」

しかし、フリーは

「いかんいかん．．．体質柄ついつい油断してしまう．．．」

ケロッとした表情で言った

「ソウル!! 剣心さん!! 逃げて!!」

マカは二人に叫んだ

ザッ!

「何だあいつは!?! どうなってる!?!」

「あれを見て!! 傷がふさがっていく．．．」

ソウルと剣心によってつけられた傷は煙を立ててきえていた

「そりゃあふさがるさ、俺は不死の一族だからな」

「「不死の一族!?!」」

「本で読んだコトがある．．．どうりで魂がごちゃまぜなはずだ！」

マカは思い出した

そして、フリーの雰囲気が変わってきた

「俺の本当の姿を見せてやる！！」

ゴオオオオオオオ．．．

「本当の姿？」

「そんな、本当にいたなんて！？ 魂の形状も変わっていく．．．間違いだよ！！確か、魔女の女王の眼を奪った．．．」

「おおおおおん！！！！！！！！」

伝説の狼男！！！！

「不死十魔眼Ⅱ最強！！」

フリーは狼男の姿に変わった

「ソウル!! 鎌に変身して!!」

「オウ!!」

(大丈夫!! 私とソウルには魔女狩りがある!! 退魔効果のある  
魔女狩りなら不死も倒せる!!)

ガシッ!!

「いくよソウル!!」

「おう!!」

しかし、鎌を握ったら

じゅわわわわ...!!!!

「熱っ!!」

ガシャン

握ったところから煙がでてきた

「何やってんだ!? マカ!!」

「ソウルが熱くて持てない...」

「何!?!」

「マカ殿... ソウル殿... もしかして... お主ら...」

魂の波長があってないのか？」

一方、橋の隅っこにはエルカがフリー達の様子を見ていた

「ゲコ」

そしてメデューサは

「エルカ・・・しっかり目を離さないで、あなたの目を通して水晶越しで観察するから・・・フフ・・・さあ、ソウルライター、この逆境の中、あなたの体内が持つ黒血はどう反応するかしら？」

さあ実験開始よ！！！！

「オウウウウウン！！！！！！！！」

ロンドンの橋の中心で狼男の咆哮が響き渡った

）  
第12話  
完  
）

第12話 解禁!! 魔眼の男 振れる二人の魂(後書き)

京次「やつ火傷できた・・・」

ほたる「出して! ついでに狂も!」

京次「分かった、分かりました!! 出すよ! 出ればいいんだろ!」

ほたる「本当?」

京次「実は、近いうちにスペシャル企画が用意されてるから、その時もしかしたら出るかもしれん!」

ほたる「いつ?」

京次「・・・考え中・・・;」

ほたる「(ブチ!!)・・・ヘルクラッシャー!!」

京次「ぎゃああああ!! 次回!! ソウルとマカが大ピンチ!! そして、剣心ついに牙を剥く!! どんな結末が!? 第12話、お楽しみに!!」

### 第13話 不死の狼男 vs 人斬り抜刀斎（前書き）

京次「やっとテスト終わった〜!!!!!!」

幸村「お疲れ〜♪どうだった？」

京次「あはは〜簿記死んだ〜♪」

幸村「ありゃ〜一番肝心な所を、まあまあ♪ドンマイ、次があるさ  
♪さあ、飲も飲も？」

サスケ「あ〜作者が壊れたから、このまま第13話始まるぜ；  
幸村!!! 未成年に酒のますな!!!!!!」

才蔵「ゆっ幸村様あ．．．；」

### 第13話 不死の狼男 vs 人斬り抜刀齋

さあ 見せて見なさい．．．．黒血の反応を．．．

「ぐるるるる．．．．」

「マカと魂の波長があわないだって．．．．？」

「スー．．．．ハア．．ハア．．．．ハア．．．．」

マカは呼吸を乱していた

「マカ殿！！」

（苦しい．．．．考えたコトもなかった．．．．息の仕方ってどうやるんだっけ．．．．？）

「武器の使い方ってどうやるんだっけ．．．．？」

オオオオ．．．．

「お前らが作る基準は邪魔だ！！ ああ！ 目障りさ！！ 全員まとめて八つ裂きにしてやる！！」

シャッ！！

「闘狼拳！！ いくぞ！！」



フリーは独特の構えをした

「あううううん!!!」

ドス!!!!!!

「!!!」

マカの肩にフリーの爪が深く入った

「マカ!!!」

(あの狼男・・・早い!!!)

剣心はフリーの動きの速さに驚いた

くいん

「氷柱体!!!」

ガコン!!

「エ!?!」

飛ばされたマカの後ろに氷の柱をだした

ドン!!!

「ほう!!!」

ジャラ

そして、フリーの足枷についでる鉄球を氷柱体にむかって振り回した

「わぁ!!」

バゴンッ!!!!

氷柱体は粉々に砕け、辺りに飛び散った

「魔眼砲!!」

バババババババツ!!!!!!

魔眼を使った砲撃をしようとした

「!!」

しかし

ドス!!!!

「ぐほっ!?!」

「な・・・」

いきなり氷の棘が出てきてフリーの身体に刺さった

「ガッデム!! シット!! 出す物と出すトコ間違えた!!」

「………」

「でも大丈夫!! ああ!! 平気さ!! だって俺、不死だから。」

「闘狼拳、魔法、不死……ドジっぺな所は否めないけど、強い………」

監視をしているエルカはフリーに対し、呆れつつ、感心した

「200年の監獄ライフがたったようだ……イマイチ魔法が上手に使えない」

シュウウウウ……

傷を消しながらフリーはそう言った

「マカちゃん! ソウルくんが使えないなら、私を使ってください!」

椿はマカに自分を使うコトをすすめた

「エ!?……だけど、私が即席の暗記職人になっても、あの狼男は倒せないよ……」

すると

ザッ!

「ならば、拙者がいく．．．！！」

剣心が前に出た

「剣心さん！？」

「拙者があの狼男の相手をする．．．」

「緋村さん、勝算はあるんすか．．．？」

ソウルは聞いた

「マカ殿みたいに退魔の波長があるわけではないが、不死にも穴があるはず．．．ならばそれを探すまでだ」

そして剣心はフリーの所へといった

「サムライか、一度戦ってみたかった、ああワクワクしてきたさ！！行くぞ！！」

「来い！！」

「ほおうあ！！！！」

フリーは剣心へと攻撃をしてきた

（なるほど、確かに早いな．．．だが、見きれぬほどではない！！）

サッ．．．

剣心は真半身になってフリーの攻撃をかわした

「うお!？」

「飛天御剣流……」

龍巻閃!!!!!!!!!!

バシィッ!!!!!!!!!!

逆刃刀がフリーの背中に打ち込まれた

「決まった!？」

しかし

「不死!!!!!!」

「くそっ、厄介でござるな……」

そしてフリーは詠唱を唱え

「ウールツフウルフブスウルフウルブズ」

手からつららをだした

「あおっ!!!」

ウン!!!

そして剣心へと投げた

ガン!!

「なんの真似でござるか!？」

当然、剣心は刀で弾き飛ばした

「氷球体!!」

「なっ!？」

剣心がつららを弾いているうちに、フリーの詠唱は終わっていた

ゴッ!!!

そして、氷球体を持ち上げ、剣心へと降り落とそうとした

「あんな大きい氷を．．．くっ．．．!!!」

ドスン!!!

ズザザザザザー!!!

剣心はギリギリかわすことができた

「恐ろしい怪力だ・・・」

するとフリーは氷球体をおろした後、そのまますり足で全身した

「まだだ!! サムライ!! うおおお・・・!!」

そして氷球体を叩きつけようとした

「氷枷弾!!」

しかし剣心は

「・・・お主はこの程度でござるか・・・?」

「何!？」

バツ

剣心は氷球体に突っ込んで行った

「そのまま死ぬつもりか、サムライ!!」

そして、当たるか当たらないかの距離になった瞬間

ググッ

身を飛びながらひるがえし、氷枷弾をかわした

「なんだとお!!?」

そのままフリーへと近付いた

「飛天御剣流・・・」

龍巻閃 旋!!!!!!

再びフリーに攻撃した

「ぐう!! だが、俺は不死・・・」

「知っておる・・・」



「何！？速い・・・」

剣心はすでに次の攻撃体制に入っていた

「お主の不死とやらはたいしたものだ・・・しかし、拙者の見る限り、全で一、二撃の攻撃からの回復・・・ならば、一度に複数の傷ができたらどうでござるか！！？」

「まさか、今までののはそれを確認する為にか！？」

「終わりだ！！不死の狼男！！ 飛天御剣流・・・」

龍巢閃！！！！！！

ズバババババババツ!!!!!!!!!!

全ての急所に狙いをさだめ斬撃をくりだした

それを見ていたソウルたちは

「すげえ！あれならいくらなんでも無事でいられるわけねえ!!!!!!!!」

そしてマカは

「…………ソウル…………」

「あ？　なんだよ？」

「……………すぐに鎌に変身して……………」

「はぁ？　なんでだよ？　しかも、今の俺たちじゃ……………」

「早く！！！！」

マカはソウルに変身するようにいった

そして、剣心は

「ハアハア……………決まったか……………？」

シュウウウウ……………

「ふう……………なかなか効いたぞサムライ……………」

「なっ！？　あれだけの傷を負ってもまだ回復するのか！？」

「ああ、そうさ！　だって俺、不死だから！！」

龍巢閃によってつけられた傷はもう回復してあった

「不死の狼男よ、一つ聞こう。なぜお主は死武専と対立するのでござるか？　拙者たちがお主に何をした？」

フリーは答えた

「死武専……………死神が作る基準、悪を作り裁く基準……………」

「基準……？」

「ああ、傲慢な基準さ……世界中のオオカミの運命は人間の基準に差で左右される、人間の生活をおびやかせば殺され、それで数が減れば保護される……」

フリーは表情を厳しくしてそのまま言った

「そんなクソみたいな未来なんてイラねえ！今度は俺が裁く番だ、俺の怒りは自然の怒り！！」

「悪魔は狼の姿をしていつもじゃあくな目で人間を見張り、神の子羊であるくそ共を狙ってさまよい歩く……」

オオカミは悪魔！そう言ったのも人間だろ！？どこぞの家に逃げ込んだらどうだ？

レンガだろうが木造だろうが藁葺きのだろうが全て吹き飛ばしてやる！！」

氷柱体を複数出しそれに乗りながらフリーは言った

それを聞いた剣心は

「確かにお主のいうことは正しいかもしれない……急に基準を作られては納得いくわけがない。しかし、だからと言ってここで死ぬわけにはいかん……この子達を殺させるわけにもいかん。拙者が生きてこの子達を返さないといけない」

そう言いながら剣心は抜刀術の構えをとった

そして、再び戦いを始めようとしたら

ジュウウウウ・・・

「「!!?」」

どっかから何かが焼けるような音がした

そして、音のする方をみると

「んんん・・・」

「マカ殿!!」

必死に鎌を握るマカがいた



### 第13話 不死の狼男 vs 人斬り抜刀齋（後書き）

京次「イエーイフラグクラッシャー京次一気飲みするぜ!!」

幸村「フラグクラッシャーって何?!!?」

サスケ「やめろよ!! 死ぬぞ!!!」

才蔵「え、えっと次回予告を作者代理として行います。

次回! 黒血覚醒!! 実験結果はいかに!!? 不死の物をどうやって倒す!!

次回をお楽しみに!!」

幸村「才蔵も飲んじゃえ!!」

才蔵「いやあああ!!」

サスケ「もうどうにでもなれ...」

## 第14話 この壁を越えてみせる!! (前書き)

京次「そろそろ2011年も終わるな．．．」

シエル「何いつてるんですか! まだ12月始まったばかりじゃないですか!!」

クリスマスだってあるんですよ!!」

京次「え! ? クックリスマス．．だと．．．」

シエル「そうですっ!! 本来キリスト様のお誕生日でもあり、当代天皇陛下のお誕生日でもあるんです! それのもと、私たちは家族や恋人同士でこの日を祝い．．．」

京次「かのじよ．．．」

シエル「え?」

京次「今年も．．彼女できな．．．」

シエル「わー!! わー!! そそそそれでは、第14話をお楽しみください!!」



第14話 この壁を越えてみせる!!

ジュウウウウ・・・

「んんん・・・」

「お前・・・手が・・・やめろ!! 無茶して勝てる相手じゃねえ!!」

しかしマカは耳をかさなかった

「くそおお!!」

ドス!

「俺は不死だぞ!!」

ゴッ!!!

マカはフリーに殴り飛ばされた

ザッ!

「ちくしょう!! ちくしょう!!」

「マカ殿!! 冷静になれ!! ただ突っ込んで行ったら、やられる

「ただだ!!」

「剣心さんは黙ってて!! 強くなるんだ!! こんなトコで負けられない!!」

すると、次はソウルが言った

「バカか!! そうやってほえて鼻息荒くして強くなれるんなら、みんなやってる!!」

「うるさい!! ソウルがもたついたコトばかり言ってるから魂の波長が合わなくなっただんじやない!! COOLな男になるんじゃないの!? 女々しいやつ!!」

(強くなれ!! オイラが導いてやる・・・)

「黙れよ!! うるせえな!! マカに何がわかるかよ!!」

すると、二人の様子を見ていた椿が

「いい加減にしないで!!!!!!!!!!」

「「.....!!」」

二人に一喝をした

「自分の主張をする前に、相手の意見を聞かなきゃダメでしょ!!  
それで自分の意見が通らなくて腹を立ててたら何も始まりません!  
!」

「……」

「……何だよ、椿のパートナーなんかモロそういうタイプだろ。  
……」

ソウルは雪に埋れているブラック☆すたーを見ながら言った

「……ブラック☆スターは根っからおバカだし……それに私  
もおバカでいいと思っています。

これが私たちコンビのスタイルですから♪  
アハハ……;」

椿は苦笑いしながら2人に言った

「マカ殿……!」

「剣心さん……」

今度は剣心が言った

「先ほどお主は「強くなりたい」と言ってたでござるな……。  
では、「どの様な強さ」という具体的な目標は持っておるか?」

「目標?」

「そう、ただ強さばかりを求めるのではなく、誰かを守るほどの強さや、誰にも負けない強さなどというようなモノを求めないといけないのではないのか？」

剣心はニツコリと2人に言った

「・・・・・・・・」

（私なりの魂を強くする方法があるように・・・・・・・・私「たち」なりの強くなり方もある・・・・・・・・。ソウルに追いつくコトばかり考えてた・・・・・・・・）

ジュウウウ・・・・・・・・

どんなに暑くてこの手が溶けようと・・・・・・・・わたしはソウルと強くなりたい!!!!

コオオオオ!!!!

マカの魂が強く輝いた

「バカだぜ・・・俺なんてたいした「力」も持っていないのに！  
何エラそうに制限つけようとしてんだよ！！」

ソウルは二ツと笑いながらいった

そして、ブラックルームにて

「オイ！鬼！！ どこにでも導いてしろ！！  
お前のプラン、ぶちこわしてやるぜ！！」

すると小鬼は

「おいらについて来ない、狂気と歓喜が待っているぜい！！」

「ス・テ・キ？」

「「魂の共鳴！！！！」」

「はあああああ！！！」

共鳴する2人を見ていたメデューサは

「クス♪いいわ、サイコーよ！」

黒血が動きだしたみたいね・・・」

不敵に笑っていた

オオオオオ・・・

「すごい・・・共鳴率がハンパじゃ無い・・・」

椿は2人の共鳴率に驚いていた

そして剣心は

「狼男よ、すまないがお主との決闘はここで終わりだ！」

元々はマカ殿たちの課外授業であり、拙者はあくまで補助役だからな・・・」

「そうか・・・まあいいさ、次にあった時に決着をつけよう！」

フリーは少し残念そうに答えた

そして

「ガアアアアア!!!!!!」

ソウルは咆哮をあげた

「な……何？この感覚」

（ソウルに喰われている!!!!!!）

それをみていたメデューサは

「黒血を持つ武器は職人の精神まで侵食する……さあ!!!!!!どんどん共鳴率を上げるのよ」

そう言った

ソウルは意識の中

「クソ……意識が持っていかれそうだ……。  
大丈夫!!!!!! 持ってかれやしねえ!!!!!!」

唇の端を引っ張りなんとか意識を保っていた

ビッ!!!!!!

魔女狩り！！！！！！！！！！

ダッ！！

「行けえ！！マカ！！」

「うん！！」

2人はフリーに向かって突進した

「退魔の波長か！？いいだろう！！  
ウルッフウルブスウルッフウルブス」

狼尾壁！！！！！！



フリーは前に氷のように固められた巨大な尻尾を立てた

（こんな壁・・・越えてみせる！！）

ガンッ！！！！

魔女狩りと狼尾壁が衝突した

「ウオオオオオオ！！！！！！」

「グラァァァ！！！！！！」

ゴン！！

マカは鎌の柄に頭を当てた

（痛くない！！熱くない！！怖くない！！辛くない！！負けるもんか！！）

二度とあんなコト起こさせない！！）

ゴリゴリ！！

そして頭で鎌を押した

（強くなるんだ！！！！）

スパアッ！！！！！

6文字狩り！！！！！！

魔女狩りを斜め上から振り下ろし、6のじを描いた

「があっ……はああ……何だとおお」

いくら不死でも、退魔の波長はダメージを受けた

「やったか！？」

「まだ浅い！！」

するとマカは

タッ！！

フリーに向かって走った

「お前はあー!! 私がああ!!」

ガシッ!!

そして足を掴まえた

「な・・・!!? 職人が武器を捨ててタックルだとお!!?」

「マカちゃん!!」

「マカア!!」

ドッ!!!!!!

「落ちろオオオオオ!!!!」

フリーと共に橋から落ちた

「マカア!!」

ガシッ!!

ソウルはマカの足首を掴まえた

「ソウル!!」

「く．．．あれ？意外と足細かったな」

ソウルが冗談を言っていると

ガリガリッ!!

「ぐああ!!」

「何だと!!?」

マカの肩に氷状の長い爪がひかかった

「俺が一人で落ちると思うか!? ああ、落ちないさア!!」

「マカ．．．クソ．．．」

（ぜってえはなさねえぞ．．．!!）

スパア!!

「!!?　ぐわ!!」

フリーの腕がいきなり両断された

「手裏剣!!」

そして

「やああああ!!!!!!  
飛天御剣流」

龍縫閃!!!!!!

ピシァアアア!!!!!!

落ちるフリーに追いつちをかけた

「椿殿!!!!」

「はい!!!!」

ジャラ・・・・・・

ギョーン!!!!

鎖鎌で落ちる剣心を掴まえた

「ひゃっはあああ☆  
やっぱ俺様がいねえとダメだな☆」

ブラック☆スターはみんなにそう言った

落ちてるフリーは

「フハハ!! まだ終わらないさ!!  
ウールツフルブスウルフルブス」

(空中に氷柱体を出現させ、それを蹴ってはしに戻る!!  
できるか? そりゃあできるさ!! 俺の身体能力があればな!!)

「あいつ!! もどって来る気か!？」

ソウルは警戒した

しかし

パキッ!!

「!？」

フリーの周りに氷水が出現した

「あ。出すところ間違えた・・・」

パキン!!!!!!

ドップン!!!!!!

フリーは氷付けになって海へ落ちていった

それを見ていたエルカは

「最後にまたドジを踏むとは．．．；」

同じくメデューサも

「フッフ．．．あゝ面白かった

クス♪確信したわ．．．黒血の研究をすすめれば先代紅の王を復活  
させられる！！」

意味深な言葉を残した

そしてロンドンの深海

ゴポ．．．ゴポ．．．

「ビビったね！！こんなに体がなまっていたとは．．．リハビリ、  
ああ！！まずはリハビリさあ！！」

氷付けの中フリーは言った

そしてマカたち

「大丈夫か？マカ……」

「う……うん。ありがと……／＼／」

ソウルはマカの手を見た

「その手の様子だと、当分は俺が料理当番だな」

「へへ……うまく作れよ」

「もちろんオンリーのりだぜ」

二ツと笑いながらいったソウルは言った

「ゴホッゴホッ!!」

マカは急に咳き込んだ

「!？」

そして、手を見てみると

「黒い……血……？」

それらしきものが、マカの手の下についていた



一方、どこかの町にて

「どうしよ、この人たちとの接し方がわかんないよお」

「喰え!!」

「うん」

クロナがいた

「うわ、なんだあいつ!!」

「剣を持っているぞ・・・」

住民たちがクロナの存在に驚いていた

「悲鳴共鳴」

「ピィギェアアアウイイイエアオオオアイエイア!!!!!!!!!!」

スクリーチャ！！！！

ズドドドドツ！！！！！！

顔を持った黒い衝撃波が住民たちを殺した

「うじゅー．．．これで誰とも接しなくていいや」

クロナは道で寝ながらいった  
すると、ラグナロクは言った

「オイ！」「教授」のトコはもうすぐだぞ！！！」

第14話 この壁を越えてみせる!! (後書き)

剣心「ついに来たでござるな．．．」

京次「そうですね．．．次回!!!」

燃えろ死武専生!!! 炎の超筆記試験!!!!」

マカ「キターーーーー!!!!!! 今度こそ絶対一番とってやる!!!」

当麻「やべえ．．．全然復習してねえ．．．」

辰怜「たわけ!!! 首席は常に辰怜にあり!!!」

????? 「はっ!!! 哀れだなあ．．． 1番はいつだって俺なんだよ!!! 三下がああ!!!!!!」

京次「それではお楽しみね♪」

## 第15話 炎の超筆記試験 前編（前書き）

京次「今回は新キャラがけっこう登場するぜ！！けっこう疲れたぜ！！！」

四方堂「お疲れだなん♪お前、たしか簿記だけ赤点とっただなん？書いてて辛かったぞん？」

京次「・・・もうその話しやめましょう・・・泣きたくなってきました・・・」

四方堂「あちきを序盤で出さなかった罰だぞん！！気が晴れるまで苦しむだなん♪」

京次「ちくしょう！！第15話炎の超筆記試験をどうぞ！！」

## 第15話 炎の超筆記試験 前編

死武専にて．．．

それは、遊庵の言葉によって生徒達の火がついた．．．

「さてお前ら、分かっていると思うが、この時期が来たな．．．どうだ？勉強の方は、はかどっているか？

上級生、下級生の死武専共通試験．．．「超筆記試験」がいよいよ一週間後に迫ってたぜ！！」

ザワザワ．．．！！

驚いたり、不安に思ったりする生徒達の中、マカは．．．

（テストテストテストオー！！  
待ってました♪このために一ヶ月前から用意してきたもの！！）

内心ウキウキしていた

「今回のテストは、シュタインを中心とした教師全員が議論を重ね、誠心誠意を込めてつくった。

お前ら、残り一週間満点を目指して頑張りな！」

KILL〜コンカ〜ンコン！

「それじゃ、解散〜!!」

今日の授業が終わった

「志貴〜頼む〜! 勉強教えてくれ〜!! お前、中間テスト30番だっただろ!」

当麻は志貴にねだった

「教えてあげたいのは山々だけど、俺も貧血で早退が多かったから解らんとくろ多いんだよな・・・」

2人がそう話していると

「何よあなた達、そんなだと赤点取るわよ?」

「おっ、御坂だ! 久々だな?」

「遠野さん酷い!! 今週ずっと学校いたのに!;」

御坂は少し傷ついた

「何だよビリビリ? 今回も5番とるのか?」

「うるさいわね! 当麻! 今回は絶対1番とってみせるんだから!!」

「5番でも十分すごいけどな・・・;」

志貴は御坂に対しそう思った

すると、そこを通ったマカは

（・・・そうなんだよね・・・中間テストは御坂ちゃんに負けて、私、6位だったんだよね・・・）

ちなみにシエルは3位である

すると、ソウルが急に言った

「知ってるか？超筆記試験で一位とった奴がデスサイズを作るっていうジンクス」

「何！？マジでか！？」

それを聞いたブラック☆スターは驚いた

そして、マカは

（ママも学年トップだったもん！！私もトップをとらなきゃ！！いわば宿命ね！！）

完全に燃え上がっていた

「よし！！俺様も一位になって椿をデスサイズにしてやるぞ！！」

「はい！」

ブラック☆スターもやる気になった

「私たち始めてのテストだもんね♪頑張ろうね」

「テストがあるから勉強するわけではないのだぞ、リズ、パティー」

「何だよ！エラそうに・・・」

キッド組も、頑張ろうとしていた

（そっか・・・今回からキッドくんもいるのか。くっ・・・今回はレベルが高いな・・・頑張らなきゃ・・・）

マカはそう思い、帰ろうとしたら・・・

カツ・・・カツ・・・カツ

「！！」

反対側の通路から、杖の音が迫ってきた

「この音は・・・」

マカたちは音の方へと振り返った

すると

「ああ？・・・何なんですか？この騒ぎ様は・・・？」



白髪の青年が現代風の杖を片腕でつきながら歩いてきた

彼の名は一方通行<sup>アクセラレータ</sup>

とある魔術の禁書目録のキャラで、学園都市の第一位である。

ココでも同じく、一位の常連であり、デスサイズと同じ扱いをうけている

「オッス、第一位！今帰りか？」

先に志貴が口を開いた

「オイ！遠野、もう一回聞くが、なんだ？この騒ぎ様は？」

「なんか、1番をとったら、デスサイズを作れるっという噂とやらなんかやらで、みんな張り切ってるんだよ・・・」

志貴がそう言うと、一方通行は

「はっ！！下らねえな・・・。全員無駄な努力をしてるって事になるじゃねえか・・・！！」

「何だとテメェー！！」

一方通行の発言にブラック☆スターはキレた

すると、一方通行は言った

「おめえ等、今回のテストはいつもと違うのはなんだ？」

「ジンクスがある事か？」

ブラック☆スターがそう言う

「バカか．．．．．良いか？今回のテストはな、『5教科＋魂学』を一回のテストにまとめてあるんだよ！つまり、一時間のうちに5回ぐらい頭を切り替えなきゃいけないんだぜ？」

「何だその無茶苦茶なテストは．．．；」

テストの内容に志貴は呆れた

「しかも、下級生の頃に習ったモノも出てくるから復習してねえと、痛い目を見るんだわ．．．」

「だんだん俺に対して不条理な内容になってきたな．．．1番どころか赤点をとるイメージしかできねえんだが．．．；」

当麻はだんだんと焦ってきた

「解るか？とってみようと思ってとれるほど甘いもんじゃねえんだよ！

ま、とれるとすれば、入学してから今までずっと1番だった俺ぐらいいだな！！！」

一方通行は自分の頭をトントンと指でつつきながら言った

「ふざけんな！！結局自分を自慢するためにきたのかよおめえは！！！」

「自慢じゃねえ、現実を教えにきたんだ。」

そして一方通行はマカ達の間を通り過ぎ

「ま、それでも頑張るんなら止めはしねえ……せいぜい頑張るんだな！三下共！！」

そう言い残し、帰って行った

「クソ！！白髪野郎が！！絶対負けねえからな！！」

帰って行く一方通行にブラック☆スターは叫んだ

「私も負けてられない！今からでも勉強しなきゃ！！」

そう言うのと、マカたちは急いで帰って行った

ザッ！

（マカ~~~~~！！）

ヒラヒラ~~~~~・・・

後ろからスピリットがマカに向かって手をヒラヒラさせてた

「・・・・・・・・・・;」

それを見ていた剣心は聞いた

「・・・・・・・・スピリット殿、何をやってるでござるか?;」

「オウ剣心!俺は今、マカに頑張れのエールを送ってるんだ!」

「そ、そうでござるか・・・・・・・・;」

「ん?どうした?」

「い・・・いや、別に・・・続けてくおれ・・・」

「オウ!!」

ヒラヒラ~~~~・・・・・

そしてそのままスピリットはエールを送り続けた

テスト3日前

マカとソウルのアパートにて

ドサドサ！！

「にゃあ？」

子猫姿のブレアの前にたくさんの参考書が置かれた

「よし！！ラストスパート！！ガンバるぞッ！！」

「ねえ、マカ、テストって面白いのお？」

「うん！今まで自分が学んできた事が試せるのよ！自分の順位も点数で簡単に解るし、ゲームみたいなもなんだ！

それに、今回は『1位とったものがデスサイズを作る』っていうリンクスがあるの！

デスサイズを目指す職人と武器は頑張らないわけにはいかないよ！」

マカはにっこりとそう言った

「ふうん、にゃるほどねえ・・・」

しかし、ブレアはさほど興味のない反応をとった

一方ソウルは

カリカリ．．．

「えーと、ここをこうして．．．あ、緋村さんたしか、ココはこうだって．．．くそ、遊庵の奴、ここまで出すか？普通」

ギイイイ．．．

「にゃんだア、ソウル君も勉強なの？」

「オウ、ブレア、取り込み中だ、邪魔すんなよ．．．」

ボンッ

「やーん！ブレア退屈うー！！」

「ぶほっ！！！！／／／」

ブレアは薄い水着姿の人間になった

「ブレアで遊んでえー？」

そして、その大きな胸をソウルの顔にパフッと押し付けた

「．．．．．！！！！／／／」



ブラック☆スターは……

「498……499……500!!!」

……なぜ腕立てをやっていた……

バツ!!

「次の問題ができなかったら腹筋千回だ!!えーと、何々??」

「……………」

ジ…………

「……………」

ガコンガコン!!!

「ちくしょおおおおお!!!」

「もう罰ゲームはやめて勉強しよ……教えてあげるから……」



キッドの家（トンプソン姉妹在住）  
死刑台邸

カチャ・・・カチャ・・・

「勉強だ！！！！」

「やったね♪お姉ちゃん！！」

リズはOL風の姿になった

「オー！！！！」

ペラペラ・・・

じい・・・

2人の元にキッドがやって来た

「うむ！！リズもパーティーも、勉強に励んでいるようだな！」  
しかし

「！？ 何やってんだお前ら！？？」

リズは鏡に向き合い、パーティーは寝ていた

「アハハ・・・何か眉毛が気になっちゃって・・・」

「眉を整えていたのか！？右と左を揃えればいいのだな！！俺にやらせてくれ！！」

「ヤダよ！！この前キッドにやらせてどんだけかかったと思ってんだ！？」

「3日だっけ？」

「1ヶ月だよっ！！！！」

「今度は手早くする！！頼む！！」

キッドは手を合わせて頼んだ

「もうしょうがないなあ・・・；」

ガシャ！！

「よし！！まずは設計図からだ！！」

「死んでくれ」

「コンセプトはどうする・・・？何かを訴えかける・・・そんな眉毛にしたい・・・」

「そこまですごい毛は持ってない・・・」

そう言い、リズは再び本当向き合っていた

## 遠野家屋敷

「すまないな、秋葉」

「全く．．．妹から勉強を教わってどうするんですか．．．兄さん」

彼女の名は「遠野秋葉」志貴の妹であり、遠野家の当主である。ここでは、死武専の生徒であり、志貴同様、エリート生である

「そういえば秋葉、お前、前のテスト25番だったよな．．．」

「はい、そうですが．．．」

「あちゃゝ知らんうちに負けてたか．．．ホント、兄として情けないな．．．」

すると秋葉は

「なら、賭けをしませんか？兄さん？」

「え！？；」

「もし、私と兄さん、どちらかが勝ったら、勝った方が負けた方に命令をできるという、単純な賭けを．．．どうですか？」

「うーん、リスクは高いが、面白そうだな．．．いいだろ、この勝負のった！！」

志貴は秋葉と勝負することにした

すると秋葉はニツと笑って

「いいのですね？私負けませんから！！」

そう言い、自分の参考書に目を向けた

（秋葉ずいぶん乗り気だな．．．何が望みなんだ．．．；）

志貴は不思議に思い、再び勉強を再開した

テスト前日

カポーン．．．

「ふゝ、ついに明日か．．．」

椿は風呂に入ってた

「あのブラック☆スターがマジメに勉強してくれるなんて嬉しいな  
♪あの子のことだからそろそろお腹が空く頃かしら．．．お風呂  
からでたらご飯作ってあげよ♪」

そして

「ブラック☆スター、少しでもおにぎり食べて．．．あれ？」

ひゅううううう．．．

すでにブラック☆スターはいなかった  
窓を開けっ放しにして

## 落人村

「ひゃっはあああ!!」

村の中から叫び声がこだました

「はっ! いけね．．．つい叫んじまった!!;」

案の定ブラック☆スターがいた

「そーっとそーっと．．．たしか辰伶の情報だと、遊庵がテストを管理してるみたいだな．．．」

ちなみに辰伶は前回2位である

「やっぱ俺様には地味な勉強はハマらねえ！暗殺者らしく、遊庵からテストを盗んでやる！！」

ぐうううう．．．

「腹減ったなあ．．．」

そして、遊庵と戦った広場の中心にて

「おお！！あんなトコに！！」

ガサツ．．．

「うしししし、これで俺様は神になった！！神の中でも満点だ！！ひやははははは．．．」

ビョーーーーーン！！！！

「はっ！？？」

ブラック☆スターの足元に綱がグルグル巻になり、木にひかかったそして

「やっぱり来たか．．．アホの中のアホが．．．」

「その声．．．まさか．．．ゆあ．．．」

バキバキバキ！！

「覚悟はいいな．．．？」

「ぎゃああああん!!!!!!!!!!」

一方椿は

「ブラック☆スター……どこ……」

いるはずのない、半殺しにされてる人物を探し続けた

そしてキッド達

「……キッドは勉強しなくていいのか!?!」



「俺は死神だぞ！魂学はおろか、一般常識など把握している．．．．  
というか、お前等こそしっかりやりたまえ！！」

「いけね、はみ出した．．．」

リズは指をいじりながら言った

「ぐう．．．．」

もちろんパーティーは寝ていた

マカとソウルは

「よし！！出来た！！へっへっへ．．．．」

ソウルは不敵な笑みをしていた

そしてマカは

ナデナデ．．．

「ゴロ．．．ゴロ．．．」

子猫姿のブレアを膝の上で寝かしていた

「なるほどねえ．．．よし！！やれることはやった！！明日に備えて寝よつと♪第一位、勝負だ！！頑張るぞおー！！！！」

真夜中を照らす月の下でマカは言った．．．

次回、試験開始！！！！



## 第15話 炎の超筆記試験 前編（後書き）

四方堂「赤点京次〜ピッチグソヤロ〜♪」

京次「やべえ、すげえくだらないのにイラつく．．．」

四方堂「それ程気にしてるんだなん♪  
まっ、次があるぞん☆それまで頑張れ♪」

京次「四方堂さん．．．」

四方堂「さて、次回予告だなん☆」

京次「あっ！！それ俺の．．．」

四方堂「次回！！試験がついに始まるぞん☆  
鎌職人の小娘は果たして1番とれるかん？

そして、ウニ坊主と白髪のおカマ野郎は作者同様赤点を取るのか？  
次回をお楽しみにしろん☆」

京次「やっぱ、この人最低だ．．．」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0308x/>

---

SOUL DEEPERS

2011年12月14日01時54分発行